るますのでよしました。幾度來ても牛が居てのれませんから、其の日はよしにしました。

四日目にはお父さんが、麻布の森元に居るおばあさんの家へ出かけました。そのうちに〇〇人さはぎになりました。お父さんはまだかへつて來ませんので、私共は心配して居ると、お父さんがしんげん袋をせをつて、こちらへ來ますので私は飛んでいつて、「おとうさんその中に何がはいつてゐるの」と聞きますと、お父さんは「これかこれはおばあさんの家でもらつて來たのだ」とおつしやいました。私はかつげないのにむりにかついで、小屋へかへつてさつそく明けて見ますと着物やキヤラメルばか貝のかんづめなどがたくさんはいつてゐました。よろこんですぐ食べますと、大へんおいしゆうございました。その日はそれで食物があるので、安心してすや〳〵とねてしまひました。

五日にはそこらに落ちてゐるきれくづをひろつて、足にくる〳〵まきつけ麻布のおばあさんの所へ行かうと思つて、弟をおぶつて出かけました。先づ相生橋を船で渡つて新佃をこえて、自分の家をさがしてあるきました。私の家は月島通三丁目五番地で學校のとなりでしたから、すぐわかりました。

やけあとにはペンキかんとばけつだけしかありませんでした。いつまで見てゐてもしかたがありませんから、おばあさんの家をさして一生懸命に歩きました。渡しばへ來るとお巡さんと、兵隊さんがゐて、「足はどうしたのだやけどか」と親切におつしやいましたので、「いゝえけたがありませんからまいたのです」と言ひましたら「さうかそんならよい」と言ひましたので、私は船につて向ふ岸へ渡つてそれから又、一生けんめいに歩いて、やうやく二時頃に日比谷公園につきました。そこで休んで持つて來たおむすびなどを出して食べてゐますと、兵隊さんが來て「水はありますか」と聞いたので「水がなくつてこまつてゐます」と云ひますと、兵隊さんは自分の水桶を出して、「そんならおのみなさい」とおつしやつたので、私はよろこんでそれをちようだいしてのみますと、さとう水でものんだ樣な氣がしました。それからお禮を言つて又て〳〵と出かけまして四時頃にやうやく芝公園に着きました。

方々家をさがす内におばあさんは、飯倉學校にゐると言ふ事がわかりましたので、そこをたづねて行つて見ると、おばあさんは地震で家の下じきになつたので、おきられないでくるしんでゐますので、そばへよらずに居ますと、今までうごけなかつたのに、おばあさんは私共が來たものですから、あんまりよろこんですぐ立てる樣になつて、いろ〳〵の用事をしてから、私共にいろ〳〵の話を聞きました。私は一々話して上げますとおばあさんは、「それは神樣の御引合せだ」とおつしやつて、大へんよろこびになりました。これから毎日いろ〳〵な用事をしたり、あそんだりして、一月ぐらいして十月一日やうやく新公園のバラックへ落ち着いたのであります。

我が家の悲運

バラックへ來てほつとした。翌日頃からお母さんは病氣にかゝりました。お醫者さんに見てもらひますと、赤痢だと言つて三日の日自動車で、大久保病院へつれてゆかれてしまつたのです。内では小さい子供が大ぜいで、仕方がありませんから、三歳になる靜世を日本赤十字社の福田會へあづけました。お母さんは八日の日の朝二時にとう〳〵なくなつてしまひました。私は聲をかぎりになきましたが、取り返しのつかない事ですから、あきらめてしまひました。

十日から飯倉學校が初まる事になりましたから、私はそこへおねがひして、二十日ばかりかよつて居ましたが、妹がうるさい子で仕方がないと言ふ事で、福田會からつれてかへつて一ばん小さい弟の猛をあづけました。なにしろ妹はやんちやんで私をはなしませんから、學校へもゆかれずに家で十一月二十日頃までゐましたが、仕方がありませんから妹を知つてゐる家へあづけて、學校へ行くことになりました。

一番小さい弟は震災後から、頭のはちがわれてゐる病氣でありましたが、これも又十一月二十一日に死にました。いつて見るとその死顏はさもくやしさうに、目をあいて齒をくひしばつてゐました。私は今でもその事を思ひ出すと、かはいさうでむねが一ぱいになります。

そのあくる日から學校へいかうと思ひましたが、一七日がすんでから行かうと思つて、休んでゐるうちに、私はしんぞうが惡くなつたので、一月の三十日まで休んでゐましたが、都合があつてこの芝浦學校へ上る樣になりました。長く休んだのでその月島學校に居た時のやうに出來ませんのでいつも月島の事を思ひ出しては、なげいて居りますけれども、こんなありがたい學校へおせわになるやうになつたのは、私の第一の仕合せだと思つて居ります。

一月十五日の地震

麻布區　麻布尋常小學校　第五學年男　寺川文夫

目がさめた。家はぐら〳〵とゆれて居る。「アツ地震だ？」此の地震は帝都の曉の夢を破つた。僕はがばとはね起きて外へ出た。すると同時に電氣がきえて、東京は又もや眞暗となつてしまつた。しばらくして地震はおさまつた。

青年團の人が急しさうに往來する。隣の家ではらうそくを立てたらしく、あかりがもれて來る。お父さんが着物を持つて來てくれたので、それと着かへて居る内に、東の方が白んで來た。家の西隣りのあき地でたき火を初めたので、僕はそれにあたつて明かるくなるのを待つた。「號外々々」と外を走つて來た。買つた人のを見ると震源地は丹澤山奥で、東京市は山の手がひがい最も多い

さうである。

春日局

麻布區　麻布尋常小學校
第五學年女　阿部光

德川將軍中、聰明勇武幕府三百年のいしづゑを固からしめ、繁榮の基をなせるは、三代將軍家光なり。されど家光が芳ばしの天資をして、双葉の頃よりみがき、一層の香を放たしめ幕府有數の英君となせしは女丈夫春日局なり。

局は名を阿福とよび、明智光秀の將齋藤内藏助利三が女にて、世は戰の血なまぐさき天正七年こゝのころをあげたり。長じて佐渡守稻葉正成に嫁し、三男をあぐ。正成故ありて浪々の身となり、阿福も是れに從ひ、生國美濃に寂しき日を過す。昨日までの榮華の夢を追ふことなく、貧苦をつゆいとはず、忠實につかへたり。いはゆる彼女が男勝りの雄々しき氣性は、此の一事にても明かなり。

慶長九年時の將軍秀忠に、嫡男竹千代生るゝに及び、阿福召し出されて乳母に上る。

久しき間、佗しき明け暮れを過し來りし阿福は、灯の光華やかなる千代田の城にあり、榮華は心の儘になるべかりしを、心奢らず竹千代が教養に一身をゆだぬ。

まもなく竹千代が弟國千代生る。兄の剛氣なるに引きかへ、才あり敏捷なれば、父母の寵深く遂には三代將軍になさんとの意あり。

局深く之を悲しみ、伊勢參宮と稱し駿府におもむき、家康公に告げぬ。家康驚き江戸に至り、秀忠夫妻をいましめ、竹千代の立場を明かならしむ。局が喜びいかばかりなりしならん。

かくて二十歳の時家光職をつぐ。局が苦心の甲斐ありて、諸大名を制し、其の英斷を以て事にあたり、德川の基を定めたり。家光局の恩を忘れず、大奥の取締りとなす。嚴と慈とを以て下の者を遇し、質素儉約をまもりて常に綿服を用ひしとか。我等の學ぶべき事ならずや。

寛永六年後水尾天皇に拜謁を給ひ、三位に叙せられ春日の名を賜はりぬ。局の名譽此の上もなし。晩年に至りて病におかさる。

家光公親しく見舞ひ藥をすゝめられしも用ひず。「先年上樣御病重らせたまひし時、恐れながら我身御命に代り奉らんと東照官に祈りし時よ、命はなきものと存じ居り候」と。かくて寛永二十年暑去りやらぬ九月十四日、六十五歳を一期として千草のつゆとぞ消えゆきぬ。

嗚呼烈女阿福はゆけり。されど局の身死すとも、内に公を助けし勳はその名と共に永久にかゞやかん。

夜警の一夜

麻布區　南山尋常小學校
第五學年男　保坂正雄（十三歳）

「保坂さん夜警の時間が來ましたよ」と戸外から前の北さんが呼びに來た。「御苦勞さまおくれてすみません」と言ひながら父はレーンコートをひつかけて、ひようし木を手に持つて靴をはいて外へ出た。僕も父と一しよに外へ出た。外は又一そう冷い風が吹いて寒い。暗いろぢをまがり出ると父はなれないひようし木をうち始じめた。ひやうし木の音は靜かな夜ふけの町を遠く〳〵ひゞいて行つた。月は黑雲を押破つて屋根を照し始めた。北さんのおぢさんは「かういふ事は一度はならつておいてもよいね」と父に言葉をかけた。父は「これから冬になるとほねだからね……でも燒けないから、これだけは良いですよ。」と言葉をかへした。又ひようし木をかち〳〵とうち出した。遠くの方にも詰所の赤いちやうちんが、ふら〳〵動く。コケコツコーと一番鷄が鳴き出した。さつきから二時間もかゝつたらう。寒い風は又吹續く。ふと僕は「燒出された人達は此の寒空にこほして居るだらう。」と思つた。夜はしら〳〵と明けはなれ、旭はかつと金色の光をはなつて上り始めた。

大震火災

麻布區　南山尋常小學校
第五學年女　山内　正（十三歳）

思へばあの恐ろしい、大地震、大火災。其の日は九月一日だつた。長い四十日の暑中休暇も終へて久しぶりで登校して、なつかしい級のお友達や、先生にお目にかゝり始業式をすまし、いよ〳〵明日から第二學期が始る事になつた。今度は一學期よりなほ更、一生懸命に勉強しやうなどゝ考へながら、仲好しのお友達四五人とにぎやかに話ながら歸つた。

うちへ歸ると間もなくおひるになつた。皆といつしよに御飯を頂いてゐると、地震ががたきたが大して大きくあるまいと思つてゐると、今度は縱にがた〳〵ひどくきたので、母や弟や妹や女中など〻一しよにはだしで庭に飛下りた。屋根からはかはらがどん〳〵落ちてくる。家はまるで波のやうにひどくゆれてゐる。すると少したつてやんだ。はつと胸をなでおろす間もなく、又はげしい地震のゆりかへしがやつてきた。其の時は私達は全く生きた心持はなかつた。止んでから電車通の方に出て見ると電車は止つてゐた。前のお湯屋のうちの煉瓦は悉くずれてしまつた。人が大勢出てゐて、さもこはさうに地震の事を語り合つてゐた。其の中に水道は止つてしまつた

幾らひねつても出ない。

おとなりの人の話では、今警視廳、帝けきが盛にもえてゐるとの話で、ずゐ分驚いてしまつた。地震の爲に時計が止つてしまひ、時間がわからなくなつてしまつた。

夕御飯はおむすびで早くすました。其の中に夜になつた。火の手はます〳〵上つて空は一面に火の海になつてゐる。いつ火が來るかわからないから逃げ支度をした。十時頃眠むくてもうがまんが出來なくなつたので、床についたが度々小さな餘震があるので、其の度毎に目がさめて、おち〳〵して一寸も眠れなかつた。こんな風にして不安な一夜もすぎた。よく朝、母や妹達と一しよに近所の町を一めぐりすると、皆かりのテントを造つて外にねてゐた。どこの家を見ても、壁は落ち、屋根のかはらも落ちて、見るからに見すぼらしい有樣で有つた。母は早くから方々に行つて食料を集めていらした。午後に私は母と共に青山のお米やに行つた。行く道すがらに、下町の方達であらう。一夜の中にまるはだかにされて、わづかばかりの荷物を持ち、着てゐる着物を見れば、すこの方は泥だらけになつてゐる方も有つた。これらの中に親子ちり〴〵になつて逃げた方もゐられるで有らうと思つた。本當にお氣の氣である。兵隊は鐵ぼうの先にきら〳〵光るけんをつけて、すごい顏をして方々を見張つてゐる。青年團は、竹やりのやうな先のとがつたものを持つてやはりそこいらを見張つてゐる。青山通りはまるで戰爭のやうなさわぎで救護の自動車はひつきりなしに通つてゐる。通りは人の群でうずもれてゐる。お米屋に行つて白米をもらはうとすると白米はない。仕方がないから玄米を二斗ばかりもらつた。歸ると間もなく夕方になつた。すると電車通の方はさう〳〵しくなつて、人が澤山つめよせて來た。聞いて見ると今〇人が目黑にきて人を殺したり家を燒いたりするとの事で、危險だといふ事である。私は其の話をきいて、父に私達も逃げた方がよいでせうと言ふと逃げるとかへつてあぶない、うちにゐた方がよいと、おつしやつた。その中に夜になつてあたりは一面にやみの世界になつた。近所は皆逃げたと見えて眞暗である。逃げないのはうちと、おとなりだけである。家内一同皆いつでも逃げられるやうに支度を整へた。其の中に弟達は眠くなつたので、庭にかやをつつて其の中で眠るやうにした。何もしらないで弟達はもう眠つたのか、安らかないびき聲が聞える。私もおねなさいと言はれてかやにはいつたがこはくて〳〵ちつとも眠れぬ。遠くの方では〇人が打つのか、ボン〳〵といふ砲聲のやうな音が聞える。私はこはくて〳〵半分泣いてしまつた。それから何時間眠つたかわからないが頭の所で話聲がするので起きて見ると、父母がゐらしたので、〇人がきたかうかゞつたら、こなかつたとおつしやつたのでやうやく安心した。

それから少したつと、米國を始め、みづ知らずの各國の方から厚い同情を受けて、さま〴〵の物を送つて下さつたことは、眞に有難いと感謝する。私どもは大地震でも家も燒れず、家内一同

無事で揃つて、大正十三年の春を迎へたのは、何よりも仕合せである。

大地震

麻布區　飯倉尋常小學校　第五學年男　小古間隆藏

時計は今十二時をさす時ちよつと氣になる音がした、と思ふ中にずん〳〵と持上て家は左右に搖れ動く「あつ地震」と思つて簞笥に寄掛つたがた〳〵〳〵とすさまじく搖れる。

額は落ちる、石燈籠が火袋を落してさほ石ばかり左右前後におどる、僕も少し心配になつて來た。少し弱くなつた折僕は一目散に外へ飛出した。そしてお向ふの庭へ入れてもらつた。

此處は大丈夫、木の根が張つて居るので僕はいすに腰をおろし今日學校でもらつた。講習錄を讀み始めた。其の間四五分間毎位に搖れる。

三時頃になるとぼん〳〵と花火の樣な音がする。皆は「火藥庫の爆發だ」と言つて居た。間も無くお祖父さんに言はれて大阪に行つてるらつしやる。お父さんの所へ電報を打ちに郵便局へ行くと。「通じない」との事止むを得ず歸つて來た。途中村井銀行の潰れたのやまがつた家を見ると一層恐ろしくなつて來る。

夕食を食べるのも氣が落ちつかず一ぜんしかはいらない。

夜に入ると又不安水道の出ないのに北から東一面の火の空しかし人々は皆起きてゐる安心して寢なと言はれて、大切な物を枕下に置いて、床に入つたが火の明るさで氣になつて寢られない。どう〳〵朝まで起きて居た。

其の時僕は考へた。「此の火事で消す事は出來無い一番左の火で家は燒ける、其の時は皆一緒に此の荷物を持つて仙臺坂から三聯隊の原へ出て、青山のをばさんの家へ逃げ樣、それからは又先の考へ。」と思つてかくごを定めた。外を見ると皆簞笥・行李・風呂敷包みなどさげたり、背負つたりして有馬ケ原へ持出す。家では「出してもだめだ。」とお祖父さんに言はれて出さなかつた。お向ふの御主人は「何、大丈夫です。芝公園の向ふですから。」とか「西風だからあの火は向ふへ行きます。」と言つて報告して下さるが心配はやまない。

火が段々近寄ると夜番の森さんが。「危險になつたら詰所の際の非常門を押せば開きます。それに早鐘を打ちます。」と言つて來たのであそこが開けばなほよい。火を見ながら考へて居た。其の後一時間半位すると、「火事は大丈夫です。しかし皆さん火の元に氣を付けて下さい。」と同志會の人が言つて來た時外へ出て見ると、火はずつと濃くなつて居た。

地震もだん〳〵遠くなるので、近所を見に行くと五番地の者は、大方有馬ケ原へ避難してしま

つた。殘つたのは高瀨さんに田南さんに僕の家だけだつた。

電車通りでは戸板や障子で小屋掛をして其の内で寢て居る。學校へ行くと別に曲りもしない瓦の少しいたんだのと壁のふるつた位なので安心した。

所によると電柱は倒れ家屋は毀れ、土藏はふるつたのも少くない。是れも地ばんの弱い爲であらう。

家は幸に火を免れたので、二日の朝から親るゐの人々が大勢避難して來る。それに家は廣いので皆さんを樂にお入れする事が出來た。

お祖父さんは三日から知れない人を尋ねて、深川の方までいらつしやつた。

七日やつと新聞が出る樣になつだ。記事を見ると東京市は六割四歩は燒けた。又横濱市は全滅と言ふ死傷者も二十萬を超え一番ひどい所は本所被服廠の原で、只一箇所で三萬二千の人々は遂に燒死者となつてしまつた。其の他橋に逃げ兩方の火に追はれて河へ飛び込んで、溺死したり船がひつくりかへて溺死したものも少く無い。

今後は僕等の時代だ。僕等は力の限り我が帝都を復興し恩を受けた各國にも恩返しをして、盡くさなければならない。是れは第二の國民の使命である。

あの時

麻布區　飯倉尋常小學校
第五學女年　渡邊威子（十三歳）

「あつ地震だ。」横縱十文字にゆれる中を、はだしで飛出す人。驚いてこしをぬかすお老母さん。泣きさわぐ子供達。まるで世の終の樣だ。私達兄弟は、しつかり母の手にすがりついて居た。やうやく地震もおさまつた。往來は避難の群、れんぐわの山、すなほこりのうづまき、其の間を死人やけが人を連れて通る。「お母さんお父さんは、」母は心配さうに「さうね、今にかへつてゐらつしやるでせう。」でも私達の心はいらだつた。父のつとめ先の會社はあの壯大なビルデングの中にある。もしやもしやつぶれはしないかと心配でならない。其の中にも、餘震が幾度となくおそつて來る。近所の人にすゝめによつて、安全な場所に避難した。あゝ其の時父は大急ぎで歸つて來られた。私共皆は天へでも上つたやうに喜んだ。

日は全く西に落ちた。陰曆二十一日の月の光は淡かつたが、大帝都の空を彩る炎々たる猛火は、物すごく赤く明るい。私たちは野宿の床についたが總てをやきつくす赤いほのほ、すさまじい物音、とても目にちらつき、耳にひゞいてねむれない。火はおひく〳〵近くなつて、火の子が二つ三

つ落ちて來る。父は心配して野宿の床を引上て大切な品物を取そろへにげる用意をした。

あゝ私たちはこれからどこへ、さまよふのであらう。

大震災の思ひ出

麻布區　三河臺尋常小學校
第五學年男　萩原義朗

學校を終へて、家へかへりかばんをおろさうとした時であつた。蒸す樣に暑い風にけだるく、十二時をしらせる時計の音が奥の間から聞えた。――とその時、土の底から「ごうーッ」と恐しいひゞきがしたかと思ふと、大波の樣に大地が搖れ出した。

ま向ふの家が木の葉のやうにゆれる。「あツ地震だッ」と思はずかばんをかゝへて、外へ飛び出した。ぽきりと折れる障子の音や家のくづれるすさまじい音にまじつて、悲鳴や泣き聲やわめく聲が、恐ろしく耳にひゞいてくる。何時も平和ななつかしい近所はまるで地ごくの樣に變つてしまつた。

どん〳〵と續けざまになる音は又おそつて來る大震ではないかと人々の心を一さう不安にさせた。やがてその音が火藥庫のばくはつと、わかつた。

東の方からもく〳〵とわきでる白雲は、折からの太陽にはんしやして銀色に輝いた。

間もなく近所に火事のうわさが廣まつた。銀座京橋深川淺草方面は、今大火事で、あのわき出る不思議な雲は火事の煙とわかつた　その呪はしい雲はやがて大東京を悲しい見るかげもない物にして、終つた。あゝ大正十二年九月一日の大震災――それは僕たちの永久に忘れる事の出來ない、悲しいものであつた。

夜警

麻布區　三河臺尋常小學校
第五學年女　池田阿貴子

「カーチ、〳〵、カチ〳〵。」

と拍子木を打ちながら、靜かな夜の町を夜警の人が廻つて來た。

土と言ふ土はかたくこほつて、其の上を二人の人が小さな聲で話をしながら、だん〳〵近くへ來る。

重い靴でもはいてゐるのであらうか、近くへ來ると、どさつ〳〵、と言ふ靴音が靜かな町をやぶつて、氣持の惡い程大きくきこえる。

「カチー、カチー、カチ〳〵。」

拍子木はたえず夜警の人にたゝかれてゐる。

五分、十分、だん〳〵と時がたつ中に、拍子木の音は、次第々々に遠くへきえて行く。

あたりは、又靜かな夜の町となつた。

人騒ぎ

麻布區　本村尋常小學校
第五學年男　瑠璃川　亘

僕の恐ろしかつた事は〇人騒ぎであつた。丁度、二日の夕方、青年團の人達が「今不逞〇人が二百人ばかり澁谷まで來ましたから、女や子供は早く光林寺へ逃げて下さい」と、知らせてくれたので、皆びつくりしてしまつた。父は「それは何かの宣傳だらうから家にゐた方がよい」といつたが、あまり近所がそうぐ〳〵しいので、母は僕と弟を連れてお寺へ逃げた。其の時はもうお寺には大ぜい人が來て居た。なんでも山の奥が安全だと言ふので、近所の人と一しよにあぶない道を夢中で登り、大きな木があつたのでそこへ行き、ほつと一いきしたら、ぐら〳〵つとかなり大きな地震が始まつた。をばさん達は「南無阿彌陀佛〳〵」と言ひ出した。小さい子は泣くし、やぶつかはえんりよ無く手足をぶん〳〵さすし、こわいやら、いたいやらであつた。しばらくすると自警團の人が、「もう下りても大丈夫だから」と言ふので、下りた。そして一度はお寺の庭にござをしき、ふとんの上へ横になつて居た。もうすつかり暮れたので、あつちでも、こつちでも、提灯をもつて居る。其時「報告」と軍人團員の聲がする。「不逞〇人は大分少くなりましたから安心して下さい。もし近くへくる事がわかりましたら、知らせますからさはがないで下さい」と言つた。皆少しは安心したものゝ、もし來たらどうしようかと、やつぱり心配でたまらない。一時間位したらう。「あかりを消して靜かに」と言はれたので、皆いよ〳〵來たのか知らんと、火を消した。あたりはしんとしてしまつた。其時の心持と言つたら、今考へてもぞつとする。十二時頃父が「もう來ないだらうから、それに夜露も落ちて、毒だから家でねる方がよい」と言はれたので、一時引上げる事にした。近所の人も大分歸つたが、まだ〳〵殘つて居る人も多かつた。僕は床に入つても目がさえて眠られなかつたが、いつかとろ〳〵と眠つてしまつた。

朝母に起され驚いて目をさました。嗚呼あのこわかつた夜も何事もなく、無事で明けたかと思つた時の嬉しさは、何ともいはれない感じがした。

震火災

麻布區

麻布區　本村尋常小學校
第五學年女　橋本はま

あゝ九月一日……考へてもぞつとする、あのおそろしい日……正午私と母と弟は御飯を食べようと思つて、おつゆをよそつて居ると、母が「おや地震ぢやないか」と、おつしやつた。「あゝさうね」と私がいつたとたん、がた〳〵〳〵とはげしい物音と同時に、たなの物が落ちるやら、かめの水がざあ〳〵とこぼれるやら、臺所は大變なさはぎになつてしまつた。その中やんだので、こんな所にぐづ〳〵して居られないと、言つて皆通りへ出た。外へでゝ見ると、その樣子は、宮葉さんのガラスがたふれて居るやら、かほるさんの所の鳥かごが、おちるやら、大變な有樣である。通りへ出ると又今のと同じやうな、大きな震動の所へ、お向ひの伯父さんがいらして「つなみがくるといけないから、舟へいらつしやい」と言つて下さつたので、皆船へ移つた。母は「父さんはどうしたのでせうね」と心配して居る。「そうね本石町の通りはみんな丸やけだといふから、おたなの荷物でも出して居るのかしらん」と私もさういつてだまりこんでしまつた。そうして、おむすびをたべてゐる所へ、父がかへつてきて「おたなは丸やけだ。」と半ば一人言のやうにおつしやつた。それから父は家へ行つて、夜着や大切なものをとり出して居る中に、もうこゝに居てはあぶないといふので、沖へ出ることにした。永代橋の方へ出ようとすると、もう向ふは火で出られなくなつた。「こりやあぶないこゝから上つた方がよい」といふと、皆同意して向ふへ行かうとするうち、火の粉がおちて立つてゐた前の家がもえ出した。「おゝこれではだめだ、なんでもよいから、この横町をぬけていかう」と、いつたので、私は父に手をひいてもらひ、母は袖をにぎり、水でぬらしたたほるをかぶつてそこをとほりぬけやうとしたとたん、母はつぶされた家の中へ足を入れてしまつた。「はまちやん〳〵、まつてよ〳〵」と母は言ひながら、やうやく足をぬいて一町あるいたと思ふころ、ふりかへつてみるともうそこから火をふき出して居た。やう〳〵の思ひで飛行場の所まで來た。そこにはおどろくほどの人が立つて居た。おされて〳〵おされぬいて、土手のかぎのてになつて居る所まで來た。そこで立ち通して一夜を明した。夜の明けるまでのこわさは、一通りではなかつた。つい一二町さきの家のもえおちるまでのあつさ……とてもたまらなかつた。相生橋のおちるのは眞赤な空の中なほ赤くほのほが、ぺら〳〵と見える。翌朝ご近所の方と父はやけあとへいらした。私は母と弟と三人で父のかへるのをまつて居た。間もなく父は玄米や半俵もつて、かへつていらした。それからやけたかまをもつて來て、ほつたての小屋の中で、御飯をたいて食べた。その時弟は玄米をおいしい〳〵といつて食べたいじらしさ……とてもわすれることが出來ない。明けて三日あの雨のふる中を麴町一番町まで來た其の時のうれしさはたとへやうがなかつた。

東宮殿下御成婚

麻布區　笄尋常小學校
第五學年男　佐藤忠男

パツと目がさめた。あゝ眠いと、僕は思はず大あくびをした。時計は今六時十分を指してゐる。着物を着替へて庭へ出た。日本晴だ。

今日こそは、東宮殿下御成婚の、大祝日である。お母さん達が御二方をおがみに出て行つた後は、僕と留守番のぢいやだけだ。僕も良子女王を、おがみに行かうと思ひ佐柳君と共に、高樹町に來た。きれいな自動車や、きたない自動車が行來してゐる。巡　に、此處はいかん〳〵と、追廻されてとう〳〵、青山六丁目まで行つてしまつた。其の時は小野君、米津君、三組の本多君等も、連そつてゐた。御通りを待つてゐる内に一人ほろ〳〵の着物を着た神主みたいな人が、歩いて來たら巡査や刑事が集まつて、資生堂の中に入れてしまつた。中々嚴重だ。又飛行機もたくさん飛んでゐた。後新聞で見たら四十七臺だつた。その中に巡査が二人、オートバイに乘つてやつて來た。其の後から綺麗な近衛兵が馬に乘つて、右手に旗を持つて勇しく進んで來た。良子女王は二番目の自動車に乘つていらつしやつた。十二單衣といふ物を初めて見た。十二單衣も近衛兵も大層奇麗だつた。御召自動車が進むにつれて、萬歲の聲が段々遠くへ移つて行く。

あゝ九月一日

麻布區　笄尋常小學校
第五學年女　山室善

むし暑い日だ。心臟の具合が悪くて、二階に寢てゐらつしやつたお母さんも、大好物のうどんが晝食なので、降りていらつしやつた。

充分に御飯をいたゞいて、私共はそれ〴〵の室に分れた。

ぐら〳〵〳〵。妹と一しよに本を見て居た私は、お茶の間に相川さんと話をしてゐらつしやつたお姉樣の所へかけ出した。

壁がばさ〳〵〳〵。お臺所に吊るしてある乾物の籠がひどく〳〵ゆれる。ふすまが倒れるお姉樣のお茶が膝の上にこぼれた。

「大丈夫。々々々。おゝ神樣どうぞ助け、下さい。」相川さんはそう言つた。私は此の時、少しもこわいと思はなかつた。たゞ「暑い、暑い。」と思つた。外へ出る、机の下に入る、等の注意は全く忘れて、皆にすゝめられて外へ出る時も、「下駄は。」等と呑氣な事を言つた程だ。

第二震の來る間に夜具を持つて來て、第二震の時は、それをかぶつて居た。その時だ、恐しさを感じ始めたのは。濃尾の地震にお遭ひになつたお母さんはおつしやつた。

「本營はつぶれましたよ。このゆれ方では。お父樣はどうだらう。これから餘震は、千回も來るのですよ。」

「あゝどうしよう。お父樣。お父樣どうぞ無事な顏を早く見せて下さい。一刻でも早く。」

お姉樣と相川さんが、臺所の片附けをしてからいろ〳〵な物を買ひにいらつしやつた後に、村松さん、本營に行つていらつしやつたおぢいさんがいらつしやつて、お庭のぶらんこにちよつと乘つて、私共の逃げてゐる隣の畠をのぞいて、

「やあ皆さん、無事でけつかうですねえ。何。本營はどうだつて、あんなへぼくたな、れんぐわの家なんてきまつてますよ。つぶれちやつてさ、兵士の人が一人重傷で、後は中野さんが出られなくなつて、皆で出してましたよ。」と。

その喜びもつかの間。血だらけの丸山大尉が、

「本營は見事に燒けました。指田中佐が、重傷で全く死んだのと同樣で、それから植村さんが重傷です。けれど大佐は幸福です、ちよつと頭にけがをなさつたばかりで、ぬいだ上着も、帽子も燒けました。ですから下さいませんか。それから皆まだ晝飯を食ひませんから、何かありましたらどうぞ。」

それから色々な物を上げた。

夜だ。恐ろしい火事。流言蜚語。私はずゐ分頭をつかつた。お父樣は丸山さんの言葉のやう幸福に歸宅なされて、たとへ樣のない樣にうれしかつたが、やはり心配は私の心を去らなかつたロシヤの事、ボンベイの最後の日等が思ひ出されて、あゝけれど帝都は、日毎、日毎に復興するなんとうれしい事なのだらう。

犬の兄弟

麻布區　麻中尋常小學校
第五學年男　高山利勝

僕の家に、仔犬が二匹ゐる。この仔犬の名を一方はマレ、一方はジヤクといつて、仲のよい兄弟である。親犬はダイナといつて、おとうさんの話によると、ラツコを取る犬ださうである。

マレは頭の先から爪の先まで眞黑で、ジヤクはおなかと前足とが白いだけで、後はやつぱり眞黑である。

或日僕が學校から歸つて見ると、弟が「いたい、いたい。」といつて、泣いてゐたので、僕が「どう

したの。」と聞くと「マレが、かんだの。」といつた。そこでぶつてやらうと思つて、マレをさがしまはると、いつもの箱の中にゐたのでぶつてやつた。

後でいくら呼んでも、おこつたと見えて僕のそばへは來なかつた。

夕方になつて、箱の中を見るとゐなかつた。

どこへ行つたのかと思つて、外へさがしに行つて見ると、ジヤクとよろこんでふざけてゐた。

大地震

麻布區　麻中尋常小學校
第五學年女　小野眞子

九年一日の大地震は誠にひどかつた。

家に居ても外に居ても、大波の所を船が通るのと同じやうに大變ゆれた。

その時私は家に居て、ちつとも外へ出なかつた。よく家が倒れなかつたと後になつてさう思つた。あのゆれてゐる最中に、丸の内の方は、もはや火事となつてゐたのだからたまらない。

風はます〳〵ひどくなつて、火は天をこがすばかりに家から家へと、もえうつゝた。しばらくすると、まつ白な雪のやうなにうどう雲が、空にむく〳〵と動いてゐる。あれはきつと火事の煙であらう。いくらたつても火はとまらない。あたりまへの火事なら、水をかけてとめる事も出來るであらうが、何しろ水がないからたまらない。

飲む水さへ井戸からくんでやう〳〵なのに、どうしてあの大火事にかけるやうに、たくさん水があるであらうか。それは水道が出ないからである。

今度は學校の事が胸にうかんで來て、お母樣に伺ふと「學校どころではない。麻中も燒けてしまふかもしれない。」とおつしやつたので私はなる程と思つた。

其の中にお父樣が歸つていらつしやつた。そして「大藏省は二度と、は入れなかつた。何しい、梯子段がぶらさがつてしまつたからだ。」とおつしやつた。

やがて兄さんも歸つていらつしやつて、「僕は今、大藏省へ行つて來た。お父さんが居るかと思つたから。」と、言ふ。

お祖母樣やお母樣は、お父樣に、「義盛は大藏省へよつて來ました。」とおつしやると、お父樣は「感心だね。えらい〳〵。」と、おほめになつた。

やがて夜の二時頃になると、家の方も燒けさうなので、したくをして靑山まで逃げた。そしてお祖母樣のお庭で夜を明かした。

二日になると又、一日のやうに度々地震があるが、もうなれてしまつたので、さ程こわくはな

かつた。

正午頃神田にゐた親類の家の人が來て、「今皆一つ橋　所にゐます。」と言つたので、兄さん達が迎ひに行つた。さうして、夕方四時頃に皆來た。その時六つになる常ちやんといふ子供は、それはく〳〵あはれな姿であつた。何しろ燒出されたのだから、ゆかた一枚でぶる〳〵ふるえてゐる。でもあの時十月一日で一月も遲かつたら、皆風をひいてしまつただらう。これは二日の夕方までの事である。

大地はゆるぐ

麻布區　東町尋常小學校
第五學年男　茂木正郎

あゝ大正十二年九月一日朝早くから雨が降つてゐたが、まもなくおさまり再び平和な初秋の一日となつた。

……時は正午を前にすることわづか、天は何の無情ぞ古今まれな大地震がおしよせて、落ちるだけのかはらは落ち、つぶれるだけの家はつぶれ、土煙がしづまりかけたと思ふと、もうもうたる黑煙とかはり世のはめつかと思はれた。

そして東京も商業のほこりの横濱も一夜にやけのが原の白煙とかはつた。

……が火は千歲をともすともしびだ。

ふるひ立つ市民にむかへられる東京市は、ねつけつこりたあせにいろどられるだらう。

大なる震災にたいして我等のどりよくも又大きい。

莊嚴なる帝都のいしずゑは何によつてきづかるゝか。

劍力か金力か否々たゆまぬふんれい努力のたまものである。

あのなつかしい銀座や日本橋が目につく。

……けれどもいたづらにおしむことはない。

破くわいは建設の第一歩だ。

思ひ起す九月二日

麻布區　東町尋常小學校
第五學年女　土井初榮

あゝ此の時ばかりは生きてゐる氣持はしなかつた。九月二日やうやく火事が治つたと思つて、重い荷をおせの出るのもかまはず、かついで家に入つたが、又地震があるかと思ふと、どうして

も疊の上に居られず、土間にこしを掛け、空の樣子ばかり見てゐた。往來する人の顏は靑ざめてはあ〳〵とせきこんで、小走に走つて行くと、間もなくえび色のオートバイが、風をきつて走つて來て、我が家の前で止つた。皆人々はそれに乘つ　來た。オートバイに乘つて來た人は、「諸君今玉川にあやしい船が入りました。それはたしか〇〇人と思はれます。女子供は早く逃げて下さい」とさう言ふ聲も切れ〴〵に、又オートバイをどん〳〵と走らせて行つてしまつた。集つた人々はどつと聲を上げて、竹やりを作り初める人、刀を持つて來る人、逃る人、で大さはぎをすると、又一臺の自轉車が走つて來て、「もう防ぐ事は出來ません。」と言つた。私達はそれ逃げろと言ふので原へどん〳〵逃げたが、生きてゐる氣はしなかつた。あゝ恐ろしい事があればある物だと、私は深いため息をついた。今思ひ出してもぞつとする。

バラック

麻布區　絕江尋常小學校
第五學年男　林　良之助

僕の家に避難しに來た本所の伯父さんは、なつかしい自分の家の燒跡へバラックをたてる爲に行くと言つて、朝早くから支度をした。やがて一切を車につんで十時から本所へ。僕はあきちやんと伯父さんの車の後押をした。僕等の誇としてゐた帝都の市街は、滅茶苦茶に破壞されてゐる。伯父さんのなつかしい家の燒跡へ來た時は、仄暗い夕方であつた。伯父さんの顏には何ともいはれない暗い色があらはれてゐた。

大門が燒跡の所々に飛びはねてゐる。時々爆破の音響がきこえる。悲慘をきはめた被服廠や、サツポロビール會社の煙突が、さびしさうにたつてゐる。隅田川の向岸には十二階や、觀音堂の屋根が見える。數日後家內一同で本所へ行つた時は、もう伯父さんのバラツクはたつてゐた。伯母さんとあきちやんが仕事をしてゐた。

僕が遠くから、「おーい」と呼ぶとあきちやんがふりむいて、

「なんだーい」と答へた。まるで田舍の氣分がした。お母さんが伯母さんと話の最中に、おぢさんが汗をながしながら、歸つてゐらつしやつた。おぢさんは「これからはなにもかも復興ですよ」と愉快に笑つた。

大地震後の思ひ

麻布區　絕江尋常小學校
第五學年女　福山ゆき子

去年の九月一日といふと、ぞつ」とするほど恐しい氣持になります。あの日に東京市中は殆んど全滅をしてしまひました。

多くの家は倒れたりしましたので、私の方の學校に避難した人も多うございました。そんなにして家は燒け、着物も何もない人などには何かゆづつて、あげたいやうな氣持がして、しようがありませんでした。私は今でもあまり暖い日にはまた地震でも來はしないかと思つて、びく〳〵してゐます。去年の十月頃からは殆んど地震も、おさまつてよかつたと思つてゐました所が、又かなり大きいのが今年の一月十五日の朝六時頃にありました。私はまた驚いてはだしで飛出しました。後になつて「どうして私はあわて者だらう」とつく〴〵思ひました。又今日先生から、「今朝の時事新聞を見ると、又第三回目の大地震があると出てました」と、教へていたゞいて、私は思はず「あらつ」と聲を立てました。

それからはその事ばかり思つて怖れて「ぶる〳〵」ふるへてゐます。ですから私はもし無いと限らないから、氣をつけてゐます。

九月一日の日にあの壯麗な東洋一の帝都を、にくらしい大地震と、大火事にすつかりなめられてしまひましたが、私たちはよく勉强し、よく働いて元の東京より、ずつと〳〵よい大帝都を建設し、我國の力を增すやうに心掛ませう。

大震火災

赤坂區　赤坂尋常小學校
第五學年男　吉澤幸雄

九月一日の晝頃までは見渡すかぎり靑空であつた。僕は學校で始業式を終へ、歸つて着物をきかえ樣とするせつな、地震が來た。僕は始め誰かゞくるのだらうと思つていたら、つゞけさまに大きいのが來たので一目さんにかけだした。外へでたが立つてゐられないので、しやがんでゐると砂糖屋の信ちやんが、おぢさんにかぢりついてゐた。少しの間は何が何だかさつぱり分らなかつた。やう〳〵しづまつたので內へ入つたら、父さんが裏の土手へ上れと言つた。上らうとした時あわてたので、はしごがすべつて落ちてしまつたので、石がけを上つてやうやく上つた。はるか向ふを見ると、家はつぶれ、煙とつはまがり、まるで戰爭の後のやうであつた。するとしきりに半鐘が鳴りだしたから人々は、「火事だ」とさはぎはじめる。郵便局の前のうなぎやから火が出た。すると僕の家の右の方から、煙がどん〳〵くる。火は見る間に四方にひろがつて、田町方面を燒きはらつて僕の家の前を通つて行つたが、運惡く風むきがちがつて、交番のところから我家の方へと燒けてくる。こうなると大變。內では荷物を出しはじめた。大方出した時には火は內について

るた。交番の所でわかれた火は益々勢を盛んにして、赤坂見附の方面へ燒けていくが、風がかはつてゐるので、不動様の前でとまつた。燒け跡は、殘火がちよろ〳〵もえてゐる。それから家の荷物は土手の上の兵營内にもつてゐつた。僕はいつもそんなに力が出ないのに、今日にかぎつて力が出てきた。その内に荷物を皆はこんだ時には、日は向ふの森にしづんでゐた。その日は野宿をしたが、なか〳〵ねつかれない。空は眞赤に染つて人々にものすごいかんじをあたへた。星と月は相かはらずきれいに光つてゐる。一日はすぎて二日になつたが、まだ火はやまない。煙は空をこがす程である。燒あとを見てゐてもつまらないから、あるいて山王下までいつたが、くさくてたまらないので歸つた。晝のごはんは軍隊のにぎりめしを食べた。その中に自動車が來たので荷物を田舍にもつて行つた。二番目に又きたので僕はそれに乘つて、いなかに行くことになつた。夕方半鐘が鳴るので行つて見ると、火事はどこでもない。あたりが暗くなつた頃、玉川方面に〇〇人があばれだしたなぞ言つてくる、僕はこの夜をこはゞ〳〵すごした。三日になつてもまだ火がやまないと言つてゐた。下町方面では何萬と言ふ人が死んだと聞いた時、身ぶるひする程おどろいた、中でもひふくしやうあとの死者は、三萬二千であると言つた。あゝおそるべき九月一日よ。

お兄様の胸に

赤坂區　赤坂尋常小學校

第五學年四組　三木靜子

たのしい永い〳〵間の夏休も終へて、それはその翌日、九月一日であつた。なつかしい學校の始業式もすみ私は、うちの二階で妹と遊んでゐた。明日のことを考へながら……とその時であつた。うちがぐら〳〵つとゆれたかと思ふと、あんな重いグラウンドピアノは左右に動き、がくふののせてあるお机は今にもつぶれさうになつた。あゝ私はどんなに驚いたであらう。急いで妹を片手にだいて、唯兄様を呼んだ。となりの部屋にゐらつしやつた兄様は、よろ〳〵なさりながら、私のそばへ來て、私をしつかりだいて下さつた。もうかくごした。私は兄様の胸にしつかりつかまつて、靜かに目をつぶつた。しばらくゆれた後地震はぱつたりやんだ。母様は「靜子、千賀子」とお呼びになりながら、二階へ上つていらつしやつた。此の間にと私は急いで下へおり、はだしでおもてへ飛出して、街路樹につかまつてゐる。そこへ第二回目の大地震が來た。その頃はもう一ツ木町の方からは、もう〳〵と黑煙がたちのぼつて、一つぱいに包みかけて居たのであつた。多くの氣の毒なけが人を見、もう〳〵と空にたちこめる黑煙を見て、私はたゞほうぜんとしてゐたのである。あゝ今思ひ出しても、きおくを書かうとする此の手はふるへる。

冬のバラツク

赤坂區　青山尋常小學校
第五學年男　南波正吉（十三歳）

僕はバラツクの一角に立つた。ひゆうと身を切る樣な木枯の風が、一しきり顏をかすめると、僕は思はず首をちゞめた。思ひ出せば九月一日午前十一時五十八分、古今外國人類の始より未だ曾てなき地震に遇ひ、住むべき家は猛火につゝまれ或はつぶれ、故鄕に歸り親類を賴りてせわになつた人の外は、誰一人賴むべき人がない家族が、此のバラツクに生活してゐるのである。

亞鉛屋根に板塀、六疊一間に數人が生活するバラツク生活。親に別れ、兄弟を失ひ、多年勞苦をいとはず積んだ財產を失ふて、配給品で生活するとは何んと悲しいことであらう。

我々は幸に屋敷町に住まつて居つたので、何等の被害なく、何等の家人の損害もなく、我等はなんといふ幸福であらう。

風一陣吹いて僕は我にかへつた。

バラツクの亞鉛屋根や板の間から入る、夜風に身をさらし、親子數人寢るやうな夜を明すのを考へて歸途についた。

私達の復興

赤坂區　青山尋常小學校
第五學年女　松本英子（十二歳）

大正十二年九月一日……あゝ此の日の恐しかつた、この事はどうして忘れられませう。

あのにぎやかであつた下町も、一時に火の海となり、家をやかれてにげ道にまよひ、父を失つた人、母を亡くした人、兄弟に別れた人たちが、山の手をさしてにげて來た。其の姿は見る影もないなさけない姿であつた。

やがてバラツクが出來たが、家とはいふものゝ誠にそまつで、中に居る人はぼろ〳〵の着物をまとつてはゐるが、皆一生懸命に仕事にはげんで、東京市の復興する日をまつてゐるのであらう。

今は二月の半であるが、そのうちには北風の吹きすさむ日も、つめたい雪がちら〳〵降る日も幾度かあつた。その間バラツク住居の人は、どんなに寒かつたでせう。思へば燒けないだけでも、私達はどんなにかしあはせなことでせう。

あれを思ひこれを考へる時、私達は一日も早く帝都の復興を祈ると共に、日常の勉めにはげまなければならない。

九月一日の地震に就いて

赤坂區　中之町尋常小學校
第五學年男　西原行男

花の都の大東京も、あの思ひ出しても恐ろしい九月一日の大震災、大火災の爲に燒野原となつてしまつた。其の時分恐しくて家に居れないで、青空を天井のかはりにして、山の上にねたこともあつた。山の上から下を見下ろせば、火は炎々と燃え上る。あつちもこつちもダイナマイトの音が物凄く聞えた。又燒跡へ行つて見ると、電信柱まで黑こげになつて傾むいてゐる、しかしそんなことは過ぎてしまつたのであるから、これからは心を入れかへて、此の燒野原の帝都を早く復興する樣に力を盡くして、前の東京よりも立派な帝都を作つて、外國の人にさすがは日本と言はれる帝都を作り上げることを希望する。

氣の毒な人々

赤坂區　中之町尋常小學校
第五學年男　香宗我部秀正

地震と聞くと、思はず「ビクツ」とするが、僕なぞより、もつと〳〵驚く人があるだらう。それは地震にあひ、又其の上に火災にあつて、家は燒かれ、身一つになつて、逃げまどうた人達であらう。僕等は幸ひに怪我一つせずして、無事に居るが、震災火災にあつて、家も何も丸燒になつた人達はどうであらう。今頃はこんなに寒いのに、バラツクに住まつて居るのだ。本當に氣の毒だ。それに小さい子供などもあの震災で親にはぐれ、そして又さういふ子供を收容して居る所で、親探しなぞをしてやうやく親にあつたといふ、不幸な中の幸福な子供もあるだらうし、又まだ親にあへない子供などもあるだらう。さういふ涙ぐましい話は、まだたくさんあるだらう。それにしても本當にバラツクに住まつてゐる人達はかはいさうだ。

九月一日の大地震

赤坂區　中之町尋常小學校
第五學年男　福原誠一

こはいものは地震、雷、火事、親父と言ふが、一番こはいのは地震である。思ひ出してもぞつとする。あの九月一日の大地震は、僕がちやうど晝飯を食べようとしてゐた所へ、「みし〳〵がた〳〵」とやつて來た。僕は「地震」と言ふが早いかむちゆうで外に飛出したら、見てゐる間もなく

角の家がすごい音と土煙をたてゝつぶれた。「こつちに來てゐればあぶなくない。あそこはがけがあつてあぶない。」などゝ言つてその近所をうろ〳〵してゐると、その中に兵隊さんが「聯隊へこい」と言つてくれたので大いそぎで聯隊へついた。その時の人の顏色は、眞青で見られたものではない。それからは病氣の人や、けがをした人が、男の人におぶさつてくるやらで、非常なさわぎであつた。その中に方々から火の手が上がり、つひに大火になつてこの帝都を灰にするやうになつた。又その晩は火のために非常に明るかつた。しかし僕の家は少しかたむいたゞけで、やけもつぶれもしないですんだ。僕は地震ぐらいこはいものはないと思ふ。

九月一日

赤坂區　中之町尋常小學校
第五學年女　岡田文子

大正十二年九月一日は朝の内、ずい分ひどい雨風でありましたが、十時頃からだん〳〵晴れてまゐりましたので、二百十日もこれ位ですめば結構だと、皆々よろこんでゐました。學校は式だけで學課はありませんでしたから、お晝から出掛けるつもりで、早くごはんをいたゞいてきものをきかへようとしましたら、俄に地鳴がしてどんとからだがもちあがりました。あれ地震と思ふひまもなく、家が船のやうにゆれだしました。ガラ〳〵ドンドンチャン〳〵棚の物がおちる音、かべのおちる音、ガラスのこはれる音、物すごく今にも家がつぶれるかと思ふ程でした。かはらがおちてあぶないから出ていけない、とお母様がおつしやいましたから、疊にうつぶしたまゝふるへておりました。小ゆりになりましたので、さあ今のうちだと言ふお母様のお聲、夢中で飛出しました。道路は一ぱいの人で、皆眞青な顏をしてゐます。二回三回ひきつゞき餘震がまゐりました。無事に出てまづ一番氣になるのはお父様のことです。お父様の店は溜池の三階だてです。もしやけがでもなさらなかつたかと、心配してゐましたら、向ふから店の小僧さんが息せきゝつてとんできます。向ふの言葉もまたず、お父様は無事かときゝましたら、だんな樣は御無事でいらつしやいます。お宅は皆樣おけがはありませんかと申します　で、皆無事だと早く御返事を申上げてくれ、と言ふ言葉もなかばにとんでかへりました。はりの下敷になつてけがした人や、病人が人におぶさつて、お醫者樣の家にかけて行きます。見れば右にも左にも黑煙がもう〳〵と立ちのぼつて、火事だ〳〵とさけぶこゑがきこえます。どうなるかとこわくて、からだがぶる〳〵ふるへます。その中にお父樣がかへつていらつしやいました。途中にはつぶれた家もたくさんあるので、ふみこえてかへつてきたとおつしやつたので、いよ〳〵おどろきました。お互に無事をよろこんで萬一の用心に、たいせつな書類とお金だけを手さげに入れてもちだしました。そのうち

に誰言ふとなく火藥庫が爆發するから、こゝはあぶないと申しますので、びつくりして乃木坂の方へにげました。しつてゐるお宅がありましたので、そこに一緒においていたゞきました。火は次第に近づきます。火事になつても學校の木があつたら、大丈夫だと思つて、三人の學校道具を一切取り出してもらひました。胸がいつぱいでごはんもたべられません。夜は次第に更けてまゐりました。地震のこはさより火事の心配が大きくなつてきました。お父樣の店もとつくにやけおちたさうです。まだ暑い頃で蚊がえんりよなくさします。夜つゆはしと〳〵とおりてまゐります。そのうちに追々にげてくる人が多くなりました。一夜の中に十年も年がたつた樣な氣がします。空の空がだん〳〵うすあかくなりました。やれやれうれしいと思つて、生きかへつた樣でした。家の事が心配になつたので、家にかへり門前に幕をはつて、そこでごはんをたべました。黑煙の間からのぼつた日は、やけて眞赤で、何となくおそろしく見えました。

又も一天俄に曇つて、夕方かと思ふ程眞暗になりました。其の時私はこの世のをはりかと思ひました。午後親類からむかへにきたので、こはゞ〳〵家を後にして出掛けました。あゝもうこんなことは私の一生に二度とない事でせう。これ程おそろしいびつくりしたことはありません。あゝおそろしかつた大震大火災の一日。

大地震と大火

赤坂區　中之町尋常小學校
第五學年女　鈴木イソ子

あゝ九月一日、

此の日は私の一生忘れる事の出來ない、悲しい思ひ出の日です。お父さんの御用で麻布のおばあさんの近所へ行きました、お使をすまして二足三足歩くと急にゴーといふあやしい音が聞えたので、不思議に思つてゐる中に大きな地震が來たので夢中になつてかけだすと、瓦が落ちる家から人が飛んで出る、家がつぶれる。「地震々々」とさけびながら歩かうとするけれども足が進まない。その中に立つて居られずに倒れた。

顏を上げて前を見ると、血だらけのおばあさんが助けられて行つた時は、かわいさうで見て居られなかつた。二度目三度目と強いのが來たのでそばの人にかぢりついた。はるか向ふの新橋の方から黑煙が上つた、西も南の方も煙が上つた、おばあさんの所へかへつて見ると、みんな前の空廣地へ出てゐたので、それを見るとかぢりついて泣いてしまつた。少しおちつくと家に居るみんなが心配になつて、又人にきいて見ると巴町はもつとひどいと言ふことだ、お父さんがむかへ

にいらつしやつたので安心した、ふと氣がつくと門も鐘つき堂も内玄關も倒れてゐた。あたご山の塔も倒れて見えない。暗くなつたので火はます〳〵赤く見える、家は風上なので安心して居ると七時頃から風が變つた。これはあぶないと逃げる用意を始めた、弟と妹は「はしか」の最中なので、妹を中姉さんがおぶひ弟は私が手をひきにもつをもつて外へでた。電車通りはにげて來る人で、呼びながらでなくてははぐれてしまふ、やうやくのことで水道山へのぼり、家の方を見ると、そこいら一面の火で大ぶ近くまでやけてゐるらしい、火の勢はます〳〵加はつた、前の大道は火が廻つてもう芝浦までやけぬけた、前の方はやけてゐる。赤坂の火もかなりきたらしい、一面の火の空一方より道はない、赤羽橋から十番を通つてそれから六本木へ出て一聯隊の前についたときはよがあけた。みちばたにござをしいて一と休した。一晩中にげまはつたのでつかれてねてしまつた。谷町のおぢさんの家は一町ばかり前でけしとめ幸にやけのこつた。まだ空の方はまつかである。お父さんや姉さんが大切な物を天德寺の庭に出したのがあるか見に行つたが皆はいになつてゐた。おぢさんのうちに二三日居た、夜は前のあきちにござをしいてゐた。二日になると〇〇人が來ると言ふのでほんとにこわかつた、まつくらなので何もわからない向ふの方で警戒々々と言つてゐる、はしごにのせられた〇〇人がじゆんさにつれられて行つた。私はこわくて〳〵しかたがない、弟は「早くにげよ」とせがみたてる、まもなくこわい夜が明けてお日樣が見えだしたのでやうやく安心した。おぢさんの家に二三日居て今度は、高田のおばさんの家に行つた。新聞が出來るやうになつたので毎日のやうに姉さんから、本所深川の方に居る人のかあいさうな話をきかされた。きくたびごとに涙がこぼれる、もし私が向ふの方面にすんでゐたら、どうだつたでせう。幸にこちらの方面にゐたので助かつた。今はうちができて毎日學校に通つてゐることができるのは誠に有がたいことである。

避難者

赤坂區　仲之町尋常小學校
第五學年女　喜多靜子

火に追れて避難してくる者は、表町の電車通をひきゝりなしに通つて行く、中にはよぼ〳〵したおばあさんが、小さな子供をつれて苦しさうに歩いて行くのもあれば、又血だらけになつたおぢいさんが杖をたよりにとぼ〳〵歩いて行くのもあれば、若い女の人がまつさをになつて男の人におぶさつて行くのもある。どの人を見ても皆かわいさうである。ぢつと見てゐると涙の出るやうなあはれである。私はこういふ人になにかめぐんでやりたくなつたので、ぢつと考へて見ればその時は地震のためにどの家もどの家もどの公園も皆水道が止つてゐるので、水を飲むことがで

きないだらうからと思つて、私も女中もお隣のおばさんたちと井戸水をくんで來て、往來にお茶わんを出してみんなにのまして上げました。中で小供がたくさんゐてかわいさうな方には、ビールびんやサイダーのびんをよくあらつて水を入れて上げました。中にはとぼ〳〵とひとりゆくおばあさんで水があるのも知らないで行くのを、女中は「もし〳〵水を差上げませう」といつてコップに水をくんで上げると大へんよろこんで行きます。通りがゝりの方に「どこからにげてゐらつしやつたのです」と聞くと月島とか本所とか小川町とか横濱とか、大へん遠いところから二日も食物をたべないでやつと逃げて來たといふ人が多い。そして親をなくしたとか小供をなくしたとか聞く人々それ〴〵ちがつて皆かわいさうな話ばかりです。あゝなんといふ氣の毒なことでせう。こういふ方にはたくさんほどこして上げやうと思つてゐます。

あゝあはれな老人よ

赤坂區　仲之町尋常小學校　第五學年女　三宅つや子

「オーイ一郎やー。〳〵」

悲しい聲をはりあげて、よた〳〵歩いて行く一人の老人があつた。

「一郎やーい〳〵」

老人は目に涙さへためてよんで行く。人々は皆此の老人の方を向いて居た。

聞けばその老人は淺草に居た人で、家内一同燒死して、たうとう一人の十四歳になるまごが山の手の或家の小ぞうをして居るさうである。老人は其のまごをさがしに行つたが、ちやうど其の時小ぞうは外へ出てゐたけれど、そのまゝまだかへつて來ないさうである。老人は生きて居るか死んでしまつたかわからぬまごをよび歩いて居るのである。

淋しい聲は夜の空にひゞいて淋しく消えて行つた。御空の星も此の聲を聞いて涙を流したことであらう。

帝都復興

赤坂區　青南尋常小學校　第五學年男　島崎敏樹

あゝ大震災、あの恐ろしかつた時からはもう五箇月も夢の如く去つた。燒けた下町方面も今では燒野原も見えず、トタン屋根が勢よく日光に輝いてゐる。市民の心はどんな事を考へてゐるであらうか。これぞ思つてゐるのは帝都復興である。帝都復興々々々々なんと勇しくをゝしい名で

はないか。市民はこれが爲に大いに奮勵努力せねばならない。いまに見よ、未來の東京は、外國人をきやうたんせしむるばかりの大東京となるぞ。丸の内大建築の修理のつちの響きも一樣に帝都復興々々々々と叫んでゐる。華麗壯麗目もまばゆくばかりの大東京も數年後にはきつと展開されるであらう。僕は帝都復興を大いに祈つて止まない。

九月一日の夜

赤坂區　青南尋常小學校
第五學年女　譽田壽美子

晝間からしつきりなしに火は燃えてゐる。夕方から夜にかけてなほも盛んに燃えてきた。燒け出されて大きな荷物を持つたり赤ちやんなどをおぶつたりしてどん〳〵逃げて行く人々の心持はどんなでせう。悲しくもあり又情けなくもあつたでせう。燒け來る火を眺めて居れば居る程悲しさや恐しさで心ももえるばかりでした。もし燒けたら今まで御熱心によく私達を御教育下さつた先生方や又種々のお友達などゝ別れてしまつてもう二度と青南小學校で樂しくゆくわいに勉強したり遊んだり出來ないような心を數限りなくいだきながらなほも火をうらめしさうに見つめて其の夜は一睡もせずにしまつた。夜は更けるにつれて火は四方にひろがり空全體をおふて行くのでしたあの大震火災は私達一生の思ひ出の種となるのでせう。

我が家の燒跡

赤坂區　氷川尋常小學校
第五學年男　金子　勇（十二歳）

あの九月一日の恐ろしい大震災の爲め、僕の家はつぶれた上に丸燒になつてしまつた。「地震だな」と思ふ間もなくつぶれて、母と僕とは其の下敷となつてしまひ、通りかゝりの人に助けられて、外へ出たと思ふ間もなく、向ふの方から眞黑な煙が見えてきて僕の家の方へ〳〵と燒けて來て夕方にはすつかり丸燒になつてしまつた。二三日たつて燒跡に行つて自分の家の前に立つと涙を落さずにはゐられなかつた。あゝこれは僕の家の玄關の敷石だ、今は赤茶色になつてぼろ〳〵してくだける。又庭にあつた「ムク」の木、これも燒けない前には一丈位に高く青々とした木であつたが、今は燒けて眞黑になつて元の影はなくなつてゐた。それから僕と父との二人の本箱の在つた跡はたくさんの本が燒けて眞白な灰が四角に殘つてゐた。これも涙の種だ。近く五月のお節句が來るが今年は武者人形一つ飾る事も出來ない。實に殘念だ。

地震

赤坂區　氷川尋常小學校
第五學年女　直井仲子（十二歳）

あゝ思ひ出せば九月一日の大地震は此の大東京を荒したのである。そうして三日三晩火の海となつて死體は山と積まれた。今見れば此の大東京の三分の二は燒野原となつて見渡す限りさゝやかなるバラックが立つて居るばかりである。地震だつと思ふ間もなく倒れる塀、崩れる家、悲鳴の聲は嵐のやうにひゞいた、表へかけ出して人々がほつと一息つくかつかぬ中に早や四方八方に炎々として起つた火の手、大地震につき物の大火事はまたゝくまに全市を包んだのである。私達は必要書類をまとめるひまもなく黑田の山へ逃げた、火はどん〳〵私達を追ひかけて來るやうに燃えて來た「ドドドッ」とすさまじい音を立てゝ方々の家の崩れるのを見ると思はず身ぶるひせずにはいられなかつた。その中に交番は燒けて門番の家まで燃えて來た、私達の胸には荒い波のやうなどうきが絶えず打つて居た、天の助けか、人々の滿身の力によつて門番の家を倒すことが出來た。それで幸にも黑田の山の中までは火は入つて來なかつた、其の夜は絶えず爆發の音を聞きながらも、うと〳〵として少しは寢ることが出來た。明けて二日には火はどん〳〵遠くへ行つてしまつたのでやうやく胸をなで下した。明けて三日には私は荷物をかたづけながら「運命の神はどこまで私達を攻めるのであらう」などゝ考へるのであつた。まとめた荷物を車に積んで此の牛込に來たのは思ひ出しても身ぶるひの出る九月一日の大地震があつて以來三日目雨の降つてる最中であつた。そうして三日目でやうやく暖い御飯をいたゞいて暖いお茶をいたゞいた時には思はず目から出た熱涙はぽゝをつたつて落ちた。

大地震の思出

四谷區　第一尋常小學校
第五學年男　齋藤文一郎

大正十二年九月一日二百十日の前日午前十一時五十八分。

此の日は我が國首都大東京を初め關東地方には忘れる事の出來ない大地震があつた。

之れから先何年たつても此の日は忘れる事が出來ないのであろう。地震と同時にそこかしこから火がおこり、七八時間の後には東京全市火の海となつてしまつた。夜になれば電氣もつかなければ、水道もがすも出なくなつてしまつた。電車などはとまり、電話ももちろん通じない、其の心細さは何とも言ひようがない。どちらの空を見ても眞赤で星一つ見えない。

明る日の夜からは、〇人が井戸へ毒を入れたとか、火附をしたとか言ふので大變なさわぎだ。四日、五日とたつ中に今度は〇人ばかりでは無くて社會主義者までが火つけをするなどゝ言ふやうになつた。

十日近くには食料がなくなつて大變にこまつた。

大正十二年十二月九日はあのおそろしい日からかぞへて百日目なので三萬人以上の死者を出した。被服廠や增上寺等では追弔會が行はれた。此の中には父母にわかれた、子供もあらう。兄弟や姉妹にわかれてちり〴〵になつて悲しんで居る人も幾らあるかわからない。みじかい時間にこんな事になるとはおそらく神も思はなかつたであらう。

あゝ何といふおそろしい思出であらう。僕はこのおそろしい思出と、共に忘れられない事はあの當時人々が心を合せて互に助け合ひ慰め合つた心情の美しい事である。

今や復興の新年を迎へ再び東京に平和が來た。

此の時にあたつて益々心を一にして復興の事につとめたら以前にも增して立派な大東京が出來上るであらう。

同情

四谷區　第一尋常小學校　第五學年女　勝田義子

「あゝ……可愛さうな燒け出された人」本も燒け着物も燒けありとあらゆるものは燒かれ、住む家もなく配給の食物にうゑをしのいでたゞさまよう哀れな人々の身の上を思ひやると涙がこぼれ落ちます。それを思ふと私達は幸福だ。ほんとうに……家も燒かれず學校も本も燒けず。……私達は燒け出された人々にはあの海よりも深い〳〵同情をしなければならないと言ふ事が、深く感じられます。私どもがもし燒けた人々に對して同情の心を持つなれば物をやらなくてもする事なす事が、暖かくなり燒け出された人々は、それで暖い心を知るでせう。

大震災の夜

四谷區　第二尋常小學校　第五學年男　池田正偉（十三歳）

夜は段々更けてもう一時にも近からう。東の空は附近の星の光を奪ふ程赤く輝いてゐる。時々ダイナマイトでも爆發するのかドーン……ドーン……といふ響が夜の凍つた空氣を震はせて聞える。火の粉がヒラ〳〵舞ひ上る。恐ろしい光景だ。

「銀座はもう燒けました。」と在鄕軍人の人が知らせて來た。附近の人々も矢張り不安なのか眠らうとする者はない。灰色の不安は地上の何物をも包んで犇々と迫つて來る。南の空には月が皎々と冴え渡つて不安な一夜は更けて行く。

地震の後の私

四谷區　第二尋常小學校
第五學年女　高野千枝（十三歳）

ガタ〳〵〳〵おや地震だと思ふ間もなくうちが左右に動き出した。おばあ樣はおしりをはしよつて前の廣場へ逃げ出した。私といとこは初め舟に乘つてゐるやうだといつてゐたがだん〳〵こはくなつて三人手をつないでえんがはから飛び降りた。益々はげしくなつてうちの中はふすまがたふれる。びんがひつくりかへる。ぶつだんが動き出す。たいへんである。その中にやうやくやんだのでざしきへ上つておばあ樣から安政二年の大地震の話を聞いた。夕方までは小さい餘震が幾度もゆれた。

「明日は東京へ歸るのだからもうおやすみ。」とおつしやつたので寢床へ入つた。私は昨日お父樣といとこでこの仁江戸村に來たのである。……「コケコツコー。」とやの鷄の聲に目がさめた私はお父樣といとこをゆり起した。お父樣はウーといひながら井戸ばたへいらした。いとこは目をこすり〳〵髪をいつた。私は洋服をきかへたりなどした。やがて皆に別れをつげた。

「又來年おいでよ。」「さようなら。」「お母樣によろしく。」などおぢい樣やおばあ樣がおつしやりながらおべんたうの包みを渡して下さつた。夏とはいひながら外はひやつとする朝である。つくば山は紫色のすそをながくひいてゐる。時々草の中でこほろぎがなく。きぬ川まで行くと船頭はまだねてゐた。むりにたゝき起して渡してもらつた。私達はまた歩き出した。さうだうの停車場く着くとちやうど空があかるくなつた。えき夫に聞くと東京へは汽車が行かないさうである。しかたがないから小山の方をまはらうと思ひ切符を買つた。

汽車が來たので、をぢ樣にさようならといつて乘つた。やれ〳〵と外を見るとつくば山はだん〳〵に形をかへる。お父樣は色々のお話をして下さる。私といとこは元氣にしやべりながら時々聲をたてゝ笑つた。しもだて驛で乘りかへるので降りるとえき長が「もし〳〵東京へお歸りになるのならとても小供や婦人を連れては行かれません。今朝號外が來ましたが火事で大變ださうです。」といつた。見ると大きく淺草本所深川方面全滅とあつた。さぁ大變うちは大丈夫かしら。つぶれはしないか。燒けやしないか。心配になつて來た。しかしこゝには四谷のことは出てゐない。お父樣はしばらく考へてゐらしたが「しかたがない。お前達は又此の荷物を持つてゐるなかへお歸

り、お父様は東京へ行つて様子を見てしづまつてから迎へに來るか、それでなければ知らせるからおくつてもらつて歸つておいで。」とおつしやつて私に荷物を渡し階段を上つていつておしまひになつた。私はいとこと泣く〳〵重い荷物を持つておみやげの蓮の實を食べながら涙の流れるのをぬぐはうともしなかつた。アーアと時々ためいきをつくのみで二人ともだまつてしまつた。涙は後から後からと流れる。汽車が來たのでしよんぼりと乘つた。來た時の元氣にひきかへハンケチで涙ばかりおさへてゐた。さつきの停車場で降りて車をやとはうとすると年とつたよぼ〳〵の車やが一人だけで誰もゐない。仕方がないから荷物だけ乘せて歩いて行かうとするとそのおぢいさんが「おぢやうさん乘りなせい。」と言つたので二人でくつゝき合つて乘つた。きぬ川まで行くとおぢいさんは苦しさうにしてこれから先は行けないと言ふ。こまつたな。どうしやう。さんざん考へたあげく車やを歸して船頭にさうだんした。すると大變しんせつに「村の者に荷物を持つて行かせるから安心して二人で行きな。」と言つてくれた。ぢごくに佛とはこの事であらうと思つた。二人は輕い荷物だけ持つて又歩いた。その中に日が暮れかゝつて來た。ほらもう少しだと互にはげまし合つてやうやうちに着いた。庭におぢい樣が立つてゐらして「おゝどうした。」とびつくりなしたので一ぶしじうを話すと安心なさつて「それぢや知らせが來るまで待つてゐるんだな」となぐさめて下さつた。それでも心細くてぼんやりしてしまつた。庭に出てはるかに東京の空をあふいで又泣くばかりであつた。お母樣はどうなすつたらう。妹はどうしたらう。これからはけんくわをしないで遊んでやりませう。お父樣はどうなすつたゞらう。うまく東京にお着きになればいゝが、そんなことを思つてねどこに入つても中々ねむれなかつた。

或日おぢい樣が鷄を料理してゐらつしやるのを見てゐると郵便が來た。見るとお母樣のお手で地震の日のことやお父樣は無事に東京にお着きになつたことが書いてあつてさいごに歸れとあつた。たつた一言ではあるけれども、私はほんとうにうれしかつた。おぢい樣もおばあ樣も「それはよかつたね。それではさつそく明日歸るべえ。」とおつしやつた。うれしくてうれしくて夜の明けるのを待ちかねた。やつと時計が五時をうつた。いとこもやつぱりうれしいのかにこ〳〵してもう起きてゐた。

前のやうに皆に別れをつげてよろこび勇んで七郎さん（ゐなかにゐるいとこ）とうちを出た。停車場へ行くともう汽車が來た。大急ぎで乘つて次々とかはつて行く外の景色を見てゐた。上野えきがつぶれたので、汽車は日ぼりまでしか行かなかつた市内電車も動かないので、歩いて歸つた。神保町から九段あたりまでのひどい景色にびつくりした。たつ時の東京とはまるでちがつてたつた二十日ばかり前のえいぐわは見るかげもなくなつてしまつた。

九段坂から見下すと一面の燒野原で聞いたよりも思つたよりもまだ〳〵ひどい。早くお母樣に

お目にかゝりたいと一そう足を早めた。

うちへ歸つてお母様のお顏を見ると急に又涙がとめどもなく流れて來た。

今年のお正月

四谷區　第三尋常小學校
第五學年男　小田信

今年の正月は去年の正月より遙かに淋しかつた。

何處の家でも國旗だけは立つたけれども門松は立てない家の方が多かつた。

羽子をついたり、たこを上げたりした者は多かつたが、去年の正月の半分位であつたらう。

年の市で賣る松かざり等も餘り賣れなかつたらう。

去年は方々で餅つく音が聞えたが今年は餘り聞えなかつた。年始廻りも餘り見かけなかつた。

年賀狀も澤山來づお酒によつた人も見なかつた。

こんな所を見ると誰の心にも復興の考へが滿ち〳〵てゐるのだらう。

心地よきお湯

四谷區　第三尋常小學校
第五學年女　光井雪枝

太陽も西に沈みあたりは靜かな夕暮となつた。夕飯をすませてお湯屋へと家を出た時には早眞黑な夕やみとなつた時であつた。門を後に往來に出ると此の頃雨續きで道が惡く高い足駄も泥によごれてしまつた。そして道の惡いやうに空もいやに曇り星一つ影も見せず、初春とはいひながらつめたい風は遠慮なく吹いて居る。

左程遠くないお湯屋に着き着物をぬいで手拭を片手に戸を開けたゞほうつと身にせまる湯の煙急ぎお湯の中へ體をひたした。お湯の加減も丁度よく溫まるにつれて手も足ものび〳〵として其の言ひ知れぬ心地よさはどう例へやうもない。時々ぽたりと天井から頭の上などに落ちる露の玉はほんとうに冷たい。さうしてどこもしめきつてあるのでもう〳〵と立ちこめる湯氣に少しへだてた人の顏さへもぼうつとかすんで見えないけれどもあちらでもこちらでもきれいにお化粧した人達の姿が如何にも美しく見える。

いつも黑い〳〵と言はれてゐる私もよく洗つたので大へんきれいになつたやうに思はれた。

あゝほんとうに心地よいお湯。

夕方のお湯の樂しみ　湯氣の間に

見ゆる人影　心地よきかな

震災の後を顧みて

四谷第四尋常小學校　第五學年男　山口正太郎

花の都の東京もあへなく燒土と化し、帝都は慘憺たる巷と變つてしまつた。中にも四萬に近い人命を一夜の中に白骨と變らせた被服廠などは、はたの見る目もみじめな有樣となつてゐる。考へれば考へる程、我等の頭にはいたましい帝都の姿が幻の樣に浮んでくる。

半年程前、兄に連れられて燒跡を見にいつた時、これから先き東京はどうなる事かと小さい胸をいためてゐた。又私達の奮發心はむら〳〵と奮ひ起つた。

帝都復興の言葉を聞くと我等の心は常にひきしまる。

美しく建てならべられたバラックの家々からは皆暖い平和な囁がもれてくるのも皆各國の同情によること丶我等は常に感謝をしてゐる。

そして私達は希望の多い前途を神に御祈してゐる。

親愛なる大阪の友よ

四谷區等四尋常小學校　第五學年女　奥山光子

大阪のお友達、なさけの御心深いお友達、私はいつも心の中でかうさゝやいてゐます。思へば昨年の九月一日、あの未曾有の震火災のため、東京がみるかげもなく焦土と化した時、苦しい痛んだ、私どもの心は皆樣の御同情によつて、よみがへりました。私どもは皆樣のお心によつて苦しみから靜かな平和なあかるみへと歩みよることができました。第二の都にお　でになる皆樣が號外を手にしながら胸に手をあてゝ、私どもの身の上を御案じ下さつた御樣子が今でも私どもの眼の前にさまよつてゐます。あの時に早速お送り下さつた慰問品はほんとうに私どもをなぐさめてくださいました。袋の中から出る一本の鉛筆、一枚の葉書、それは皆私どもを禍から幸へとみちびいて下さいました。私どもは皆樣から頂だいた御本を開き、雜記帳を手にして、綠の葉かげをさしてくるやはらかい光をあびて、心たのしく勉強してゐます。そしていつもその御本を見その鉛筆を持つたびに、この本や鉛筆が神樣のやうなる、うるはしい皆樣のお心のあふれであると思はれてなりません。おやさしい皆樣おなさけ深い皆樣、どうぞ御喜び下さい。私達は皆のお

心によつてよみがへり、今奮闘をつゞけてゐます。明るいみちをたのしく學びつゞけてゐます。

私どもはこれからもつと〳〵勉强します。そして皆樣の尊いお心に對して報ひやうと心がけてゐます。やさしい皆樣、どうぞお身を御大事になさいませ。そして私共をこれから親しい東京のお友達としていつまでも〳〵おつきあひ下さいませ。

九月一日の大地震

四谷區第五尋常小學校
第五學年男　花本良香

僕は、學校から歸つて二階で勉强してゐた。

其の時下では、丁度晝飯の支度をしてゐる時分とつぜんガタガタと家がゆれだし棚の物はおち、本箱も机もひつくりかへり、そのものすごさといつたらない。

僕は、驚きの餘り歩かうにも歩けず、はし子段の上から飛び下りるともう家中の者は柱へつかまつて待つてゐたので僕もつかまらうとしたが柱が動くので、つかまれずお父さんの手をかりてやつとつかまつた。

そして外を見ると瓦が雨のやうにおちて來て出ようにも出られず地震が今やむか〳〵とたゞふるえながら待つてゐた。

だん〳〵弱くなつたので、やれうれしやと外へ飛び出し、まず一安心と思ふ間もなく、二度目の地震、あはてゝ電信柱へ抱附くと隣の家の前には地割さへも出來てゐたので、ます〳〵ふるえながら抱附いてゐました。

やつと地震が止んだので、三光院へ駈だして行くとさあ大變南町が火事だと聞いたので、お父さんはいそいで家へ飛びこんだ、續いて兄さんお母さんも駈けこんで、重要書類其の他の大切な物を持つて一同逃路に附いた。もう、其の時は火が車庫まで來てゐたので、一生懸命になつて逃げだした。

ようやつとの事で校長先生の家の前へ荷物を下し、こゝなら電車通りがあるから大丈夫と、お父さんや、お母さんや、兄さんは、もう一度荷を取りに行つた。

僕と小僧は荷物の番をしてゐた。

火はなほ一そう高くもえ上つて黑煙をだしてゐた。

僕はもう家まで火が來てゐるのかと思ふと心配でたまらないので、側にゐた小僧に番をさせ一生懸命に家をさして駈けだして行くと、幸ひ家は燃えてゐなかつたので、亦荷物の方へ歸つて來る途中小さな地震があつたが尙も足を止めず、やつと荷物の場所へ着いた。そして小僧に家はま

だ燃えないから安心しなと云つて空を見ると黒煙の中には眞白な入道雲が出て段々大きくなり動いてゐた。

其の中にお母さんが大きな荷物をかついで來たので僕も後からかついで上げた。

火は段々下火になつたので一同安心してゐると近所のをぢさんが火はもう消えましたから安心なさいと云ひ廻つたので亦荷物を家へ持ち歸つて、鑵詰を買つて皆んなで御飯を食べた。

そして外へ出ると、そこ〻で一かたまりづゝ集つて地震で恐しかつた話や火事の話をめいめいにしてゐた。

こんな恐しかつた事は生れて初めてゞある。

其夜は家では地震が恐しくて寢られず、家の前の、とたんぺいの下へ板を敷きその上へ蒲團をしいて僕と小僧といつしよに寢やうとしたが、お父さんやお母さんは平氣で家の中で寢てゐるので僕は心配になつてお父さんに尋ねた。

するともうあんな大きな地震はないから安心して寢なと言つたのでやつと安心したが、家では寢られず外でねたが、時々小さな地震があるので、うとうとして夢を見てゐると、急に巡査が通りかゝつて「横濱の囚人が逃げたから家を用心しなさい」と大きな聲でふれて廻つた。

はつと目をさまして小僧を見ると高いびきで寢てゐる。

あゝ驚いた、丁度僕の家が燃えてゐて、お父さんやお母さんは僕と小僧をつれて戸山の原へ逃げた夢を見てゐた所だつた、あゝ夢でよかつたと思ふ間もなく又小さな地震はつと驚くと同時に、それはやんでしまつた。

その時胸にさわつて見ると、それでも早鐘を打つやうにどきん〳〵としてゐた。

其の中に夜は明け放れて鷄が元氣よく鳴きだしたのですぐ飛び起きて小僧を起して家へはいるとお母さんはもう起きて御飯をたいてゐる、僕もおぜんを出したりして手傳ひ、皆いつしよに御飯を食べた。

そして外へ出て方々を歩きながら見物してゐると、今にも倒れさうな家や瓦が皆おちて太陽の光が家の中までもさしこんでゐるやうな家もあつた。亦學校の入口の所などは、ぺちやんこにつぶれてゐた。

其の中に人通が多くなつて交番の前のへんで、人がより集つて何か話をしてゐるので僕も行つて話を聞くと、〇〇人が爆彈を投げたり石油へ火をつけて、方々から火を起したので逃路がなくなつて死んだ者が數萬はゐたと言ふことだ。

其の〇〇人が四谷や淀橋へ何百人となくはいつて來たと言つたので、みんなは鐵棒や刀を持つて夜も晝も通る人をしらべ、あやしかつたらすぐぶつ用意をしてゐるので、夜はちやうちんを持

たなくてはとても危くて通れないやうになつてしまつた。

兵隊さんは鐵砲の先へ劍をつけ、曲り角には大てい、二三人づゝ立ち番をしてゐる。

それで一時はなか〳〵、さはがしかつた。

日のたつのは早いもので、今で三日となつた時、本所被服廠深川糧秣廠等其の外のを合せて數四十萬の燒死者を出だしたと云ふ事を聞いて、朝早くからお父さんと、いつしよに歩いて見た。

どこまで行つても燒原ばかり見渡す限り灰の原といふ中に、所々に金庫があつたり、西洋館の外がはの殘つていたのが突立つてゐるばかり、たゞ灰ばかりであつた。

段々歩いて行く中に萬世橋を過ぎ、和泉橋の上まで來ると、下には女の子らしい死體が大の字なりに手足を廣げ、手には小さな鑵詰を持つたまゝ、顔は眞黑手足はふくれて大人の手足のやうになつて浮いてゐた。

餘りきみが惡いのでお父さん「もう歸りませう」といつたら、「うん歸りませう」と言つてくたびれた足をひきながら九段の靖國神社へ着いた。

そこですゞみながら休んで、おべんたうを食べてゆつくり遊び元氣を附けてやつとの事で家へ歸つたが、餘り暑いので冷たい水で體中を、ふいてくたびれをなほした。

其の中に親類から、地震見舞に來たのでお母さんは、家へ逃げて地震で家はどうだつたか、亦火事で恐しかつた事など話しつゞけてゐた。

この度の地震には家の下敷になつて死んだ者や、水におぼれて死んだ者、火事で燒け死んだ者は書くにかきゝれない程たくさんあつたが幸ひ、私達はその恐しい災難をのがれる事が出來た。

九月一日の大地震

四谷區　第五尋常小學校

第五學年女　山田紀美子（十三歳）

私と、弟二人は、お母様に、つれられて、目黑の、學校をさがるので、行くことになつて、をりましたが、雨がふつたので、やめました。そして、內でふくしゆうをすませておとなりの、時子さんの家へ妹をつれてお人形をもつて、あそびに行きました。

私たちはお人形ごつこをして、あそんでゐると、おばあさんがごはんですよと、いはれたのですぐかへりました。そして家へ歸つて、お手つだひをしようと思つて、テーブルの前にすわつて、おちやわんのふたをとりかけるとあのぎつしぎつし〳〵めり〳〵です。すぐにお父様は妹をだいて、とび出しました。私もお父様のあとについて、はだしのまゝ外へとび出しました。

お母様たちは、皆といつしよにあとからかけていらつしやいました。みんなは前の學校の或一

所にあつまりました。後からよその方がたくさんにきました。豐三は泣きだしましたが恒夫はたゞ目をきよろ〳〵さしてゐます。私はもうむねがどき〳〵して、どうしていゝかわからず、ぼんやりしてゐました。お父様は毛布と洋傘をもつていらつしやいました。私とおばあさんとでそれを砂利の上にしきました。そしてみんなは其の上にすわつてゐました。妹は何か面白さうに「ぢちんきた〳〵」と言つてゐます。お父様はぱんをもつてきて下さいました。が私はそれをたべようと思つてもなか〳〵たべられませんでした。それから半時間ぐらいしてから、私は家へ入つてごはんをたべようと思つてごはんをつぎ、こしをうかしおど〳〵しながらたべかけると又がた〳〵とゆれだしました。そこで私は外へとびだしました。弟もあとからやつてきました。お母様はひきかへして、ごはんをもつてきて下さいました。私たちは學校でごはんをたべました。「夜もこゝにゐるの」と弟は私にたづねましたので、私は「えゝ」と答へました。弟は「ふん」とへんな顏をしてゐました。私はふと御苑の方を見ますと、眞白な雲がまるで雪の山の樣になつて　えます。「兄さん、あの雲」といひますと、「あゝきれいな雲だね」兄さんは又「あの雲ずいぶんきれいですね」とおつしやいました。お父樣は「あゝきれいだね」とおつしやいました。私はぼかんとあたりを見まわしてゐると、蒸氣ぽんぷの音がしてきました。私は火事だと心でさけびあたりを見まわすと新宿館の後の方に火の手が上つてゐます。私はお母樣に「あそこ火事でなくて」と言ひますと、あゝほんに」とお母樣は驚いて立上りました。

お父樣はお兄さんに手つだはせで、もう荷物をつくつていらつしやいます。やがてお母樣も手つだひにいらつしやいました、もう日は、とつぷり暮れて、火事の火だけが、赤々と見えます。私たちはその火のあかりでごはんをたべました、それからお父樣はてんとをはり、みんな大きな人は夜具をはこんでおとこをひきました。そして、私たちはおいのりを一生懸命して、そしてよこになりましたが、ねむれませんでした。〇人があばれだしたんですつて、と言ふ人のうはさをうつゝにきゝました。又方々の人の言ふことがうるさくて、其夜はねむれませんでした。

九月二日

朝ふと目をさますと、夕べもえてゐた所と、同じ所が眞赤でした。私は井戸へ顏を洗に行きますと、深野さんのおぢさんが水をくみませうと、水をくんで下さいました。私は顏を洗ひテントに歸つて見ると、芳也のねぼうがまだねてゐます。私はお父樣に「井戸をばんしてゐますよ」と言ひますと、それは〇人がどくを入れるからだとおつしやいました。さうしてゐると大きいのがゆれ出しました。私はもうこはくて〳〵しかたがありませんでした。やんだ後で私はいくらゆれたらきがすむのかしら、いゝかげんにやんだらよかりさうなものにと、こんなことをかんがへてゐました。皆起きてからごはんをたべました。それからお兄さんはお米を買ひにいつたり、

私もいろ〳〵おつかひしました。おひるはげん米のごはんをたべました。私ははじめてたべたので、おいしゆうございました。ばんにはごはんをたべずにねてしまひました。

九月三日

朝目がさめると、お父様がゐらつしやいません。兄さんにきくと家にねてゐらつしやるよ、といはれたので私は家へいつて見ましたら、おみせの前にねてゐらつしやいました。私はしづかに便所へ行き出て來ると、おなかゞいたくてしかたがありませんから、なんべんも行きました。そしてごはんをたべずにゐました。お父様はげん米ごはんでやられたなといはれました。私のねてゐるそばでは妹があそんでゐました、弟たちはどこへ行つたのかそこいらにゐません。

お母様たちをかまはずに、日はどん〳〵とくれて行きます。お母様はローソクをまくらもとにをいて下さいました、それからあとはしらずにねました。

九月四日

今日は、朝からだん〳〵ひなん者がすくなくなつて來ました。私の家でももうひき上げようとしてゐると、雨がふつてきましたので、大いそぎでかたづけました。私はもういゝだらうと思つて、ごはんをたべました、私はおそろしいのをかまはず勇氣をだして二かいへ上り、いろ〳〵學校の道具をとりまとめて下へもつておりてをきました、ひさしぶりで今夜は家へねられまゝた。お母様はちやうちんをとぼしておきてゐらつしやいました。うつ〳〵しかけるとお母様がみんなおゝきなさい、二三十分後に強震がくると言ふからと、おつしやつたので、私はとびおきかばんをかけござをもつてにげました。豐三も恒夫もおこしてもおきないので、お父様とお母様でだいて出ました。幸はひひるまのこしておいたテントがたすかりました、私はそこへござをしきました。

お父様とお母様で夜具をはこび、とこをとりなほして、小さい者をねかしほつと安心しました私もいつしよにねてしまひました。それで強震がきたかどうかしりません。

にげる時

四谷區　鮫橋尋常小學校
第五學年男　小暮金雄（十三歳）

火が水天宮の前にせまつた時は、もうどつちへ逃げていゝのやらわからなくなつた。うろ〳〵してゐると、人々が皆向ふの方へ行くので、人のあとへついて行けばよいと思つて行つた。おもちや屋の横丁を入つて思安橋の所を通つた。時はおすな〳〵で大こんざつであつた。巡査は高い所で「人だけ通せ荷物は後だ」と一心にいつてゐる。もうその時はずゐぶんくるしかつた。

鐵道院の所へ來た時は火はすぐそばに來た。道は荷物やくるまで前へは行かれない。その思ひはかなしいやうで、急ぎたつても如何ともしやうがない。やつと東京驛の前まで來た。そこで少し休んでゐたがこゝではあぶないと言ふので、おほりばたの所へ來た。そこで一夜あかした。そのねむるまでは、こゝがもし燒けて死んだらどうしようなどゝ、いろ〳〵の事を考へながらねて、翌日の朝宮城内へ入つて兵隊さんから軍用パンをもらつた時は、實にありがたいやうな、とふといやうなほんとうのうれしみにうたれました。その事はいつになつてもわすれられない、實にありがたいと思ひました。

避難するまで

四谷區　鮫橋尋常小學校　第五學年女　阿部利子（十三歳）

九月一日は私たちの一生わすれる事の出來ないかなしい日である。

ちやうど第二學期の初めの日で、學校から歸つて勉強をしてお人形を出してあそんで居た。するとがた〳〵と言ふので、びつくりして外へ飛び出したが、あまりゆれかたがひどいので、足をすくはれてころんでしまつた。

その時お酒屋さんとお茶屋さんの家がつぶされた。うらの長屋のつぶれたその家の中から、どろだらけの人がたくさん出て來た。

だん〳〵地震もしづまつた。あとできいたらお酒屋さんの家では、おばあさんとねえさんとまごさんとがつぶされて死んださうだ。

その中方々で火事がおきたので、火があぶなくなつた。それでおとうさんは大事な物だけ車につんで丸の内へにげた。私たちはつきじのかるこ橋のたもとにゐたが、すぐむかふ岸がもえてゐるのであつくてたまらなくなつたので、どてらをかぶつてゐたが、そこもあぶなくなつたので、丸の内へにげた。三日の日までおとうさんにあへなかつた。おかあさんは、一しやうけんめいにおとうさんをさがして歩いた。そしてあつた時のうれしかつた事と言つたらいひやうもなかつた。

そしておとなりと一緒になつて、丸の内にこやをたてゝゐたが、からだがたまらないので、新宿のしんせきへ行つたが、人の家なのでいやだからバラツクへ來た。

私しはバラツクへ來た時さう思つた、地震のため火事のためこんな穴のあいた家へ入るのかと思ふとかなしくてたまりません。

悲しかつた地震の日

牛込區　牛込區　赤城尋常小學校

第五學年男　根岸喜代治

「たゞ今」と言つて學校から歸つて來た。おばさんもう十一時半だからごはんにしてよ」と言つた「おわがり今おばさん水をくんでくるから」と言つて外へ出ていつてしまつた。僕は一人でおぜんを出してごはんを食べ初めた。其の中おばさんも歸つて來た。まもなく「ごうー」とものすごい、じひゞきがしたかと思ふと、「がた〳〵〳〵〳〵」とゆれて來た。「地震だ」と僕は思はずどなつた。

地震はます〳〵ひどくなつて來る。僕はあぶないと思つて弟と外へ出た。ちやうど外へ出て三歩ばかり歩いた時、とつぜん前の家はものすごい音をたてゝたほれた。「あゝよかつた」とつぶやいた。其の中「火事だ〳〵〳〵」と人がにげて行く。僕はふと空を見た、空は「むく〳〵」とした。黑煙が立ちのぼつてゐる。「火事どこ」と僕は聞いた「火事は光月町」「ずいぶん燃えて來たな、これではこつちへ燒けぬけるかも知れない」と思つて大通へ出た。大通はもはや人でうずまつてゐたまもなく巡査が、「こゝは電線があるからあぶない。又大きい地震が來たら、電線は皆切れ人に電氣がかんじて死ぬかも知れないから、どうか安全な所へにげてくれ」と言ひに來た。大ぜいの人は皆新谷原へにげた。僕も新谷原へにげた。まはりは火で取り圍まれ暑くて〳〵たまらなかつた其の内「ごー〳〵」とものすごい音と共に吹いて來た。「大せん風だ」大ぜいの人がどなつた。其の

しゆんかん土がまひ上り自動車や荷車が吹き上る。あたりでは子供の泣きさけぶ聲が聞える其のものすごさは、ひとゝほりでなかつた。僕はむがむちゆうでにげた。ちやうど來た所が、「こんどは上野へにげないときけん」と巡査が言ひましたから、「それ」と言ふので大ぜいの人は皆上野の山へさしてにげて行く。其のこんざつはひとゝほりではなかつた。僕も人についてにげた。うぐひす谷の所まで來たら、とても上がれなかつた。「わつしよ〳〵」とおしゞふので、としよりや子供はとてもあがれない。其の内やうやく先がすいたので、だん〳〵上がれて行つた。其の内とう〳〵上がつた。「ほつと」一息ついた時「〇〇人」と言つて人が走つて來るので又にげた、やうやく安全の場所に來た時「とつぷり」と日が暮れた。空は眞赤で「かん〳〵」と家の燒ける音や「どーん」と家のたほれる音がものすごく聞える。三日三晩といふものはのまず食はずだから弟は、「兄さんおなかゞすいた」となみだをこぼして言つた。僕は此の有樣を見てなみだが出た。こういふことを言ふので身を切られる程つらかつた。其の中牛込に居る父さんの事が思はれる。「父さんはどうしたんだらう」と弟は言ふ。「大丈夫だよあとで父さんに會はせてやるからね」と言つてなぐさめてやつた。夜はだん〳〵ふけてきたので、僕は弟に向つて、「正治まつておいで、今兄さん父さんを見つけて來るからね」とかたくことはつて出かけた。いかなる僕もおなかゞすいてひよろ〳〵してゐるので、なか〳〵あるけないのも勇氣を出してあるいたが、父さんらしい人はゐなかつた

僕は「つまらないな」とつぶやいた。だん〳〵あるいて來た「正治や父さんゐないよ」「父さんどうしたんだらう、僕つまらないなー」と言ひながらめそ〳〵泣き出した。「なくんぢやないよ、いまにくるから」といつてやつたがなか〳〵泣きやまない。其の中立札をもつた人が來るので、僕はこう思つた。「この中に父さんがゐれば弟はどんなによろこぶだらう」と心の中でこう思つてゐると、其の中父さんらしい人が向ふから立札をもつて來たので、僕はひよいと札を見た。札は「正次九歳、喜代治十二歳」と書いてあつたので、僕は飛び上る程うれしかつた。思はず「父さん」とよんだ。「あつ喜代治か正次はどこにゐる」「こゝにゐる」いまゝで泣いてゐた弟は、この聲を聞いて「あゝ父さん」とすがつた。「正次かおなかゞすかないか」「おなかゞすいた」「そうかたくさんおむすびをもつてきてやつたからおたべ」弟も僕もおなかゞすいてゐるので其のおいしさは、なんとも言へなかつた。僕は思はず「あゝおいしい」と、いつた父さんは「おまい達のおいしいといふかほを見ると父さんはうれしいよ」其の内おなかもくちくなつたので、今までなんぎにあつたことを話すと、なみだを流してよろこんだ。僕も「あゝよかつた」と胸をなで下した。

牛込區　赤城尋常小學校

帝都復興

第五學年女　前角昌子

思ひ出しても恐ろしい去年の九月一日に、あれ程にひどくいためられた此の帝都。復興はむずかしい少くとも五六年はかゝるだらうと思はれて居た此の東京。それがわずか半年たつかたゝぬ今日此頃。帝都は見事によみがへつた。

人々はたえない努力と熱心によつて、春のおとづれと共に都も復興しようとして居る。

私は昨日焼けた町を歩いた。町々は復興の氣持がみなぎつて居た。バラツクが元の様に建つて居た。

町は相變らずにぎやかであつた。

けれどもなんとなく淋しい氣がしずにゐられなかつた。

かつて見おぼえのある店屋が元の半分もないやうなバラツク住居を見た時、復興はしたと言つても言ひ様のない氣の毒な氣がした。

九月一日の天災はあんな大きな商店を、こんな小さなバラツクにかへてしまつた。

けれども小さいながらもよみがへつた事はうれしい。元の様になるまではさぞ骨が折れる事だらう。

でも人々はそれにも負けず、復興へ〳〵と務めて來た。そしてなほ努力して居る。
其のお蔭でさびしい燒野原が、こんなに早く軒を並べた家並を見る事が出來るまでも復興した
私達はこれ等の人々に心からおれいを言はなければならない。
復興の町をいそがしさうに往來して居る人も皆元氣があふれて居た。
そして皆があれ位いでくぐけたまるものか、これから前以上に取りかへさなければと、堅く
心に思つて居るやうだつた。
私は何となくうれしく思はれた。
そしてこの分ならば、元以上に復興された此の東京を見る事が出來るのも、遠くはないだらう
と思つた。

震　災

牛込區　愛日尋常小學校
第五學年男　丸田吉人（十二歲）

夢のやうな九月一日。あの時は僕は何が何だかさつぱりわからなかつた。遊んで居た友達のこ
とも、弟の事もすつかりわすれてしまつた。

たゞ走つた。けれどもふら〳〵してちつとも走れなかつた。やつと震ひのとまつた時、はじめ
てどこかで、
「痛いつ」
といふ叫び聞が耳に這入つたのみ、外は何もわからなかつた。たゞ胸の中がどき〳〵動いてゐ
るばかりだ。
やがてみんな言ひ合せたやうに、古い銀杏の木の下に集つた。まだみんな青い魔の色からさめ
てゐない。何時の間にか向ふの方は火に包まれて居た。握澤の邸の後に火がついた。長井病院が
燒けだしたとさはいでゐる間に長い夏の日は暮れてしまつた。
夕飯のおむすびの上にも何となくこの日の悲しさが乘つてゐる樣であつた。
この夜は眞赤なほのほをながめながら、悲しい夜を明した。六月、可愛い弟の病をなほした木
澤病院もはや灰にならうとしてゐる。いつまでたつても、魔のほのほは消えない。
何時の間にか二日の夜は明けはなれた。火の手はぺろり〳〵と全市をなめつくさうと盛になる
ばかり。
横須賀横須賀。僕はお父さんのことで胸は一ぱいになつた。どうせだめだらうが、どうして居
られるかしらと思ふと、心配は增すばかり。

この時僕は又つけ火と言ふ事を聞いた。石段下の後藤の家につけたの何のと聞けば聞く程こはくなる。お隣には神田の御親類の方が來られて、白いおむすびを見た時、涙を流して喜んだ。

もうお晝もすんだ。みんなでお話をして居た所へお父さん。みんな目に涙をためて迎へた。

もちろん住んでゐた所は黑い灰に歸したさうだ。

やがてこの悲しい日も暮れた。今日は風下だ。みんなの心配は一通りではなかつた。だん〳〵夜は更けてくる。こほろぎの聲もこの恐ろしさをかたる樣だ。

案の通り平河町方面の火は盛になるばかりである。やがて火の紛がとんで來た。もうこの時こそ燒けるとみんな荷をだしてしまつた。けれども火はだん〳〵下火になつて來た。

安心してうと〳〵したこの時であつた再び起された。火の粉は今を盛ととんで來る。木についた火はよういにきえない。けれども神のたすけかこの夜も無事にすんだ。

まるで夢の樣に九月の日はすぎた。

あの二日の晩どうしてたすかつたのであらう。何と神樣にお禮申し上げたらよからう。

今みんなの心は復興へ〳〵と急いで居る。りつぱな以前以上の東京。早く〳〵、この東京をこれになほさねばならない。

恐怖の朝

牛込區　愛日尋常小學校
第五學年女　檜山春子（十二歳）

「ガタ〳〵ズシン」と恐ろしい音がしたと思ふ間もなく家は船の樣にうごく。

「アツ、地震だ。」と思ふとむが夢中でお兄樣にしがみついた。お兄樣は「大丈夫だ、あわてるな」とおつしやつて、いきなり私とお姉樣をかゝへる樣にして廊下へ出られた。

廊下の電氣は消えて、まつ暗やみ。あるかうとすればよろける。やうやうはふ樣にして、はしごだんまで來たけれど降りられない。はしごだんのそばで、又お兄樣にしがみついた。「ミシ〳〵」と家は左右に大きくゆれる。やつと降りると、お父樣が私の手を取つて居間までつれて行つて下さつた。まだゆれる。妹は恐ろしさにお母樣にしがみついてはなれ樣ともしない。家の皆が起きて來た。着物を着てしまふと、とう〳〵恐ろしい地震はやんだ。けれど又ゆれやしないかと不安でたまらない。手足はふるへ、齒はがた〳〵となり、どうきはまだやまない。皆は恐ろしい氣持に無言のまゝでゐた。

お姉樣が其の時「あゝこはかつた」とおつしやつた。私も「ほんたうにこはかつたはね」とはじめ

て言つた。おそろしかつたこと、あわてたこと、しばらくは地震のお話で家中は急にさわがしくなつた。

野宿

牛込區　早稲田尋常小學校
第五學年男　塚本淳

日は暮れた。空には惡魔のやうな雲が一ぱいみなぎつてゐる。眞赤なほのほは赤い影を雲にうつして眞赤になつてゐる。おそろしい。むごたらしいしらせは次から次へと傳はつた。

僕達は此のおそろしい光景を見ながら荷物を竹やぶの中へ運んだ。もはや竹やぶの中には人が一ぱいだ。何處を見てもちようちんが二つ三つぶらさがつてゐる。僕達は草の一ぱい茂つてゐる所へ陣取つた。母はたゞ東の空を心配さうにながめてゐる。

ぱつと北の方がにはかに明るくなつた。人々は等しくそちらに目を向けた。「敦卷町だつ」と言ふ叫び聲は人々の心をぐつとさした。僕はもうだめだと思つた。母も「もうだめでせう。逃げる時はかたく手をひいて」などゝはや情ない事を言ふ。蟲は何事も知らぬやうに「ちんちろりん〳〵」「すいつちよ〳〵」と樂隊をやつてゐる。時計を見ると時計はちやうど二時を指してゐた。突然「〇〇人だつ」つゞいて「助けてつ」と叫び聲が聞えた。一時にどや〳〵と自警團員が飛びこんで來た。「何處に、何處に」とさはいでゐたが、兵隊が來て劍つきでがさ〳〵と草の中をかきまはしてゐた。がやがて「ゐたぞつ」「やつ」ぐさつとさゝつた音が―たと思ふと「しまつた。猫だつた。」と言つた。「なんだ」「わつはつはつはつは」人々はおそろしい中にもあまりのおかしさに笑つた。

「淳」と呼ぶ聲がしたのでふりかへると、父がそばに立つてゐた。「もうぢき歸つてくるよ。安心しておいで。」とおつしやつたので、まあよかつたと安心の胸をなで下した。

やがて夜は明けた。東の空にはお日樣がぼんやりとかゞやいてゐた。けれども惡魔のやうな雲は昨日の名殘を空にとゞめてゐた。

大震災

牛込區　早稲田尋常小學校
第五學年女　石崎深雪

大正十二年九月一日、ちやうど晝食の箸に手をつけようとすると同時に突然の大地震。私達は思はず母に飛び附いた。そのうちにます〳〵烈しくゆれて、私達四人はすがりついたまゝごろ〳〵

ころがされる。壁は崩れ、瓦は落ち、物が倒れたりこはれたりする音が一つに聞えて、そのものすごさは例へやうもない。

やがて、皆は無言ではだしのまゝ競ひあふやうにして逃げだした。最早明神様の大木は「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」の聲に圍まれてゐる。私も一心に祈りながら、地震に降參したいやうな氣持になつた。

間もなく靜まつたと思ふひまもなく、第二回目の大地震。いよ〳〵さわがしくなる。人々は夢に夢見る心地して、唯神佛の助を請ふばかり誰か大音に「この木が倒れるやうだと東京全滅だ。根は三間も五間も張つてゐる。」といつた。人々は半信半疑で聞いてゐる。すると「ドタンバターン、ズツシーン」とすさまじい音をたてゝすぐ近くの芋屋、洗濯屋、米屋の三軒が道一ぱいにふさがつた。しばらくすると、一人の男が血だらけの髪の毛を、ほさつとして目を白黑させ、氣味の惡い女の人を引きずるやうにだいて來る。群集の目は一せいに其の方へそゝがれた。

いくらか止んだやうだ。お宮の境内と實業學校の運動場の境を突きぬけて、その邊には方々の家にあるだけのむしろを敷いた。人々は少しづゝまとまつて行く。いきなり「火事々々」といふ聲を聞きつけるや、私ははるか向ふの空をながめて身振ひした。空には黑煙たてこめてゆーらゆーら不氣味に動いてゐる。

その内に又も强震。止んだと思ふと又餘震がある。こう〳〵日は西のはてに落ち入つた。

それでも私は食物を口にする勇氣がない。電氣は通じない、ろうそくも、燈油も賣切れなのでやむをえず暗闇の夜を明すことにした。赤いのは焰に染つた空ばかりである。暗闇なほど不安なことはない。時々弱々しい火の光を便に通る人があるとうらやましい。機敏な男の人が「火の用心火の用心。」といひながら始終あちこち歩き廻つてゐる。その聲のする度毎に一同は胸をうたれて、心配さうな樣子をする。かうして不安に不安を重ねつゝ明方を待つのであつた。あゝ恐ろしや地震の思ひ出。

火事々々

牛込區　余丁町尋常小學校
第五學年男　關口直治

ヒユウ、ヂヤン〳〵。

けたゝましく鳴る半鐘の音、ポンプの音。

何處だらう。火事は何處だらう。はや交番の前は人で一ぱいだ。

チリン、〳〵。自動電話に賣屋の小僧が入つた。

お巡さんも、自動電話から出て來た小僧も、電話局からの返事が無いとの事だ。大火事でないからわからないのだらう。

ポンプの派出所に行つた。

火の出た所は原町の常樂寺といふお寺だと言つて居た。

今ポンプが歸つて來た。

小火だからすぐ消えたのだらう。

復興

牛込區　余丁町尋常小學校　第五學年女　三上初代

あゝ九月一日は恐しい日でした。私たち市民にとつてあの地震、あの火事は、どんなに不幸な事を起したでせう。

本所、深川、淺草、日本橋、京橋、神田はあのやうな燒野と化しました。東京の最も商業、工業の盛であつた所は灰になつてしまひました。被服廠跡では三萬人の人が死に、子供をうしなつた父母、父母をなくした子供はどうしてよいかわかりませんでした。この時の各國、各地方の同情はそれは〳〵厚いものでした。

けれど、まもなく市民はもとの東京にもどさうとはげみだしました。血氣盛の若者のうつのみの音や、つちのひゞきはこの東京をだ人〳〵とたてゝ行きます。牛も馬も首をふり〳〵車を引いて行きます。朝學校に行く子供の顔も皆いき〳〵してゐます。この市民の精神とあの同情とで復興の第一春を迎へました。

バラツクに居る人々よ、力を落さずこれから出來るこの帝都、新東京の爲につくしませう。早く復興するやう心がけませう。そうして表から見ても裏から見てもはづかしくないりつぱな東京をたてませう。

大震災

牛込區　津久戸尋常小學校　第五學年男　鳥飼行定（十三歳）

昔から地震、雷、火事、親父といつて、地震を一番怖いものにしてゐましたが、少年の僕等には少しの感じもありませんでした。

あゝ怖い〳〵地震はやはり世の中では一番怖い地震は日本の都、僕等の居る東京へ突然やつて

來た。大震動と共に八方の家屋は倒れ、たちまち火災を起して言語に堪えた慘狀は世界に聞えてゐます。忘れもしない九月一日午前十一時五十八分が人々を驚かして、今のバラックを見る原因でありました。

ぐら〳〵〳〵どたん〳〵すは大地震と市民は悲鳴を上げて飛び出した。折から八方に火事が起り花の都はたちまち戰場の樣に變りました。もう〳〵とたなびく煙、炎々と焰は天を焦して燃え廣がつた。消防や軍隊が必死になつて努めたが斷水のために、火は益々呪に呪つて三日三晩惜氣もなく東京を八分通り灰にしてしまつた。燒死者重傷者は數知れず、どこもかしこも生き殘つた人々は一度に衣食住の三つが缺けて、全國の救助を受けやうやく命をつなぐ有樣でした。けれども長き宮城の無事な事は此の上もない國民の仕合せでした。僕は大震災があつてから、一月ばかり過ぎて父に連れられて、燒跡を見に行きました。

其の時はもう以前の有樣はなく今が夢か元が夢かとぼんやりしました。燒け出された人々はバラックを建てるのに忙しく、どこまで行つても又此の怖いおそろしい所を町にします。やはり東京の人々はえらい、やはり都にはたらいて行くのです。思へば惜しかつた惜しかつた文明の都は三日の中に大昔の樣になつた。僕等の友達の學校も皆灰にされたのに、今更地震の怖いと云ふことが思ひやられます。幸に僕等の學校は無事に友達も皆變りなく通學してゐます。いつも大震災の事は忘れませんが、時々ミリ〳〵と來るので妹等はびく〳〵してゐます。しかし今はバラックで全市は復興氣分がみなぎるやうになりましたのでよろこばしい至りであります。

地震の一夜

牛込區　津久戸尋常小學校
第五學年女　川崎貞子（十二歲）

大正十二年九月一日、この日は私たちにとつては永久に忘れられない日である。

四十日の夏休中は海へ、山へ、と遊びに行つた人達は、追々休も殘り少くなつたのでみな思ひ〳〵にあつちこつちの方面から東京さして歸つてきた。その夏休もすんだ日、關東地方の人々におそろしいわざわひがふりかゝつてきたのだつた。

その日私は長い間會はなかつた學友に會ふのを樂みに、勇んで家を出かけた。學校では、色の眞黑になつたお友達とさん〴〵休中のおもしろかつた話をして家へ歸つた。

空には巨人の顏のやうな雲がはびこり、まだ殘暑はずゐ分きびしかつた。店は一日でお休なので店の小僧と弟と話をしてゐた。

時はまさに十一時五十八分。急に「ごうつ」と地鳴がして暴風の海へ乘出したやうに家がはげし

ゆれ出した。「地震」かう思ふと「落つけ」「やたらに外へ出るな」等と言ふ平常のいましめをすつかり忘れてしまつて夢中で外へ出た。

地震は後から〳〵とある。その時はつと私の胸をついたものがあつた。それは二階にゐらつしやつたお父さんとお母さんと妹であつた。まだ二階から下りていらつしやらない。

「もし家がつぶれたら。」と思ふとなんとなくかなしくなつて泣いてしまつた。ゆれもをさまると皆家から出てきた。戸板の上で「もうゆれないだらう。」と思つてゐると、地震はだん〳〵小さくなつて來たが、四方八方から火の手があがつて、見る〳〵うちにおほり一つ越えた向ふでは、みるもおそろしい黑煙がうずをまきながら立つてゐる。

夕方になつた。火はしづまるどころではなく、次第々々に強くなつてくるばかりである。

火つけや物をぬすむ人があつてはいけないと、町の人達が、まがり角まがり角ごとに繩をはつてけいかいしてゐた。だん〳〵暗くなるとどこの家でも「バラツク」を建て始めた。內でもお店の人やお父さんが家の前へ「バラツク」をこしらへた。大切な物はよくしまつて毛布にくるまつて、横になつたが餘震はたび〳〵やつてくる。その度に「バラツク」の眞中にかたまるのであつた。戸のすきまから外をのぞくと眞赤で、あちこちからくる燒け出された人達の中には體から血が出てゐる人も少くない。

いつまでたつても電氣がつかないのでろうそくをつけた。うす暗い光の下に皆の顏がほの白くういてみえる。なか〳〵ねられないのでねがへりばかり打つてゐたが晝間のつかれがでゝねむつてしまつた。

眼がさめた時は太陽は空高く上つて、一夜のうちに變つた東京にやはらかい光をなげてゐた。

お正月が近づいた

牛込區　江戸川尋常小學校
第五學年男　仁木稔

お正月が近づいた。

「もう後二十一ねるとお正月だ」と弟達は母に教へられてゐる、中でも弟の喜びやうは大變である。もう双六を買つてもらつて父に「正月までにやぶいてしまふだらう」といはれた。

「僕は正月になつたら八つになつて四月になつたら學校に行くんだ、そしてかばんや鉛筆なんかを買つてもらふんだ」と弟は言ふ、弟ののぞみはきりがない。そしてそれが何でもない事だからをかしい。

一方妹は着物の事に餘念ない。「あたしお正月になつたら此の間かあちやんに作つてもらつた着

物をきて伯母ちやんに買つてもらつた帶をしめて、お正月だからお白粉をつけて」なんていふ事ばかり言ふ。

小さい妹は「あたしお正月が來たら六つになつて功なんか負してやる」ときはらぬ舌でしやべつてゐる。

中學に行つてる兄は兄で「せいせきがよかつたら時計と萬年筆とぐわいたうを買つて頂くんだ」とゐばつてゐる。

僕もうれしい「僕は大食だからもちを年だけたべて毎日お八つにもちを年だけたべてやる」と言つた。

父は皆の言ふことを笑ひながら聞いてゐたが、僕が言出したら少しきげんを惡くしたやうだから、僕は中途でやめてしまつた。僕の言ふことはまだたくさんあるのだけれど。

此の頃の夕暮

牛込區　江戸川尋常小學校
第五學年女　千葉富士子

今まで照り渡つてゐた日の光も、やがて西の空にかたむいて來た。

暖かつた椽側もかげり出して風吹くたびに木の葉がさら〳〵と動く。

眞赤な太陽は今將にかくれんとして、その美しい光線を遠くの白雲にまでなげて良く晴れた空を紅色に染めてゐる。首をすくめて夕暮を忙しさうに歸り行く人々。運んで走る自動車、省線の音いづれも皆あはたゞしい。

遠く近くに聞える豆腐賣の聲。

「リン〳〵」とならす新聞配達の鈴の音を聞く頃には、美しかつた空の色もだん〳〵うすれていつてたゞ大空には灰色がゝつた雲が、一面にはりつめたやうになつてしまふ。

日の女神はもう夜の床についたのであらうか、やがてピカリ〳〵と星の影があちらこちらにあらはれた。

時々頰をなでる風は次第に冷たくなつて、あたりは刻一刻に暗くなつてくる。

もう今日もくれてしまつたか。

震災當時

牛込區　市ヶ谷尋常小學校
第五學年男　堤　誠

俄にごうつ〳〵と氣味惡い響がしたかと思ふと、大地はぐら〳〵とゆれだした。

此處彼處に女子供が悲鳴をあげてはだしのまゝ飛びだす。屋根の瓦は飛散る。物すごい一大音響と共に家が倒潰する。ほこりはばつと上る。家の中ではたんすが倒れる、壁は落ちる。電燈は左右に動いて天井にぶつかる程ゆれる。激震の稍々靜まつたと思ふとあちらこちらに火の手が上り黑煙はむく〳〵とうづまいてゐる。

そら火事だ〳〵とあたりの人々はさけぶ。折から吹きすさぶ南風に火勢はます〳〵強くなり、東京市は見る間に燒野原となつてしまふばかり。人々は悉く恐怖におそはれ右往左往に逃げ迷ふあゝ火は一刻々々とゝまつて來る。

だん〳〵暗くなるにつれてまともに上る煙は、新宿から半藏門にかけて滿天は眞赤になつた。その物凄い事は言語に絶してゐる。電氣は消える、ろうそくはなし、進退きわまつた。其の上火のせいか體はぽつ〳〵とむされるやうに暑い。

火事は三日三夜も續いて東京市中は火の海より燒野原と化した。

震災の思ひ出

牛込區　市ケ谷尋常小學校　第五學年女　周藤多鶴子

九月一日、あゝ聞いたばかりで身の毛もよだつやうです。

學校から歸つて洋服を着更へ、便所を出て來ますと「がた〳〵〳〵」とゆれだしたのです。私はお母樣のおつしやる通りに簞笥によりかゝつて居りますと、棚の上から物は落ちる。襖は倒れるすさまじい音をしてガラス窓がこはれる。こはれたガラス窓から瓦斯が室内へは入つて來る。鏡臺はひつくりかへる、今にも家が倒れるかと思ふばかりです。やつと少しばかり靜まつたので、表へ出て見ますと、通りには、人がもう大勢集つて居ました。人々の噂を聞きますと、今方々に火事が起きたと言ふ事でした。まあどうしたらいゝでせう。其の晩は江口さんと言ふ大きな屋敷のお庭で野宿です。生れて始めて土の上に寢ました。

空は眞赤です。何だか心配で寢られません。然し其の夜はことなくすみました。朝になると水道の水は一たれも出ない、火はまだやまない。もく〳〵と恐しい煙は次第に廣がります。何時になつたら火が消えるでせう。二日の晩も氣がゝる空を眺めながら寢ました。美くしいあの銀座通りを初めとして下町全部を燒拂ひ、まだ其の上何處をやこうかと言ふのでせう。自然の力と言ふものはかうも恐しいものかと感じました。人間はかういふ折なぜこんなにいくじがないかと考へました。二三日たつて私はお父樣と九段の方へ燒け跡を見に行きましたら、もう其處には盛んに

バラツクを建てゝ居ました。其の後又九段の坂上から見下しますと、新しく建てられたバラツクのトタン屋根が、きら〳〵と日に輝いて、何となく東京の大震災を物語つて居るやうでした。吾等市民は力の限りをつくして早く〳〵前にも劣らぬ、大東京を建てませう。いゝえ〳〵世界に劣らぬ大帝都をつくりませう。

大震災

牛込區　牛込尋常小學校　第五學年男　今村成男

日本帝國は世界の地震國の一に算へられてゐて、古來幾度となく地震におそはれたが、去る九月一日の如き大地震は未曾有で横濱横須賀の兩市は言ふまでもなく、我大東京市も三分の二は焦土と化し、其外湘南地方にも多大の損害をあたへた。

あゝ恐しかりし九月一日よ、此日は朝來昨日の雨もやみ、所々の水たまりには鮮かな日光が反射して誠に心持よい天氣であつたが、突然十一時五十八分ぐら〳〵とゆれ出した。棚の物は落ち家は倒れる樣にゆれ、大地は波を打つ樣に思はれた。すると女中がころげる樣にして飛出したから、續いて皆は出た。此時早くも士官學校新宿方面、砲兵工廠方面からも黒煙が上つた。急いでカツパ坂に來ると、人々ははだしのまゝで飛び出し、皆不安さうに自分の家を見てゐた。まもなく第二の强震が來た。後の家々は倒れさうだ。その中に士官學校の火事は消えたので家へ歸つた地震は續く樣にある、其の度に人々は皆心配した。ふと空を見上げると偉大なる入道雲が空高く出て、其の下は一面火事の煙でおほはれてゐて、其煙が上へ行くと、今まで白かつた雲も褐色にした。

其中に日は暮れた。今まで褐色であつた煙は眞赤になつて、其恐しさは筆舌に盡す事も出來なかつた。世間の人は九時に大地震があるとか、十時にあるとか言つて、うわさしてゐた。僕は益々心配した。八時頃になると大きい兄さんの所から、兵隊が軍用パンとカンヅメを持つて來た。其の夜は庭の芝生で寢たが、僕は中々眠られなかつた。

震災後の私等の生活

牛込區　牛込尋常小學校　第五學年女　平井武子

あの恐しかつた九月一日の大地震も、もはや五ケ月の後となりました。今まで美しく飾り競ふて居た銀座、日本橋、京橋の賑ぎやかな大通も、あの大地震でゆりつぶされ、「アツ」と驚く間に

はや四方八方から火事が起り又しても市民我等の胸に不安の念を起こしたのでした。火の手は益々大きくなり、日はだん〳〵暮れて來る。山の手方面に來た避難者は荷物をしよひ荷車をひき女の人は髪に手ぬぐひを冠りなどして、逃げ惑ふ樣は實に悲慘な姿でありました。下町方面の人は三日も、四日も續く火事にどの位苦しんだことでございませう。殊に本所の被服廠、吉原の池などで何萬何千と言ふ死傷者を出したことなどは、眞に言語に絶してゐます。

幸ひにも震災をまぬがれた私等は、不幸中の幸と思ひます。しかし、今後私等は、生活を改善し日常質素儉約を旨として華美をすて、質實なる生活をなし、又大いに勉學し我日本の帝都として世界にほこる立派なる都を建設することに、大いに努力し、其一助とならんことゝ思ひます。

一日の夜

牛込區　山吹尋常小學校　第五學年男　桑原尚一

やうやく夜に成つた。相變らず餘震は人々を驚かしてゐる。「いつ止むのかしら。」と言ふかなし氣な聲が聞える。幸にも月は出てゐた。

あちこちに張られたテントの中は眞暗であつた。テントのわきに立つてゐたろうそくもこはいのかパチ〳〵まばたきをしてゐた。

ガタ〳〵と言ふ物音、

「ほら又。」と一時にさはぎだす。

すや〳〵眠つてゐる子供は眠をさまして泣きだす。東の空はあかい繪具を流したやうだ。風が少しでも變ると、

「あゝもえて來さうだ。」

と言ふ不安さうな聲が又起る。氣味の惡い魔の夜は次第に更けて行く。

九月一日

牛込區　山吹尋常小學校　第五學年女　松元スミ

思ひ返すもおそろしい大正十二年九月一日午前十一時五十八分。學校から歸つた私共は丁度御飯をいたゞかうと飯臺の前にすはつた處へ、急にぐら〳〵つとものすごい音を立てゝゆれ出した取るものもとりあへず外に出やうと思つた。が餘りのものすごさに立つ勇氣もないしばしは、皆で座敷の眞中に一かたまりになつて、つゝぷしてゐた。たゞもう夢中で心の中でおいのりをする

ばかりであつた。やつと止んだので急いで高田第三小學校の運動場までかけ出して行つた時、もう其處にははだしでかけ出して來た人や、おばあさんを背負つた人や、子供を三人もかゝへて出て來た人達で一ぱいであつた。其の後にも二三度のゆれ返しが來た。と空にはものすごい火の手が上つてこちらにまで段々近づきさうである。壁は落ち柱はゆがみおへつゝいが倒れてゐる等、大變なさわぎであつた。「ほら〳〵又大きいのが來るよ、あぶない〳〵。」とお父さんにしかられたので、びつくりしながら又ござの上に腰を下した。二三分もたゝない中に又米屋の屋根の邊に當つての白い煙「インキ工場が火事だ」とよその男の人がかけ出して來た。それをお聞きになつたお父さんは「インキ工場なら滿留さんの家があぶない。」とおつしやつてすぐござを持つてお見舞にいらつしやつた。間もなく其の火はおさまつた。「まあよかつた。」私は始めて胸をなで下した。

此の時いたゞいたおにぎりの其の味は一入であつた。水は幸に井戸であつたから助かつた。其の夜は運動場で野宿をした。

まあちやんはめづらしいので眞中につるしてあるちやうちんの下で、きやつ〳〵とさわいでは喜んでゐる。もう十時頃になつた、お母さんは「家と違つて冷えるから。」とおつしやつてかいまきをかけて下さつた。それをひつかけて見たものゝどうしても寢る氣にはなれない。少しねむりかけたかと思ふと、赤んぼうの泣聲や、病人のうめき聲で目がさめてしまふ。天をも焦がすかと思はれる炎の勢は次第に強くなつて來る。しかもます〳〵燃え廣がりどの家もみんな、燒きつくさないでおくものかと言ふ樣な有樣、だん〳〵近くなるな、さうおつしやるお父さんのお聲を聞いた時私は心臟が一層高くなるのを感じた。後から〳〵少しばかりの小さい荷物を持つて逃げて來る人が多くなつた。其の樣にして二三日此處に避難してゐた。地震は天災であるから仕方が無い。けれども澤山の人があの恐しい燒熱地獄に落ち入つたことを聞いた時、神樣はあのあはれな救をもとむる人々の聲が、なぜお聞こえにならなかつたのかと思ふ。又此の美しい帝都を一夜の中に灰にしたといふ事は何といふ悲しいことであらう。此の九月一日は私共の子孫の代までも傳へ殘して、澤山の生靈の爲に心から、まつゝて上げなければならない。

復興の精神

牛込區　長延尋常小學校
第五學年男　松岡勇作

あの恐ろしき大火災であのりつぱな大東京も一時に燒野と變つた。しかして此の東京を作り上げて行くにはまづ精神が大切である。僕はかう思つた震災前の心をしりぞけて、儉約を旨とし、勇氣をふるつて、困苦を忍び、勉學にいそしみ、勤勞努力、且つ親には孝行をつくし、朋友には

禮儀をあつくし、しかも公益につとめ以てよい日本人とならなければとても復興は出來ない。そして大東京の復興にあたつては道路は充分に廣くして、衞生に心をむけなければならない。又電車を多く作り速力を早めて交通を便利にし、公園は各所に作つて世界にすぐれた東京をたてなければならぬ。

大地震を思ひ出して

牛込區　長延尋常小學校
第五學年女　加藤アヱ

思ひ出しても恐しい。何うしてあんな事が起つたのだらう。外觀だけ華かな實は少しも確りしてゐない此の東京を、もつとりつぱな都にする爲、虛榮にのみ心を動かしてゐる人達を戒める心で天がしたわざであらうか。それにしても餘り大きなわざわひだつた。罪もない人まで親兄弟に別れて泣いてゐるだらうに。でも私達は幸福だつた。あの日私達は何うしてか、皆座敷に集つて取とめもない話をしてゐた。何時もなら健ちやんを釣床にのせて遊んでゐる間に、お母さんが臺所で御用をしてゐられた頃だつた。若しあの日さうだつたら大變だ。お母さんが臺所から飛んで來て釣床から健ちやんを下す時にはきつとあの家の下敷になつたに違ひない。又逃出して石段の所へ來た時、二三歩早かつたら石垣からころがり落ちた石の下敷にされる處だつた。後でお母さんが「あの時助かつたのは、神樣が守つてゐて下さつたからだ」とおつしやつた。あの當時私は「何んな事があつても決して家へなんか住はない」と思つてゐた。今思ひ出すとをかしくて遂ふき出してしまふ。そして我まゝな心が起るとすぐあの當時の不自由さを思ひ出しては心を戒めるのであつた。

木枯吹く夜

小石川區　礫川尋常小學校
第五學年男　山崎茂雄（十二歳）

朝から吹き始めた風は夕方になつても止まず、つひに夜まで吹きつゞけた。

今頃吹く風は北風で身を切る樣に寒い、外の電線は身ぶるひしてゐる樣にふるへてゐる。時計はもう八時を打つた、それだのにやはり風は止まないでピユーく〳〵とすごい勢で吹きつけては、どこともなく去る。時々話をする聲のみが風の音にまじつて聞えて來る。

蒸氣ポンプが此の冷たい風を切つてどこかへ行つた。思はず外に飛出して見ると何でもなかつた。

此の寒いのに空には平氣で月がかゞやき、星は僕を見つめてゐる樣にしてまばたいてゐる。あまりの寒さに身をちゞめて家に入り、すぐ床についた。うと〳〵する僕の頭にかすかに火の番の拍子木の音がカチ〳〵〳〵と淋しげにひゞいて來た。

外はまだ風がひどい。

或夕暮

小石川區　礫川尋常小學校
第五學年女　神沼政子（十二歳）

うす光をおびた、水色の空が、家や草も木も、すべて空色になつてゐる。雨が今止んだばかりの夕ぐれ、チュク〳〵〳〵、すゞらんの青葉の蔭で雀が一せいに鳴き出した。とび色のしつぽがうごく、飛んできては葉蔭にかくれる。枝から枝へいそがしげにうつりかはる、やがて又一しきりペチャ〳〵としやべるのが、いつもよりやかましくなくて何んとなく、可愛い氣さへする。「明日は天氣になるよ。雀がないたからな。」ゆつくり夕刊をひろげながら、父さまがいふ。雀がなくのうれしいの。」と妹がふしぎさうにいふ。「そうよ。」何げなく答へた。私はやがてよほど水色の濃くなつた空に目をそらした。あはい夕日の色も、いつしかきえて黑つぽく見え出した。すゞらんの枝が、いつしかくつきりと浮いてゐる。つめたいひやりとした風がスウ〳〵と、肌を吹いてすぎた。

復興

小石川區　明化尋常小學校
第五學年男　太田晶二郎（十一歳）

とんてんかん！
とんてんかん！
燒跡にきこゆる槌の音
復興の音！
その音に第二の東京はつくられる
音よつゞけよ！
とんてんかん！
さあ！
つくらう！

市民！
第二の東京を
槌をとれ！
槌をふれ！
汗を流せ！
その音その汗それ第二の東京
さあつくらう！
地震！
へいもたほれ家もたほる
自然の力！　地震！
自然は富を失はせてゆく
すべてを亡ぼす！
我等は自然にうちかつ力をつくらずば
ならない！
東京市民のぜいたくに天罰は下つた！

地震！
ぜいたくの天罰！
えいがの東京！
三日で灰の東京！
ぜいたくをしまい！
さあ！
そうして第二の東京をつくらう！

復興の神田

小石川區　明化尋常小學校
第五學年女　桂　米　子（十二歳）

あの一日の大火事に、神田方面は忽のうちに灰となつてしまつた。
廣い野原となつた神田方面も、今はもうバラックがたくさんたつてゐて、神田のていしやばから見るともう町のやうである。
バラツクとバラツクの間をはいつていつた七つ八つの小さな子供を見て私は思ひ出した。

「あゝあの子たちはこのたのしい雛祭にも、お雛樣がかざられないのかなんてかはいさうな、子だらう」と思ひながら、そのまゝうちへかへつた。

大地震

小石川區　黑田尋常小學校
第五學年男　加藤悌（十二歳）

不思議にもあれ程にあれてゐた空も、十時頃にはすつかり晴れて、ふたゝび秋の日が照り渡つた。

其の日は何んとなく、重苦しい蒸し暑さで、僕と姉とが二階にゐた時であつた。

「ごはんですよ」

下から母の呼ぶ聲が終るか終らない一刹那、恐しい地鳴のうなり聲がすると共に、ぐら〳〵と家は動き出した。

「地震々々」

初の中は、普通の地震だと思つてゐたが、それはそんな物ではなかつた。長く、はげしく止むか〳〵と思ふ反對に、なほ一層ひどく、家は波間の木の葉の如くもて遊ばされた。たなの物は落ちかべはくづれる。

物干臺が一番安全と思つたので、姉と僕とはやう〳〵の事で上つた。なほ〳〵一層ゆれて來る天地震動方々の家のかわらは、雨あられと落ちる。色々の音聲がまぢつて、ゴーッと言ふものすごさ。土煙はモーツと立つて、一寸先も見えない。ゆり返しは追々攻めよせる。一度は此の世の終りかとも思はれ又自分は死ぬかと思つた位だ。

第二震もすんだ。下から父が向ひに來た。

「早く水道端の廣場に行け」と言はれたので、下に居た弟をつれて姉といつしよに、無我夢中で水道端に逃げた。

誰の顏色も眞青。

夜は外にテントを張り、空に紅の色を見ながら不安の一夜を過した。しかし此の地震が十萬の生命をとるとは、夢にさへ思はなかつた。

大地震日大正十二年九月一日午前十一時五十八分。

此の日、此の時は永久に傳はるであらう。

地震の後に

小石川區

小石川區　黑田尋常小學校
第五學年女　井上薫子（十三歲）

大正十二年九月一日は思ひ出しても身の毛のよだつやうな氣がする。

もしあの時一命をすてたなら、今かうして樂しい月日を、おくる事が出來なかつたのだ。

しかし私は今まで何をしてきたであらう。せつかく生き殘つたのに此の全滅した帝都を復興させることが出來ないと言ふ事は、はづかしい事である。

それについて地震學の諸博士も三十年間は地震が無いと言ふから、此の三十年間に努力して、耐震耐火の建築を考案しなければならない。今それに心をよせて居る人はいくらもあることゝ思ふ。

あゝそれでこそ、日本人と生まれて來たかひがあるのだ。私も日本人と生まれて來たからには此の志がなくて何としやう。

あゝ此の心を忘れずに一生懸命に働いたなら、すぐもとゞほりになることは、火を見るより明らかである。

私はこの地震でどんな苦しい事でもしのんできた。又なしてきた、私ばかりではないでせう。東京市民は皆さうであらうと思ふ。

さうだ。「なせばなる、なさねばならぬ何事も、ならぬは人のなさぬなりけり」と、此の格言は私にとつてそれは〳〵はげしい感動を與へた。

大地震

小石川區　柳町尋常小學校
第五學年男　寺田光治

大正十二年九日一日午前十一時五十八分三十秒、それは〳〵大きな地震があつた。

僕が丁度、一市さんの家で讀みちらした雜誌を片づけて居つた時であつた。一市さんのお母さんはちやぶだいにお茶碗やお皿を列べていらつしやつた。

其の時「づどん」と家が持ち上つたかと思ふと續け樣に「がた〳〵」と身體まで動き初めた。僕はさあ大變だと思つて友と名をつけた大門といふ細川邸へ第一番に飛こんだ。つゞいて一市さんは眞青な顏をしてお母さんの小脇にかゝへられて飛んで來た。お母さんの手には煮魚を入れたお皿が握られてゐた。

自轉車屋のお婆さんはこの邸内で、赤ちやんを遊ばしてゐたが、この地震に驚き腰をぬかしてたゞ「南無あみだぶつ〳〵」と口に唱へて靑くなつてゐた。

すこしやんでから門の外に出て見れば、宮内さんの内の藏がこはれて土煙が立つて先が見えない。左を見れば材木屋の材木が倒れてゐて人が通れない。材木の下になつて負傷した人がないと聞いて安心した。又ゆれかへしが來た。材木屋の叔父さんが竹やぶにゆけといふ聲が聞えた。僕も其處へ行つた。

そこにはすでに三百人もの避難者がゐた。

前の藏がゆれる度に「どんがた〳〵づどん」と起るすさまじい物音が、活動寫眞で聞いた西南戰爭の音樂によく似てゐる。それに砲兵工廠の爆發が大砲の音のやうに聞えて、まのあたりに西南戰爭を見るやうである。

あゝ恐しい灰色の雲がもく〳〵と空一廣がつて行く。あの中には倒れた家の下敷となつて死んだ人、或は火事で燒死した何萬人の靈魂がこもつてゐたのだ。

僕は空を見る度にあの雲を思ひ出す。

地理の試驗

小石川區　柳町尋常小學校
第五學年女　上野敏子

弘前と言ふ字が目にうつゝた時「はつ」と思つた。

「弘前々々」あゝ何縣にあつたかしら、何を產するんだつたかしら、昨日おさらひした時にも一度見ておかうと思つてそれきり見なかつた所だ。

「あゝ困つた。」どきん〳〵と胸のどうきが手までひゞいて來て鉛筆がふれる。いろ〳〵昨日おさらひした事がらが、後から〳〵と頭にうかんでくるがどれも「弘前」とは關係がないものばかりだ。

馬市が開かれる所だつたか知ら、師團のあつた所か知ら、いくら考へてもわからない。

「そうだ馬市と書いておかう」とこう思つた時はかなり時間が立つていた。急いで後の問題を書き上げて一度讀んで見た。他の人達はせつと鉛筆を走らせて居る。まだ誰も出さない。「出さうかしら、どうせもうぢきお鐘だから」と思ひ切つて出した。けれど何と無く不安な氣持がした。

一人二人だん〳〵と先生のお机の上には答案紙が高く積まれた。

「ジヤン〳〵〳〵」あゝもうお鐘がなつてしまつた。

へんな氣持で熱いほゝのほりてをおさえながらお教室を出た。

暖い午後の春の日影は長い影を黑い「タークレー」の庭にはつきりと浮ばせた。しばらく自分の其の黑い影を見つめながら再び弘前を考へて見たが、やつぱりわからない。もう級のお友達は何も忘れたかの樣にはねまはつてゐる。

大震災について

小石川區　小日向臺町尋常小學校
第五學年男　田中榮郎（十一歳）

突如として起つた大地震の爲に關東の一角は見事にふんさいされ、それにつゞいた猛火は我が國の主要都市たる東京横濱の下町をなめつくした。帝都としてほこつた東京も、名高き開港場として知られた横濱もわづか三日間にして焦土と化し、幾萬といふ死者を出したのは悲しむべき事だ其の損害は百億圓といはれてゐる。

しかし又一方から考へれば今度の大震災は東京の市民に深いことを敎へてくれた。何かといへばあの九月一日の正午二分前までは其の大部分がうはべばかりをつくしくしようとしてゐて、心はくさりかゝつてゐた。所が大震災が起つてからはさういことがなくなつた。今度の大地震に對して僕は深く感しやをした。

所が世界の各國でさういふ心のくさりかゝつた市民に對して厚く同情して御金の寄附をしたり國中歌舞音曲をてい止してくれたなどゝいふことは、實にありがたいことである。殊に亞米利加合衆國などでは、日本の國民に不自由をさせない樣にといふので、色々の必要品を送つてくれたりした。

此の間僕はお父さんと三越へ買物に行つた途中、日本橋の大通に七階の大建築が二つもそびえ、又兩側の商店は早やもうバラックを建築し、道路には市内電車や自動車、自轉車等が縱横無じんに走り廻り、殊にうれしかつたのは自動車の多いことで、これも復興のさきがけであらうとも思へる。

僕は早く大きくなりたい。それは我が大東京を復興して、ニウヨーク市や、ロンドン市にも劣らない樣にする爲である。

僕の目の前には東京の復興した有樣がちらついてゐる。高ろう建築、高塔などは宮城をとり圍んでゐる。

こういふふうになるのも今から二三十年の後であらう。

おゝ、東京を復興せよ、大東京に。

おゝ、東京を復興せよ、大東京に。

しんちやん

小石川區　小石川區　小日向臺町尋常小學校

第五學年女　關　千代子（十二歳）

新ちやんは、今年五つになります。むじやきでかはいゝけれども、一度おこつたらなか〳〵だまりません。それだけは新ちやんの惡いくせです。けれども氣げんのよい時はなんでもきいて、又人が歌をうたつてゐるとそのまねをしたり、おどつて御覽なさいと言ふとようちえんでおぼえただんすなどをおどります。笑ふ時はまづ目をほそくして、鼻にしはをよせ、白いかわいゝはをだして笑ひます。又新ちやんは氣がきいてゐます。この間私の家へとまつてゐた時でした。私が朝かみをゆふ時くしがなかつたので、「くしがないかな。」とひとり言を言ふと、そばで見てゐた新ちやんがこれを聞いて「もつて來て上げようか」と言つたかと思ふと、どこからかくしを持つて來てくれました。

又こんなこともありました。それは私がおつかひに行く時、新ちやんがいつしよに行きたいといふのでつれて行きました。

そしたらおとなりの家のくゞり戸が開いてゐるのを見て「しめて行かうか」と言つていまにもしめやうとしましたから「いけないいけない」と言つてやうやくとめました。あとで「氣げんのいゝ時はかはいゝものだ」と思ひました。だから新ちやんはおこつてゐない時はかはいくてにこ〳〵してゐます。

張　良

小石川區　金富尋常小學校

第五學年男　森　正　雄（十二歳）

私はぶらり家を出た――どこへ行くともなく。併し足はいつか××山の方へ向いてゐた。××山へ行くのには丸太橋を渡らなければならなかつた。村の人は、その丸太橋を渡ると變なことがあると、よく噂をしてゐたが、私には別段こはいとも思はれなかつた。

いつかやつて來たのはその丸太橋だつた。私は早く渡らうと思つて足を早めた。ふと頭を上げて橋の向側を見ると、今まで誰もゐないと思つてたのに、一人のまつしろいひげを長く生やした老人が向ふから橋を渡らうとしてゐた。仕方がないのでこちらで待つてゐると、老人は平氣な顏でつか〳〵と歩いて橋の中程へいつたが、うす氣味惡く笑ひながら私の顏を見て、片方の靴をポイと谷間へほうつた。

それから私の方へ向き直つて、

「おいチヨツとあの靴を拾つて來い」

と言つた。何といふへんな奴だらう、自分で勝手におとしておきながら、拾つて來いとはあん

まり人を馬鹿にしてゐる。如何に長上の者とはいへ、傲慢もいゝ加減にしろ。こんなぢいさん一打ちに殺してやらうかと思つて、腰の刀に手を掛けようとしたが、「待て〳〵こゝが思案のしどころだ」そう思ひ返すと、怒る心をおさへて深い谷におり、やつとの思で靴を拾つて來た。すると老人はお禮をいふと思ひの外、靴をぬいだ方の足を私の前に差し出すではないか「はかせろ」といふのだらう。あやふく私のかんしやく玉は破裂しさうになつた。しかしまた「こゝだ〳〵」と思ひながらはかせてやつた。

老人は「ふゝん」と鼻の先で笑つて向ふの方へ歸つて行つた。

私はあきれて物が言へなかつた。しばらくすると又もどつて來て、

「お前は教へ甲斐のあるやつだ、やる物があるから五日目の朝こゝへ來て待つてゐろ」

そういふとまたいづくともなく立ち去つた。きつねにつまゝれたやうに思ひながら私は家に歸つたが、どうも五日目の朝が氣にかゝつて仕方がなかつた。そしてあの老人が歩く時チツとも足音のしないのが不思議でならなかつた。その日は誰にも話さずに夜をふかして考へたが、どうしても不思議でならなかつた。

四日はいつしかすぎて五日目の朝は來た。日の出た頃私は帶をしめ直して例の橋の所へ行つたするといつしか老人は來てゐた。そしてこわい顏で私をにらみつけて、

「目上の者と約束をしておくれるとは何事だ。五日目の朝またこい。」

といつてどこかへいつてしまつた。

私はしくじつたと思つた。或夜机に向つて考へてゐると、どこからともなく「夜中におきていかなければ駄目だ」といふ聲がかすかに聞えて來た。

また四日は夢の間にすぎた。五日目となつた。此の間の夜の言葉はまだ私の耳に殘つてゐた。今度こそはと私はその夜眠らずに三時を打つといそいで出かけた。今度はまだ老人は來てゐなかつた。勝つた〳〵と思ふといひやうなくうれしかつた。凡そ三時間もたつたと思ふ頃やつと老人はやつて來た。そして何んといふだらうとびく〳〵してゐると、今度はめづらしくニコ〳〵笑ひながら、懷から一冊の書物を出して、

「お前はよく辛抱をした、ほうびにこれをやらう。よくよめば必ずえらい〳〵人になれる」

私はおしいたゞいた。が頭を上げると、不思議や老人はすでにそこにはゐなかつた。私は本を持つたまゝ、呆然としてしばらくそこにたゝずんでゐた。

不平

小石川區　金富尋常小學校

第五學年男　鎌田正秋（十二歳）

あの犬を僕がほしいといつたのもむりもないのになあ。
自分でみなくてどんな犬だかわからないのに。
小供が大ぜいゐるなんていつても、犬一匹ぐらゐだもの、よさゝうなもんだがなあ。
妹だつて弟だつてほしがつてゐる。
その上小さい妹が大すきだ。
そして世話が大へんだつて、お母さんがするのでもないのに。
かつてくれてもよさゝうふもの。
いくらうるさいといつても、あかんぼの泣くのや、ぼく等のさわぐのになれてゐるくせに。
どうして、かつていけないのかぼくにはさつぱりわからない。

なくなつたお母さん

小石川區　金富尋常小學校
第五學年女　豐島喜美江（十三歳）

九月一日になくなつたお母さん!!

私達が助かつたのになぜ母さん一人助からなかつたのでせう。考へると殘念で殘念でたまりません。あのやさしい母さんはすみ田川でなくなられました。私はとう〳〵母さんの死顏を見ずにしまひました。せめて一度見たう御座いました。

地震當時夜床に入るといつまでも〳〵ねられないで涙が止めどなく出て母さんが目前に見えるやうな氣がしました。どうしてもなくなつたとは思はれません。毎日母さんの夢ばかり見て居りました。何かにつけても「あゝお母さんがゐらつしやつたら」と思ひます。一人たよりの大事な母さんに死なれてしまつて誠に心細くかなしくてなりません。私は親のそろつていらつしやる御方を見ると實にうらやましうございます。

あゝもう一度あのやさしい母さんの顏が見たうございます。

帝都復興第一の春

小石川區　御殿町尋常小學校
第五學年男　今泉正雄

もう此のごろは地震もおだやかになつた。人々は生き返へつたやうな顏をしてゐるけれども、あの九月一日を忘れる人はあるまい。九月一日は夏休はすんでうれしさうな顏をして學校にあつ

まり、式をすましてうれしく家にかへつた。丁度十二時に五分前、お晝のごはんをたべようとした時地震と思ふ瞬間ゆれはじめた。

屋根のかはらは落ちる家は倒れる四方八方に火事ははじまり。あのおそろしかつたこと、今はもう梅の花はよきにほひをしておそろしかつたことはちつとも知らんように生き〳〵として咲いてゐる。風は暖かく人々の心をなぐさめながら吹いてゐる。植物園の草木も青々としてたのしい春をむかへてゐる。あゝ今年こそ帝都幸はあれ。

恐しかつた今朝

小石川區　御殿町尋常小學校
第五學年男　萬上登美

今朝四時半頃目がさめました。霜燒けが出來て痛くて眠られないので起きて藥をつけて又ねました。其の時外を歩く足音が聞こえました。私は眠られないのでどろぼうの事を考へて居たのでもしかしたらどろぼうぢやないかと思つて恐ろしくなりました。戸をたゝく樣な音が聞こえたので、ふとんをかぶつてねやうとしましたが、何だか眠られません。色々の事を考へてゐる中にねてしまひました。朝お母さんに其の事を話したら「それは夢でせう」とおつしやいました。でも私は夢ぢやないほんたうだと思ひました。

展覽會の苦心

小石川區　青柳尋常小學校
第五學年男　杉浦正明（十二歳）

攝政宮殿下御慶事を祝する教育振興展覽會も近ずいた。僕は一生懸命に手工を作つた。展覽會の前夜になつた。僕の手工はまだ出來上らなかつた。とこについてからもいろ〳〵考へたあげく僕は手工をしやうとはねをきた。そのひようしに前の柱にぶつかつてアッと思ふまもなくたおれた。氣がつくとお母さんとお父さんとなんだかひそ〳〵話してゐた。あゝ展覽會は今日だ。まだ手工は出來上らないことを思ふと、ゐてもたつてもゐられなくなつて、とこからでると、お母さんが「正明さん氣をつけなくてはいけませんよ」と言はれた。お父さんは「ねてゐなくてはいけない」と言ふのもきかず、部屋へはいつてでんきをつけた。そして手工にとりかゝつた。でんちを下に入れ西洋館にでんきのつくやうに工夫して作り上げた。學校へきてみると僕のが一番下手であつた。皆飛行機や飛行船等いろ〳〵ならべてあつた。いづれも皆うまかつた。僕のが目立つて下手であつたので、はずかしくなつた。先生がいらつしやつて、展覽會に出すのと出さないの

をくべつなさつた。僕のは出されなかつた。その時こんだの展覽會にはきつと立派な物をこしらへて見ようと決心した。

地震の日

小石川區　青柳尋常小學校
第五學年女　中島茂子（十二歳）

あゝ考へてもおそろしい九月一日。あんなに盛んだつた東京市の大都會も凡そ三分の二だけは火になつてしまつた。あの日はちようど始業式の日であつた。學校から歸つて食事をすましてさて、かたづけようとすると、ごーつとかすかなうなり聲がしたと思ふとどんと下からつき上げた。ちようどはしごだんを上りかけていらつしやつたお父様は「おや何んだな」とおつしやる。その聲がをはるかをはらない中にもうがた〳〵とどうようし出した。お父様はいそいで下りていらつしやつて、磯ちやん澄ちやんを兩わきにかゝへて、はだしのまゝ外へとび出してしまつた。私はびつくりして口もきけなかつた。お父様に「早く出なさい早く出ないとあぶないから」といはれて、私はむがむちうでとび出した。お母様はちようど康ちやんをつれて便所へいつてゐたので、私達より一足おくれて、外へ出ていらつしやつた。砂煙を立ておちる瓦の音やがちやんといつてこわれる音等が入りまじつて聞こえる。第一の大地震がをはつて、五分位立つて、第二の地震がおそつて來た。「あつ火事だい。」とさけんで、隣の人が指さす方を見ると、四方八方から雲の様な煙が見えた。私達はたゞぶる〳〵ふるへてゐるばかりだ。日がくれてそこいらが暗くなると、空一面眞赤に見えた。その夜は家のすぐ近所の谷さんと言ふお父様のお友達の家へねた。その時の食事は少しだつたが、おなかゞすいたせいかほんとうにうまかつた。その夜一ばん中眞赤な空を見ながらえん先に立つてゐた。おそろしかつた一夜も明けた。けれども、まだ遠方には火事の煙が見えた。私とお母様とお父様は、あとの子供を谷さんの家へあづけておいて　一旦家へ歸つた。だい所を見るとそこにあつたおかまがひつくりかへつて、その中に入つてゐた御飯がこぼれて、それに蠅がたかつてゐた。ふろしきに包んであつた。パンと、米びつの中に入つてゐたお米の外は皆砂だらけだつた。私は家へ入つてさうぢにかゝつたが、きのふの大地震におぢけがついてゐて、ちよつとのおちつきもなかつた。今はないが震災後四五日は便所へ行くのもこわい樣だつた。

また大地震

小石川區　指ケ谷尋常小學校
第五學年男　矢下正治郎

「ウワー地震だ。」
僕はお母さんに引張られて外へ出た。もう皆近所の人達が青い顔をして外へ出てゐた、皆口々に
「もう東京にゐるのはいやだ。」
「九月一日の二のまひに成るかも知れない。」
ぶる〳〵ふるへながらしやべつてゐた。電線がまだゆれてゐる。青年團の人がかけ廻る。自動車が地響を立て、二つの目を光らして通る。
「火事だぞ。」
仕事師が提燈を持つて交番の方へかけて行く。
「火事かい。」「火事だとさ。」
と僕は仕事師について交番へ行つた。交番の前は黒山の人立だ。巡査は一聲、
「火事なんかないよ。」
と叫んだ。僕は安心したと同時に氣ぬけがした。
「なんだ火事ぢやないんだ。」
と言ひながら皆は家の方へ歸つて行く。
僕が家へ入らうとした時はもう夜が明けてゐた。前の製本工場からは汽笛が靜かに聞えてくる。

くつの行方

小石川區　指ケ谷尋常小學校　第五學年女　牧野富士江

私は日本橋からお母さんに皮ぐつを買つてきていたゞきました。
私は、なんだか形がいゝので毎日磨いたりして大じにして居ました。
或日のこと私が學校から歸つてきて磨いておこうと思つて、私の下駄箱を見ますと、どうしたのかありませんのでびつくりして色々な下駄箱を見ましたが、やつぱり見つかりません。かた方は下駄箱に入つてゐましたが、かた方は、どうしても見つからないので、えんの下まで見つけましたら、すみの方にあつたので、私の喜びはひとゝうりではありませんでした。きつと犬がもつて行つたのでせう。
犬の足跡がついてゐました。

大地震

小石川區　大塚尋常小學校

第五學年男　渡邊新太郎（十二歳）

僕は九月一日に學校へ行つて式をすませて歸つて來ると、いやに腹がへつたので、早く御飯をすませてしまつた。

するとガタ〳〵と地震が來た。

僕は大きい地震にあつたことがないから、小さいと思つてゐるとだん〳〵大きくなつて來たので簞笥へかじりついてナムアミダブツ〳〵と唱へた。今から考へるとおかしく思はれるが、其の時の心持は一生懸命であつた。一番はじめの時が終ると僕ははだしで外へ飛び下りる。間もなくゆり返しが來た。

バタ〳〵人が走る、泣き聲がする、呼ぶ聲がする。オニギリを持つて來るの、疊をしくのと、大層なさはぎであつた。

僕の内でもゴザをしいて荷物や色々の物を出した。

空を見ると、お日樣の光が黄色で、白い雲がムク〳〵として居る樣は、まことにものすごいやうであつた。

裏の人々も其日は野宿をすることになつた。東の空は一面に眞赤で、見るのも怖ろしい程であつた。

野宿の人々のうはさは、とい〳〵で、八時に地震が來るの、十時に來るのと言はれる時の氣は又かくべつであつた。

僕らはなか〳〵眠られるどころではない、其内いつの間にか、東の空にお日樣が出てゐました。

僕は地震後燒跡を見ましたが其感じは言葉で言ひあらはすことが出來ません。

あゝ怖ろしかつた三日三晩東京の大半を燒きつくして、多くの死者を出した事は、何と言ひませう。言ひあらはすことが出來ません。

スエーデンの御友達へ

駐日スエーデン公使エヴアロフ氏は、二月十九日自動車を驅つて警視廳の外事課を訪れ金子一封の處分方を託して歸つた。この金は本國の外務省から態々送り屆けて來たもので、この金には可憐な少年少女の涙ぐましい心がこめられてゐる。關東地方を襲うた大震災の情報が北歐のスエーデンに着いて間もない或日、首都ストツクホルムを遠く北に離れたヴアルコグ村といふ一寒村の小學校では教師のレタセル孃が小さい生徒達を集めて地圖を廣げながら日本の地震の話をして聞かせた。先生の話が何萬といふ死傷者の話から食ふものも、宿る家もない避難民のことや父母兄弟に別れた哀れな孤兒の話に及ぶ頃は生徒全部が目一杯に涙をためてすゝり泣いてゐ

たといふ。そして自分達の小使錢のうちから五錢、十錢といふ金を醵金して東洋の友達に送つて呉れるやうに頼んだ。この金は四十グラン（日貨二十圓位）の零細なものであるが、少年少女の熱い眞心は必ず通ずるだらうとレタセル先生は一篇の見舞文を添へてストツクホルムの外務省に送り當時外務省では日本に送る見舞の金品は既に發送した後であつたので、此金丈を麻布の公使館宛に送つて來たものである。警視廳ではこの金を病氣に苦んでゐる二三の孤兒に分配してやりたいと言つてゐる。（大正十三年二月三十日讀賣新聞）

右の新聞を讀みきかせられた大塚學校の兒童の眼には一樣に、感謝感動の涙が光つて見えました。そしてそれが綴方となつて受持の教師に差出されたものゝ一つが次の文です。

小石川區　大塚尋常小學校
第五學年女　千葉富美枝（十二歳）

やさしい北の國のお友達よ

家は燒かれ着る物もなく、その日〳〵をさびしく暮らす私たちに、深く同情して下さつたあなた方。私は先生からあなた方のお話を聞いて思はず涙ぐんでしまひました。

私たちはあなた方の眞心こめた贈り物を嬉しくお受け致します。そしてその御恩は末永く忘れません。

灰となつた燒け原の東京にはもう春がおとづれまして、復興の芽がもえ出しました。誰も〳〵この東京を元にかへす爲に、朝早くから夕おそくまで自分の仕事に勵んで居ります。私達は寒さもこらへませう。不足も申しますまい。たゞ體を丈夫にして學問に精を出しませう。

皆一心に働いて居りますので、今にきつと東京は前よりももつと立派になる事と思ひます。

お美しい眞心を以て、私達をなぐさめて下さつた御親切なおやさしい方々よ、これからもきつと仲よくいつまでも〳〵お交り致しませう。

おなつかしいお友達よ。

あなたのお國はまだお寒い事でせう。どうぞ元氣よくお暮し下さいますやうに。私はあなた方が誰よりも多く幸福をお受けになるやうに祈つて居ります。

大火事の日中

小石川區　駕籠町尋常小學校
第五學年男　柳川重雄（十二歳）

空が眞赤になつた。こはい顏をした人々が車におちるほどの荷をのせていきます。その上に子

供がのつてゐます。女が二三人でおもさうにおして行く。又後から車がない人が三四人で荷物をしよつてくる。空を見ると白い煙りのやうなものがむく〳〵あがつていく。となりの人が火は近いやうだなんかといつておどかす。その度にびくゝとする。

九月一日

小石川區　駕籠町尋常小學校
第五學年女　七海千代（十二歳）

九月一日は朝から生暖い風が吹いて居て雨さへ時々降つて居ました。もうお書だと言ふので女中達は御飯の支度をしてゐました。私も臺所で遊んで居ました。女中が地震ですと言つたので、急いで八疊の母樣達がゐらつしやる所に來た時は、不氣味な音と共に上下動にゆれてゐました。母樣は大きな聲で「皆なこゝへおいでばら〳〵になつてゐるとあぶないよ」とおつしやいました。その時のこはいといつたらお話になりません。八疊から北の方にあたる中庭の所を見ると砂煙をあげて、瓦が落ちるけれども家がギー〳〵いつて瓦の落ちる音などは聞えません。その中に第一回の地震はやみました。えんがはをふいて居た爺やが「ゆり返しが來ますのう」と言つて居る時又第二回の大きいのが來ました。母樣は「もうこんな所に居ると、もし二階が落ちるとあぶない」とおつしやつて、奥の十疊に皆を呼びました。皆は呼ばれるまゝに行きました。その中におなかもすいて來たでの、私は女中に言つておにぎりをたくさんつくつてもらつて皆で食べました。その中にだん〳〵地震も遠退いて來ましたので私達は少し安心しました。母樣は「父樣は大丈夫かしらなにしろ三井は高い建物だから」とおつしやつて、ためいきをおつきになりました。そんな事を話合つて居る時、ひよつこり運轉手が歸つてきました。私達は「父樣が無事」と聞いたら「えゝ大丈夫ですけれどもひどい地震なので自動車小屋がまがつてしまひましたから小屋をこわして、出て來ました。來る途中大學が燒けて居るので遠廻りをして來ました」母樣は「どうりで火の粉が飛んでくると思つた」とおつしやいました。運轉手は「では、だんな樣をおむかへに行つて來ます」と言つて行きました。それからもくる地震は、きつといやな音と一しよにやつてくるのです。その度毎に私達は「そら來た」と言つて一しよに固まるのです。こんな事が幾度も〳〵續くので母樣が「庭に戸板を敷いてまあ、あそこで今晩は野宿するのですよ」とおつしやいました。それから一時間ほどたつてから家の自動車のならすらつぱの音が聞えて來ました。皆は「それお歸り」だと言つて玄關へ行きました。父樣は自動車から、おゝりになつてあいかはらず、にこ〳〵していらつしやいました。皆は「お歸りなさい」と言つて、ぞろ〳〵又もとの十疊へ行きました。父樣はまだお書御飯をめし上らないと言ふので、おにぎりとみそづけをあげました。その時のお話はずゐぶん

かあいさうでした。父様がお歸りになる時まだ自動車がこなかつたので、歩いて順天堂病院の所までいらつしやつた時、順天堂病院のかんごふさんなどは　はだしのまゝで病人をたんかで上野の方へもつて行くし、又外の人は行李やふろしき包を持つて、何處へ行くのかわからない、ほんとにかあいさうだとおつしやいました。父様は御飯を食べておしまいになると、皆でいろ〳〵の話をして居る時、急にむく〳〵といやな雲のやうなものが十疊の眞中にあたる所に出ました。母様が「あれは何でせう」とおつしやると、父様が「噴火の煙りぢやないかね」などゝ言つて居る時、治ちやんが來て、「あれは伊豆の大島が噴火したんだつて」といひました。父様は「誰が言つたの」治「今そこの電信柱に大きな廣告がはつてありました」父「そうかね」とそばに居らした母様も「それにさういないでせう」とおつしやいました。臺所では女中達が夜の御飯の支度でもしてゐるらしく、戸棚を開ける音などが聞えます。一人の女中が庭に戸板を持つて來て、戸板の上にござを敷いて、又その上に大きな掛ぶとんを二三枚敷いてそこへおぜんをだしました。それから、おにぎりなどをだして皆で食べました。日の暮れるにしたがつて、空はだん〳〵赤くなつて、時々強い風が吹いてきます。皆は「今何處が燒けてゐるだらう」などと、言つてゐました。不安の中に日は暮れました。誰一人ねるものもありません。交番では、がや〳〵して居る時もあれば、ひつそりして居る時もある。此の火は何處まで燒けるでせう。

大地震大火災

小石川區　駕籠町尋常小學校
第五學年女　佐々木　喜代子（十二歳）

午前十二時十分前、ぐらツと一とゆりしたかと思ふと近所の家がばた〳〵とたをれた、その時私は友だちのうちにゐた。大ぜいの友だちはおどろいてあそんでゐたうちのお母さんにかじりついた。みんなのなきさけぶこゑ、かべがおちる音、なんともいへないおそろしさだつた。

一ゆりの時家はだいぶまがつたらしいが、私はむ中でわからなかつた。

ゆりかへしがきてから私はおもてへ出た。

わざ〳〵遠まわりをして大通へ出ると、大きな家はたいがいつぶれてゐた。私の家もつぶれた。私は妹をつれて大通へつゝたつて居ると、お母さんのゐるのがみえた。私は妹をつれてそこへ行つた。「お父さんは」ときけば「下でつぶされた」と言ふ。皆でつぶれたあとへいつてみたがゐない。どうし樣かと心配してゐる内お父さんは一人で出てきた。私はほつとした。すると向ふの方から火がもえあがつた。私はほつとした。だん〳〵火はつよくなつてきた。私たちは、何ももたずにげのびた。それはひろい原であつた。しばらくすると私のにげた原のもう一つさきの原から人が

大ぜいくる、どうしたのかときけば、つなみがきたと言ふ。みんなはびつくりしてけいさつのとなりのしようぼうの上へ上つたが、火はだん〳〵かぶさる。こゝはあぶないとまた原へにげた。そこで大の仲よしであつた友だちにあつた。

それからともだちと一しよに、飛行船をいれる所へはいつた。こゝはもへつこない。まわりはとたん、中はてつだ。大丈夫だと思つてその中にしばらくおちついてゐたが、そのまわりの家に火がつき火の粉がとたんととたんのあひだからばら〳〵ばら〳〵おちてくる。あつい風がぴう〳〵ふいてくる。とても中にはあつくてゐられない。思ひきつて外へ出れば、かはをこさなければあんぜんのところへいかれない。幸にその川にいかだがういてゐた、その上をみんなわたつてにげる。川へおちてははひ上りはひ上つてはおちして、やう〳〵安全のばしよへきた。そこへもやはり火の粉がおちてくる。みんな草の中へくびをいれ、上からふとんをかぶつて地いきをすつてゐる。よくあさ目をさませばお天道様はけむりでまつかで光はほとんどなかつた。のどはかはく、小さい弟妹はおなかゞすいたとなく、しかたなく川の水をくんできてのませる。やう〳〵のどのかわきもやんだ。色々なんぎをして夕方船にのつて川を上へとにげた。

帝都復興

小石川區　林町尋常小學校
第五學年男　高木良雄（十二歳）

帝都復興はいつ頃であらうか、まあたいがい二三年はかゝるだらう。なにしろ今度の大震災は世界一の損害をした事だから、どうしても二三年はかゝるであらう。だけれども、さすがは帝都だけあつて大火災が終ると、すぐにバラツクが出來て商賣する人は商賣をし、働く人は働き、せつせ〳〵と自分の仕事をすると言ふ風にして、この日本帝都を一日も早く復興をさせて、又元の帝都より一倍この帝都をよくしないと、輕佻詭激の風がたま〳〵ある樣である。早くかういふのをやめさせるのは、たゞ帝都を復興するのが一番である。なにしろ帝都を早く復興させないと、びんぼうをしてゐる人が惡い事をする樣になつて來てしまう。かういふ時は　天皇陛下から御下しになる詔書の御言葉にしたがひ、實行すれば一日も早く帝都が復興をすると僕は思ふ。

それにしても子供のやけ出されの人、又兩親をうしなつた人に取つてはどうしても一日も早く帝都を復興させなければならぬ。ほんとに今度の大震災はにくらしい。これさへなければと思ふがそれも時の運であるからしかたがない。なんにしても我々は是非帝都を早く復興させなければならない。

地震

小石川區　林町尋常小學校
第五學年女　飯塚節子（十二歳）

ちやうどごはんの時であつた。皆は下へかけ下りて、お店の品物の所に寄り掛つて、夢中でゐた所が、前の土ぞうが落ちて、家の中にけむりが一せいに入つて來た。その時のすごさといつたら一通りではなかつた。おとなりのお醫者樣のところへ住友銀行の事務員が胸のあたりを血だらけにしてかつがれてきたので、家にゐるのが一そうおそろしくなつてきた。お向へのうちでは家がつぶれてしまつたので、みよちやんは頭からかべ土だらけになつて、電車通へとはひでた。私たちもこはいので淺草橋公園へ行つた。公園はすわるところもないやうなこんざつであつた。ふと前の方を見ると本所方面は火で一ぱい。次から次へと火のうつるのがわかる。火はだん〳〵はげしくなつた。もう家の方があぶないから店の人たちは荷物を車につんでゐるだらう。大こんざつのまにいつか日はとつぷりくれてしまつた。まだ火はこないと皆うと〳〵始めた。しらぬまに火は公園の三方をかこんでしまつた。四方から火がきては、やけしないければならないと思つていそいでさゐもん橋をわたつて上野のえきについた。だが火のこは盛に落ちてくる。

それから又も上野の山へと行つたがあぶない。こん度はずつと下へおり、キリストのぼちについた。あゝ今はいく時だらう。お店の人はどこにゐるかしら、二日といふものはお互に心配してなにもたべずにゐた。三日目にやつとご飯をたべ、すぐにお父さんはお店の人をさがしに出たきり晩になつてもかへらず、皆は〇人のさわぎでどん〳〵どこかへ行くし、その時の悲しさは一通ではなかつた。それからごはんをたいてゐる所へ、お父さんは店の者一人つれていらした。その時お父さんはもうがつかりしてゐらした。もう其の中夜はあけた店の人は又も他の八人のものをさがしに出た一時頃行くへがわかつたので、かへつて來て、お父さんにお話したらお父さんは涙をこぼして、お喜になつた。私たちはあつい日中をてく〳〵あるいてやつと青山の終點についた毎日玄米のおむすびをたべて、三日ばかりゐた。それから又もお家のしごとをしてゐるうちに、かつしか郡の隅田村へ行つた。そこには多くの避難者が來てゐた。毎日々々そこの家の子供と一しよにあそんでゐた。五六日たつてこの原町へきた。お父さんは十月七日ごろに北海道へ行かれた

私達も寒さに向ふので着物がなければならないやうになると、あれもこれもといろ〳〵よくが出てきた。

なつかしいお友達はどこへ行つたかわからない。私の一番仲よしのお友だちも今はあの遠い〳〵埼玉縣へゆかれたし、あとの二人はどこへ行つたかわからない。もう一度皆さんとそろつて一し

よに勉強して見たい。でもそれは出來ぬ、あゝ私はなんといふかなしい身の上でせう。

九月の震火災

本郷區　湯島尋常小學校
第五學年男　大島愛助（十二歳）

九月一日、あの日は身の毛もよだつ大震火災のあつた日だ。一日の日は學校が早く終り、家へ歸つて晝ご飯をいたゞいて居ると、ゴウ〳〵とものすごい音がしたかと思ふ一瞬間、グラ〳〵と家が上下左右にゆれだした。お母さんは赤坊をだいて、外へ飛出した。角のれんぐわべいの前に立つて、ガタ〳〵ふるえてゐると、高田屋のおぢさんが「こゝはあぶないから天神樣へいらつしやい」といつたので、ちゆうを飛ぶやうにして天神樣へかけ出した。天神樣にはざぶとんや板をあたまにのせた人が、たくさん集つて來た。僕等一家は島居のそばへ陣どつた。間もなくお父さんがお店から自轉車でかへつていらつしやつた。

お父さんが鳥居のそばはあぶないから、どうぞうのそばにある大木の下へ行つた。僕とお父さんと家の方へ行つて見ると近所の人が、「三組町はやけるかもしれないから、荷物をそろへるがよいでせう」と親切におしへてくれたので、荷物をそろへることにした。荷物の半分は高田商會へあとの半分は天神樣へもつて來ておいた。火はダン〳〵と僕の家をなめてくる。黑煙は家の方に上つた。「もうだめだ」とお父さんは落膽せられたやうなかほをしてゐらつしやつた。もちろん高田商會はやけたのであつた。警官が「もう天神樣はだめだから早く上野の方へお逃げなさい」とちゆういしてくれたので池のはたのかんげつ橋の近くへ、荷物をもつていつた。父母が「つかれたならお休みなさい」とおつしやつたので、荷物の上へころがり、眞赤の天をみながら、ねむりについた。目がさめたのは七時頃であつた。

お父さんが「今仲町がやけてゐる早く天神樣へにげよう」と荷物をもち天神樣へもどつた。その時すでに火は仲町をやきつくして、池のはたの一部分をやいてゐた。まもなく晝になつたすこしばかりかないお米をたいて、晝ごはんをいたゞいた。夜になると「天神樣があぶない」とだれいふともなくわたつてきた。僕等一家は湯島學校のやけあとへ、夜つゆをしのぐきたないバラックをつくつた。大砲の音のやうな音が、或は遠く或は近くにきこへてくる。あくる日の朝七時頃、靈雲寺へ〇〇〇〇〇人が入つたと大さわぎしてゐた。見に行つてみると、血を頭から出した人が警官につれられて行つた。

晝ごろお父さんがかへつてゐらつしやつた。二時頃になると雨がボツ〳〵とふつて來た。僕等一家は神樂坂のお寺へ向つた。行く道色々こまつた事があつた。お寺でけん米を食べた時、わす

るゝ事の出來ないほどうまかつた。九月一日、二日、三日の三日間はばかに長いやうであつた。あはれな話をきく毎に「僕等は幸福だ」と思つて居た。お寺で四日間くらし、若松町の親類へ行き、こゝで一ケ月ぐらゐくらした。十月三日には今居る曙町へ行つたのであつた。

月日は流るゝ水の如く、今はたのしい月日をおくつてゐる。

時々九月の震災の事を思ひ出して身にひやあせをかくこともたび〳〵である。

大震火災の思ひ出

本郷區　湯島尋常小學校
第五學年女　上野美重子（十二歳）

生か……死か、

四方に上る火の手はえん〳〵と天をもこがすかの樣にもへくるつてゐる。人々は我こそさきとあらそつて安全地へにげのびる。數度大地の震に家はつぶれ石垣はくづれてゐる。

私も父につれられて近くの岩崎樣のおやしきへにげのびた。

火の手は二日になつてもやまずだん〳〵強くなるばかり……

地震に水道はとまつてしまつたし、風は強いので、火はもえほうだいにもえた、かくて惡魔の如き火は東京市の大部分を、なめつくしてしまつて漸く靜まつた。あとにはたゞ廣い〳〵燒野原……。

「帝都復興」それから間もなくこの言葉がたれからともなくおこりはじめた。そして私のお父さんもこの一人となつてはたらきはじめられた。

都地の燒野となりしこのかたは
かゝしにたる我すがたかな

ほんたうにその頃は皆かゝしの樣なすがたをしてゐました。バラツクが所々にたちはじめたころ、燒野の東京にも新年がおとづれてまゐりました。國旗もたゝず松竹もかざらないお正月でしたが今までのお正月とちがひ、淸く〳〵洗ひ淸められた人々の心には帝都復興の威氣が深く〳〵きざみつけられてありました。

バラツクの軒がならぶころ、私もこの御徒町に立つたバラツクに引うつゝて震火災當時よりはおゐぶん樂にくらせる樣になりました。

本所深川の人たちはこのさむい〳〵冬を、ひとへものでくらしたといふのに、家の燒けない山の手方面の人たちは、何といふぜいたくでせう？　うらめしい……！

家が燒けないなんておゐぶん幸福なのに、その上あんなぜいたくをしてゐるんだもの……、

「美イちやん」今まで震火災のことを考へてゐた私は、ふとおねえさんによばれて氣がついた。今や西に入らんとする夕日はあか〳〵とバラックの屋根に光をなけてゐた。

九月一日

本郷區　誠之尋常小學校
第五學年男　布田正夫

大正十二年九月一日の大地震は忘れる事が出來ない。其の日は丁度赤ちやんの御宮參りの日であつたから、お赤飯やお祝の餅を、方々へあげるので臺所に置いてあつた、お母樣が「御飯ですよ」と御呼びになつたので立たうとすると、めき〳〵といつたと思ふと同時にゆれ出した。又何時もの地震だらうと思つてゐたら家が倒れるやうに上下にめき〳〵どさりがら〳〵音がしだした。やう〳〵外へ飛び出した。ガラスのわれる音あーれと言ふ聲「お母樣早く〳〵」と呼んだ。お母樣が御出になつた時は、たんすが倒れ戸棚が落ちて紙や色々な物が落ちてゐた。「まだ赤ちやんがざしきに寢てゐる」お父樣は急いで赤ちやんをだいて外へ御出になつた時はまるで船にでもゆられてゐる氣持であつた。隣はと氣が附いて見れば春建てたばかりの家がめちや〳〵に潰されてゐる、おばあさんは足をひどくけがをしてゐらつした。西隣の家は九分通りに出來上つてゐたのにそれもめちや〳〵に潰されてゐて大工が下敷になつたのをひつぱり出すのに大さわぎであつた。隣の方と畠に行つてゐると近所の人が大勢やつて來た。皆んな眞青になつて「こんなにこはいことは初めてゞあつた」と言つて、ぶる〳〵ふるえてゐた。「やあ火事だ火事だ」と誰かゞ言つた。煙がだん〳〵近くにやつて來るので又びつくりした。僕達の住んでゐる所は師範學校の裏であるから大丈夫であつた、近所の人達と竹籔で寢た、始終ゆれてゐるので、ゆれるたんびにかやごしに竹につかまつた、犬もこはいと見えて、ゆれるたんびに寢床にもぐりこまうとするから大變困つた、そこら中の人が、がや〳〵とさわぐので寢る氣にならない。青年團の人が「もう、すぐそばが燒けてゐますからお氣を附け下さい」と言つて來た。お父樣は「家は無事であつたけどつきあつてゐた家はどうだらう」とおつしやつて見にいらしつた。歸つてこられない間に幾度も地震があるので心配でたまらない、お父樣が歸つてこられ「よそは皆潰されてゐてこまつてゐらつしやる」とおつしやつた。外で日をながめながら寢たのは生まれて初めてゞあつた、夜中に起きて見れば横濱方面は雲がもく〳〵してゐるほつと明るくなつてゐるのはたいがい火事であらう。「やあ地震」と急いで寢床にもぐりこんだ其の時どこかの鷄が元氣よく鳴いた。

大震火災

本郷區

本郷區　誠之尋常小學校

第五學年女　鹽谷美枝子

ガタ〳〵ガタ、ミシリ〳〵〳〵「あつ、地震々々恐いつ」私は今にも泣き出しさうな顔になつて夢中でお父様の手に飛びついた。家中の者は皆恐しさにふるへながら御座敷のたんすにつかまつて地震のやむのを今か〳〵とまつてゐた。弟達はわあ〳〵泣き出す。私はもう生きたこゝちもなくたゞぶる〳〵ふるへてゐた。けれどお父様は「これはなか〳〵大地震だな」と言つてゐらつしやるだけでちつともあはてゝゐらつしやらない。やつぱりお父様はえらい。わあ〳〵泣く聲がた〳〵言ふ地震の音にまじつて物の倒れる音が物すごく聞える。やつとのことで地震がやんだいそいで外に飛び出さうとしたが體も足もぶる〳〵ふるへて、お玄關まで出るのが中々出られなかつた。ふるへる足にやつと下駄をひつかけて外へ飛び出した。通りの角のお家は倒れてゐる。篠田さんのお倉もすつかりかはらや壁が落ちて今にも倒れさうだ。近所の人も皆外に出てゐる。むく〳〵と眞黑な煙が向ふの空に立上つた。「あつ、火事だ火事だ。どこだらう」皆は急にさわぎ始めた。「帝大だ帝大だ」誰かゞ鋭く叫んだ。「帝國大學だつて、もし病院の方が燒けたら病人等は皆どうするでせう」と思ふとぞつとした。あつちでもこつちでも地震や火事のお話ばかりだ。「十二階が燒けてゐる。吾妻橋が燒け落ちて人が大勢死んでしまつた。やあ警視廳に火がついた。帝劇にうつゝた。」方々からこんな恐しい話聲ばかり聞える。其の間にもお荷物をもつたり、子供をおぶつたりして逃げて行く人がたくさん通る。其の内〇人さわぎが始まつた。方々の井戸に毒藥をいれるとか爆彈を投げるとかつけ火をする等と言ふ恐しい事が聞えて來た。時々藥品の破裂する音が物すごく聞えて來る。お二階にこは〳〵上つて見るとまあ驚いた。大學の大きな建物を赤いほのほがぺろ〳〵となめてゐるではないか。あゝほんたうにこはい〳〵。

九月二日

恐しかつた夜もやつと明けはなれた。朝から水をくむお手つだひ等をした。朝御飯もおひる御飯も玄米のおかゆでおさいも一つもないのにこはいときてゐるからちつとも御飯が食べられない。今日もまだ時々地震はある。火事はまだすこしも下火にならない。空はすつかり火煙ににつゝまれて眞赤だ。四時頃お父様の知つておいでになる木村さんと云ふ御方が燒け出されて、お家にいらつしやつた。お家でも、もう燒けるものと思つて、皆いくらかのお荷物をもつて逃げる用意をしてゐた。私は第一番學校のかばんをもつて逃げようと思つて早くから重いのをがまんして肩にかけてゐた。ばんの御飯をいたゞいて皆三つづゝのおむすびをもつておばあ様の知つておいでになる吉田さんと言ふ方のお家へ逃げた。お父様はお家に殘つて近所を警戒してゐらつしやつた。空は物すごい程眞赤であつた。向ふの方で「今町内に〇〇がは入りましたから御警戒を願ひ

ます」と言つたかと思ふと又こつちの方で「〇〇が今から橋の方でよび笛がなりましたから、御注意下さい」と言つてさわぎ出す。あゝほんたうに恐しい夜であつた。今でも忘れられない。

九月一日を想ふ

本郷區　本郷尋常小學校
第五學年男　長谷川　遠四郎（十三歳）

海水浴、登山に樂しく一夏を過した第二學期の初、九月一日と言ふ其日だ。學校で見違へる程黒くなつた友達と愉快に休中の話を語り合つて家に歸つた。

晝飯を待つともなく待つて居た。間もなく兄はあせばんだ顏をして歸つて來た。そして靴をぬぎ初めた。突然全く突然斷末魔のうなり、怪物のわめきと思はれる樣な地鳴りと共に巨人の手に弄ばれる毬の如く家は上下に震動し始めた。僕は驚いた。「地震だ」と言ふ聲も出ない程驚いたそして前に行かうか後へさがらうか左へ行かうか右に行かうかとうろついて居る。母に呼びとめられ皆と本箱の下に集まつてしまつた。ひばちの上に乘つて居た鐵瓶はころがり落ちて灰かぐらになる。瓦や硝子は大きな音を立て、飛び土煙はもう〳〵とあたりを包む兄は今靴を取つてえんがはに片足を掛けた所なので其まゝゆられて居る。今想ひ出せばをかしい事だが其時ばかりはよく笑ふ妹もにつこりともしないで、かたまつて居た。

漸く地震がやんだ。胸をなで下して家の中を見まはすと花びんはころがりかべは落ちて電氣はぐら〳〵とまだ動いて居る。續いて第二の强震が起つた。急いで外に出ると早隣りの人々は集つて居る。そして今までそう親しくなかつた人と母はむつまじさうに色々と地震の事を言ひ合つたり、ふとんをかしたりして居る。よう〳〵地震の大きいのがなくなつたと思つた頃水道橋方面に火の手が炎々と燃え上つた。折柄吹來る風に火勢は强くなる。黑煙がどん〳〵家の方へやつて來て太陽がちようど火の玉の樣だ。

時々ぐら〳〵と餘震がゆれるので今でも地球が破裂しさうな氣がする。水道が出ずほんぷは燒けたから消防隊は働けない。

いつまでもじつとしては居られないのだ。然し皆は地震で家がつぶれるおそれがあるので中々荷物をかたづけられない。其時家では運惡く女ばかりで男と言つても兄と僕位な者だ。けれども勇をふるつてお藏に荷物をしまひ初めた。僕と妹は見張番だ外に出て居ると金助町の方からどん〳〵人が逃げて來る。大きな荷物を肩にせをつたりたんすを持つたり荷車を引いたり大さわぎだ火の粉がだん〳〵飛んで來る。家の前のしゆろの木に飛火がしてだん〳〵燃えて來た。氣がついた人が大急ぎで塀によじのぼりもみけしてしまつた。

ます〳〵逃げる人が多くなつた。黒煙がごみにまじつた風におくられてどん〳〵やつて來る火も追々近づく。夢中で逃げて來る人の中には泥靴をかゝへてあわてゝ居る人もある。その内に隣の人が「早く逃げなさい」とゞなり出した。火が近づいたのだらうと家でもよう〳〵出て來た。僕はかねて待つて居たのでかごから離された小鳥の様に飛出た。行先は上野山である。

電車通りは大混雜だ。貨物自動車が大きな荷物を乘せてがた〳〵と幾臺も走る。荷物をつんだ車が「はい〳〵」と言ひながら通る。大勢の人達が心配さうな顔をして歩いて來る。僕達も皆手をつないで其の中を切りぬけて行つて上野山に着いた。銅像の横を通つて自治館のそばの草原に陣取つた。僕はこゝに來た時やつと氣が落着いて思はず、ゆつくりと足をのばした。皆上野々々と上野を目ざして來るので僕等が此に來て二時間とたゝない内に西鄕の銅像あたりは、もう立錐の餘地もない程一ぱいになつてしまつた。逃げて來る人の中で伴の者を見失なつた人々は悲しさうな聲をふり上げて夕闇にさけんで居る。一方を見れば紅蓮の焔はにぎやかな銀座も人出の多い淺草も灰になれとばかりにめら〳〵と燃えて居る。其凄さ其恐しさ、僕は思はず身ぶるひした。

眠られない一夜を明してうすひむしろの上にすわつてかなたを見れば紅蓮の焔はまだ消えず、悲しさうな呼聲は昨日にも增して悲凄に聞こえて來る。

その日僕等は生涯忘れられない想を上野の森に殘して王子に行き今は巢鴨に借住ひして居る。

嗚呼九月一日呪はしき其の日に帝都たる東京市の大半は遂にあくる事を知らない惡魔の惡戯によつて焦土と化した。然しこれ程荒された帝都に、も今は復興氣分が漲つて所せまいばかりにバラックが建つて居る。いかなる變事に會つてもよみがへらんとする人間の力のどんなに強いかゞわかる。僕等は大正十三年を迎へた。大正十三年それは復興の第一年である。だから僕等は復興の曉である十三年からよく働いて立派な帝都を作らなければならい。

大震火災

本鄕區　本鄕尋常小學校

第五學年女　森田きよ（十三歳）

紀元二千五百八十三年の九月一日は私共が永久に忘れる事の出來ない大震火災のあつた日であります。長い夏休が濟んで始業式のために學校に行き式が終つて家に歸り母に校長先生始め何れの先生もお變りなく一層御元氣でゐらつしやつた事や、又夏休み中、學友達の大きくなられたことや、眞黒くなられたことや、私も眞黒くなつて笑はれたことなど話しながら晝の食事にかゝると、不思議な地響がしたと思ふと、俄にぐら〳〵と家は動く、窓の鐵ぼうは音をたてゝはづれ、金魚鉢の金魚は疊の上へ水と共にとび出して、ぴん〳〵とはねて居りましたが、拾つてやる間も

なく火事と言ふ聲に私は今の大地震で、きもをつぶしてふるへる足をふみしめて、大事のお人形を三つと、學校のお道具を手當り次第かばんの中につめて母と叔母と一所に逃げました。此の火事は親子つり〴〵にはなれ燒け死んだ人も數知れぬ。子は親をさがし親は子をさがして居るあはれなお話も、澤山に殘されました。地震と同時に火の手が二十何箇所からあがつて東京市の七分を燒きはらひ、二日二夜で立派な建築物も灰となり、大震災のためのそんがいは大變ださうです。でも私は廣い〳〵燒野原になつたのも、戰爭をして敵國に負かされたのではなく、全く天災のためであつたのは、まだあきらめがつくと思ひました。二日二晩の間燒けた東京市を元の通りにするには、すくなくも十年はかゝるさうです。破壞はたやすく建設は困難であります。學校でエプロンへ墨をこぼすのには一秒間家へ歸つてそれを洗ひ落すには、三十分間もかゝります。破壞はたやすく建設は困難です。今市民はその困難な建設にいそがしく、太陽が登ると共にのみやつちの音が盛に聞えて居ます。私共は早く昔にまさる東京市の出來るのを待つて居ります。

復興しつゝある東京市

本郷區　駒本尋常小學校　第五學年男　福武一正（十三歳）

九月一日、古來未曾有の大地震が、關東地方をおそつた。我が日本の帝都たる東京市を初めとし、横濱、横須賀、鎌倉、小田原などは、或は火を發し、又はつなみ、山崩れ等で、全滅半燒に歸し、幾多の悲げきを展開せしめたのであつた。

而しそれは過ぎ去つたことである。

今はもう復興と化しつゝ行くのである。東京市はバラックが一面にすきまなく建ち、旭の登るが如き元氣を見せ、大人は手に手に槌を振ひ子供は、

「日は照る瑠璃の空の下……。」と歌ひながら力を合せて、復興に努力しつゝある。

震災と同時に各外國の同情は非常に厚く殊に亞米利加英吉利伊太利佛蘭西等は糧食藥品病院木材などゝどんどん船で送り、我々の便利をはかつてくれたのであつた。

諸君、此の厚恩を報ゆる爲には、僕等が奮勵努力して、亞米利加のニューヨーク市、ワシントン市巴里市ロンドン市、伯林市、例を擧げれば數限りないが、それ等の都市を合併した樣に立派に我が日本の帝都たる價値のある、大東京市を建設しなければならない。

そして新しい東京市で活動するのは、僕等であるから一層學問に勵み、新發明新發見をなし、我が國を世界に輝かさなければならない。

我等は今暗黑から光明へと、走りつゞけてゐるのである。けれども光明までは、此の先何百萬哩あるか或は火があるか、水があるか、又生活の出來ない樣な苦しい所もあるであらう。であるから我々は、科學の力に依つて何百萬哩も、火も水も苦しいところも突破して早く光明へ、たどりつかなければならない。

而し、我々は火もまだ越えないのであるから、此の先どんなことに、當らうとも志をかたくし、學問の力を利用し、唱歌にもあるやうに、耐震耐火不滅をほこる、大東京市を造り上げ、早く我が日本の帝都として、價値ある未來の大東京市を見たいものである。

ある時の混雜

本鄕區　本駒尋常小學校
第五學年女　立田登代子（十三歲）

大正十二年九月一日。彼の時の混雜、突然ゴーツと云ふ響と共に急にぐら〳〵と家が大波にあつた船の樣に動き出した。庭の植木鉢はひつくりかへり、たなの上にのせてあつたものはみんなバラ〳〵落ち、もう〳〵と上る土煙で先もみへない位、其のうちすこし靜まつたのでいそいで外へ出た。間もなくゆり返しが來たのであわてゝ知らない人にかじりつく。みんなも立つてゐられないのでしやがみながら大地に手をついた。間もなく向ふ側から大妻女學校の生徒がどや〳〵と出て來たが、其の中にはけがをした血だらけの人が五六人ゐた。すると間もなく工兵が大勢女學校の中へは入つて行く。どうしたのだらうと思つてゐたら、がけがくずれて下敷になつた生徒をほり出したり、又たゝみを出して負傷した人をねかしたりするのであつた。

此の混雜の中を巡査が五六人走つて行くので思はず、其の行方を見ると黑い煙が一ぱいになつてゐる。それは日本製パン會社が燒けてゐると通りかけの人が云つた。と往來を見ると學校の先生が四五人で御眞影を奉じながら、靖國神社の方へ行かれる。

さつきからお父さんがおそいので心配して居たのに、坂下の方から歸つてゐらつしやつた。お父さんのお話によると、東京驛はプラツトホームがつぶれただけで、外は何ともないとの事。そんな話をしてゐる內太陽の色が變つて危險になつたので、近所の人と一しよに五番町公園へ逃げた。

あゝ彼の時の混雜。あの時の恐しさ。一生忘れられぬ。

大地震の思ひ出

本鄕區　富士前尋常小學校

第五學年男　安藤　舛（十二歳）

九月一日は、何と云ふ恐しい日であつたらう。其日は、學校の始業式で、校長先生から色々面白いお話をして頂き、樂しく家へ歸つて勉强をしてゐた。

すると突然大きな地震が來たので、僕は、夢中で机の下へむぐり込んだ。父は「大きな地震だ。」と言ひながらそばへ來てくれた。二度目の震動で棚の物は落ちるし、佛壇は倒れるし、ガラ〳〵〳〵瓦の落ちる音で凄かつた。

震動がやんでから、外へ出て見ると學校のれんぐわべいの一箇所が往來へ倒れてゐる。どこの家の屋根も瓦はたいこいおちかゝつてゐる。

僕の家でも必要書類をとりまとめ風呂敷に包んで戸締りをして、電車通りへ行くと、電車があつたので其の中へ避難してゐた。

その中に日本橋方面から煙が出た。本所や深川の方からも火事が起つた。

巡査や在鄕軍人が自動車に乘つて「逃げろ逃げろ」と云つて來たので、上野へ逃げることにした

途中で隨分死傷者を戸板へのせ軍人がかついで行くのを見てぞつとした。上野へ行くと、逃げて來た人で一ぱいである。僕等は其の人達を押分けて、一同は漸く山の中復に場所をとつた。

後から〳〵人が集つて來て今にもふみつぶれさうであつた。

火は諸方から燃へ上るが水道は止り消手がないので增々盛になつて來た。今はもう淺草から出た火が盛になり、僕の家ははさみ討の樣になつてゐる。落ちてくる火のこを拂ひながら、恐ろしい悲しい一夜をそこに明かしたのである。

父は燒けた赤ん坊のふとんと飯びつと一升びんに水を入れたのをせをひ、人込の中を押分けて眞赤になつて歸つて來た。そして「もうだめだ」と言つたので僕は悲しくなつた。

待つて居た母は早速御飯を食べさせてくれたが、昨日の赤飯でくさりかゝつてゐるので、ろく〳〵食べられなかつたが、そばに見でゐた巡査は、十歳位の女の子を連れて、避難してゐたが「食物をもつて出た母親に別れて昨日から、何もたべさせないのですからそれでも結構です。どうぞ一ぱいたべさせて下さい。」と言つてゐるので母は茶わんにご飯をよそつて上げた。

お替りをして大そう喜んでゐた。「さあおなかゞよくなつたら、又母さんを探さう。」と禮を云ひながら人込の中へと立ち去つた。

どこを見ても人と荷車で一ぱいであるが、其の中へ行方を尋ねる人々が、目印の物を差し立てゝ誰々と聲をからして呼びながら、行く人がたくさんにあつた。

雨はぽつ〳〵降つて來た。僕等はとても居たゝまれず、幸に駒込の家が無事なのでそこへ行く

ことにした。

僕は大きな包の毛布とふとんをしよつた。後で考へて見るとよくあんなに持てたと思つた。途中電車通にはむしろをひいてみんなすはつてゐる。僕等ははじを通つて、やうやくのことで駒込の伯父さんの家へつくとすぐにおむすびをこしらへてくれたので皆で一ツづゝ食べた。其の時のうまさは今でも忘れられない。

他の親類も皆燒け出されて來たので、家中一ぱいでずいぶん賑やかであつた。

それから二三日の間は〇〇人が放火をするとか、井戸へ毒を入れに來るとか云ふ噂で、僕も親類の子と二人で鐵の棒で、刀のやうなものをこしらへて、「もし來たら、これでたゝき殺してやらう。」などと話をしながら毎晩夜警をしてゐた。警戒の樣子は面白い。田舍の人がたまのやうなものを風呂敷に入れてしよつて來た。

「ばく彈だ」と言つてつかまへた。しらべて見ると、ふろしきの中からりんごがごろ〳〵ところげだしたので皆で大笑ひをした。そのやうなさわぎでまるで戰爭のやうで夜もろく〳〵寢られない位であつた。

新聞によると燒け死んだ人か凡そ十萬餘人もあるさうだ。實に地震と云ふものは、恐ろしいものである。今では〇〇人さわぎも靜つて、僕は富士前小學校へ上れる樣になり、世の人の御同情を蒙り、學用品や衣類までも頂き、嬉しく無事に通學して居られるが、今だにバラックも出來ず野天に授業を受けて居る者もたくさん有るさうだ。それを思へば僕等は實に幸福であると思つてゐる。

大地震の思出

本郷區　富士前尋常小學校

第五學年女　泉津雅枝（十三歲）

大正十二年九月一日の事であつた。十二時頃突然狼のやうなうなりと共に、大地もくつがへるかと思はれるやうな大騷動が起つた。「地震々々」私は直ぐに立ち上つた。私とお母さんは必死になつてたんすにかじりついた。この時はお父さんはゐらつしやらなかつた。ともちやんといとこのよしをさんは「船のやうだ。死ぬときはいさぎよく死なう。」などゝいつてゐた。お母さんが「こゝにゐては危險だ外に出よう。」とおつしやつた。と思つたらばら〳〵〳〵と四方の壁が落ちた。私たちは息をつくまもなく外に飛び出した。「そら早くはり板を出さなければ、地面がわれたら大變だ」こうもりも持つて出ろ——上を下へのさわぎであつた。地を歩いてもまるであらしの小舟に乘つてゐるやうだつた。裏の畑へ來て見ると、附近の人で一ぱいだつた。此の時日比谷方面か

ち火災が起つたと聞いた。地震に火事はつきものだとは聞いたが、目前に現れてゐた。私は心で祈つた。

「あゝ神様早く火を消して下さい」

火は衰へるどころか又しても有樂町の方面へまわつたそうだ。父は少したつてからお歸りになつた。

お父さんのおつしやるのに駒込橋の方は、電車道にござをしいて不安な時を過してゐる。それから火は京橋日本橋深川淺草殆んど全滅だと。下谷本郷もあやふいそうだ。私の家では駒込に火が付いたら、今晩でも立ち退こうなどゝ相談した。

まあ今日は野宿しようと云つて畑に天とをはつた。あまりこわがると兄さんがよわむしとおつしやるから、晝間はこわくても「ちつともこわくないわ」などといつてゐた。ねる時はきつと神に無事であるやうにと祈つた。あくる日湯島天神の方から避難して來た人があつた。此の悲慘な有様は私はもう此の世のおしまひかと思つた。

お母さんはこわがつて土の様な顔をしてゐらつしやるのに、父さんは土のおちたのや瓦などを平氣の平ざでかたづけていらつしやる。

「もうろうそくがなくなつた。買ひに行つてお出で」お使に行くと「もうれきれですろうそく」とはり紙がしてあつた。私はこわいながらに遊んでゐた。

「どん」私はびつくりした。梅子さんが云ふた。「あれは○人が爆彈をなげるんだつてだから、今かどの所を通ると町の人がしらべてゐるわよ。」

そう、私行つて見て來よう、それをおきゝになつた母さんは、お前どこへ行くんです、あぶないからいけません。

ぎゆうとにらめられたのでやめにした。私はろうそくがないことは知つてゐるが、檢べてゐるのをみたさに、ろうそくをさがして來てあけるわといつて一さんに家を飛び出した。門のところに行くと梅子さんの云ふたやうに、くりーむ屋のをぢさんがしらべてゐた。檢査の様子はなかかな面白い。ある男が來た。「とまれ――あなたどこへゆきますか。」くりーむ屋のをぢさんが聞いた男は、「火藥庫のそばの三百番地です」「あちらから行つて下さい」「とほまわりです」などゝもんくを云ふて行く。

次は車を引いて來た男だつた。よく見るとくりしむ屋のをぢさんのうしろに、はうちようを竿の先につけて身がまへてゐるやうに斜めになつた魚屋のをぢさんもゐた。

おい、「箱にはいつてゐるのは何ですか、」すると男は「爆彈ぢやありません」といふてふたをあけると五六人の子供がぬつと顏を出した。

私は思はずふきだした。ひるになつたから家に歸つて御飯を食べた。今日は直ぐ裏に逃げられるやうにへいをこはして家の中でねた。時々夜中ごろ大きなぢしんが來た……夜があけはなれました……私たちはおかしいものです。學校がある時は休みがうれしいけれどもこういふ時は。學校へ行きたくて〳〵しかたがなかつた。

ひる過ぎになると見しらぬ男が來て、「今日は」と云つて挨拶をして入つて來た。「何か御用ですか、」と聞くと「あの今晩夜警に出ていただけないでせうか」「何時頃」「八時から」「承知しました」夜警に行く人がきまつた。それはいとこのよしをさんだつた。よしをさんはあくる朝の三時頃歸つた。

それから一日たつてからの事であつた。をぢさんが夜警から歸つて來てからの話である。朝早く〇人が池袋へはどつちへ行くのですかと聞いたから、そんな所でまご〳〵してゐると殺されますよ、その電車線路の所を行けばいゝんですといふてやつたらずいぶん頭を下げて禮を云つた。

無事に行き着いたろうか、殺されたかしら、と心配さうにおつしやつた。私はをぢさんは情深い人だと思つた。くりーむ屋のをぢさんだつたら殺したかも知れないと思つた。

あくる日も又〇人のさわぎだ、井戸の中に毒を入れるとか石油を入れるとか云つて大さわぎであつた。

お母さんは井戸にふたをしておけとか、垣戸をしめて置けとかこはがつてゐらつしやつた。

一人や二人の〇人がそんな惡い事をしても〇人みんながそんな惡い事はしまひと思つた。

今でもあの大震災大火災のためにずいぶんなんぎをしてゐる人がある。私たちは自分の幸福を神にお禮申上げねばならない。

家の近くにも避難してきてゐる人がある。ふみ子さんの隣に避難してゐる人はお母さんが行方不明だそうだ。

此の大東京もみわたす限り燒野原になつてしまつた。

此の頃聞いた事だが死者七萬人負傷者三萬三千人行方不明三萬八千人、燒失家屋三十萬戸だと云ふことです。私は其の當時の事を思ひ出すと涙が出て來てしかたがありません。

大地震

本郷區　根津尋常小學校　第五學年男　古川次郎（十三歳）

嗚呼九月一日、誰が思ひ設けやう。此日あの大地震の來たらんことを、時は正に正午に到らんとした十一時五十八分、遠く異樣な音がしたと思ふ間に、大地は波をうち始めた。地震は次第に

大きくなり、石垣はくづれる。へいは倒れる。大音きようと共に大巨屋は倒れる。土煙はもうもうと立上る中を悲鳴を上げて逃げまどう男女の群と、市内の八方に「火事々々」といふ聲が起つた。成程八方に渦卷く黑煙が見え出したと見るまに四方に廣がりもう〳〵たる黑煙は天をおほひ、其の中より赤々とした太陽がものすごく光る。地震の爲め水道は破くわいし、電信、電話は通じなくなつたのであるから、如何に消防隊が必死となつて防いでも、とうていけしとめる事が出來なかつたのである。阿鼻焦熱の大地獄がいたるところに出現された。火は風にあふれ、猛威をほしいまゝにし、一日眞晝より三日明方まで燃え、全市の五分の三を灰と化さしめた。噫呼、維新後五十年間の苦心、國家の花とほこりし大東京市も、一朝にして焦土と化した。これ實に日露戰爭以上の大慘事である。

大地震

本郷區　根津尋常小學校
第五學年　高橋正枝（十三歳）

九月一日。私達は何心なく家に歸り、一休して晝のぜんに向かはうとすると、地の中から異樣な音が聞えて來た。なんだらうと思ふ間もなく、地面が震動して來た。驚いて外へ飛び出さうとすると、すぐ向ふの家が大きな音をたてゝつぶれた。瓦はばら〳〵と落ちる。地球上の生物は皆死ぬのかと思つた。とても外へは出られないから、家内一同家の中にゐた。家の中はかべがすこし落ちた位ですんだ。やつと地震がやんだので急いで往來へ飛出した。もはや外は人で一ぱいである。電車はとまり、自轉車はたほれてゐる。中には下駄をぬき、はだしのまゝで、我家をさして飛んで行く人もある。すると火事だ火事だと言ふ聲が聞えて來た。なるほど空はもう〳〵とたつ黑煙で、太陽が眞赤である。背中に小さな荷物をしよつた人々が、ぞろ〳〵燒けないこなたをさして歩んでくる。見る〳〵中に幾ケ所にも火がついた。その火は恐しい音をたてゝこちらの方にもえて來る。通る人に口々は家族の名前をよんで行く。昨日まで美々しく着かざつてゐた大東京市は一夜の中に灰と化してしまつたのである。

恐ろしき九月一日の大震火災

本郷區　追分尋常小學校
第五學年男　日野俊彦

僕はあの九月一日の恐しい大地震の時、一人の青年園員と僕の家で五ならべをして居た。僕が一つうたんとすると、突然に起つた第一回目の大地震が、どしん。始めかなり小さかつたので、

家中、皆このぐらゐといつてゐると、急に大きくなつて、どしん〳〵〳〵がた〳〵〳〵と東西にゆれたが、その時思ひついたのは、今迄日本晴と言はれた程の空に、なんとも言ひ様のない程の怪雲がういた。僕はそれを一心に見つめてゐると、方々の青年團員が「三時半には大きなゆり返しが來るさうですから注意をして下さい」と大きな聲を聲を出して駈廻はつて居た。

その時、外が一そうがや〳〵して來て、僕はどうしたのかと思ふと、第一高等學校に近い所の帝國大學の一室が、もうとしたる火に包まれてゐるのではないか。僕は驚いてすぐ家にかへつてお父さんや、お母さんに告げた。

お母さんは驚いて、「これはあぶない、こうしちやあゐられない。」といつて、逃げる用意を整へた。その時、第三回のゆりかへしが、どしん〳〵がた〳〵といつた。今度は餘り强大ではなかつた。その中に暮方になつてきた。僕は今日はいつたい全たい、何所でねるのかと氣をもんだ。その中に日は暮れて、東の空一面に、火の空になつて高い所から見おろすと、まるで火の海の様であつた。そればかり考へておると、又青年團が「〇〇人〳〵」と大きい聲をはりあげた。其の〇〇人のしわざは井戸の中へ毒を入れるやら、綿に石油を付けて火をつけ、それで薄暗いろうじにある。窓になげ込み、世間に知られたる家々には、ばくだんを投げ込みするのであるから、「〇〇人」と、青年團が呼ぶと、すぐに人ががや〳〵する、お父さんは竹ほうをもつて、お母さんは電氣が消えてゐるから、弓ぢようちんをもつて夜警をつゞけたが、だん〳〵夜がふけるにしたがつて火がます〳〵盛に燃えて、こちらへ向つてくる、お母さんは「これは夜警ばかりつゞけてはゐられない」と言ふので、阿部邸前における椎の大木の根本へ近所の人々と共に、二日避難をつゞけた。そこには幾百人といふ人で、椎の根本は一ぱいになつてしまつたが、僕等は外側で避難をした。僕等がにげると、僕がおもちや、學校道具等いろ〳〵のものをかつぎ逃げやうとした。その時お父さんが「こんな時には、そんなものをもつては逃げられない。持つなら食物や、お金を持つて、めい〳〵ふとん一枚づゝもつて、逃げだ方がいゝから、そんなものはうちすてゝおいで」といつたので、僕は殘念ながら家の中へおいてにげた。

九月一日の大地震

本郷區　追分尋常小學校　第五學年女　鷹巢富子

大正十二年九月一日は忘れる事の出來ないおそろしい日であつた。あの恐しい大地震が、突然起らうとは夢にも思はなかつた。此の日私は始業式に來て、色々と休中の事や黑くなつた顏や手足をほこり合つたりして、たのしく式をすませて、いそ〳〵と家にもどつて來て明日の御道具を

そろへてゐると、おかあさんが「富ちやん御飯をお上りなさい」とおつしやるので、私は下へ下りていつてみると、もうたべるばかりになつてゐた。いそいでおぜんに向つて皆それ〴〵はしを手にした。兄さんが「やあ久しぶりの御馳走だなあ」と一口たべかけた時、がた〳〵〳〵とやつてきたのはあの恐しい大地震であつた。「あつたいへん」皆はあわたゞしく叫んだ。皆の顔色はさつとかはつた。私は口もきけなくなり、きゆつとむすんだ齒がとめどなくふるへた。皆は、はしる様にたんすの下にかたまつてゐた。むねはむか〳〵とわき上つた。こわさでどうきがする。御飯をいたゞく氣にはもちろんなれなかつた。しばしの間靜るのをまつて、私やねえさんは、はだしで外へ飛び出した。お母さんはいくらいつても「どこに居ても死ぬ時は死ぬ。お前たちが死んだらば、お母さんも一しよに死ぬ、これが親としての人じやうです。安心しておいでなさい」といつてあわてる様子は一てんも見れなかつた。すぐ向ふには黑い煙が上つた。おぢいさんは、お母さんよりも又おちついていらつしやつた。ついには黑く上つたけむりは大學の火事であることを知りました。その中に白わたの様な、雲がふわ〳〵と四方の空をおほつて行きました。太陽はいつにない眞赤な色になつてきました。その有様はりんごの赤くじゆくした實を梅のつぼみの様な白雲がやわらかにつゝんでゐるやうでした。

あたりはだん〳〵うすぐらくなり、太陽が西の空へとしづみかけた頃から、白雲のやうな雲は紅にそまりかけ、全く太陽のしづんだ頃は、もう血を流した様になつてまゐりました。これは眞赤にもえたほのほであつた。ことをお兄さんからうかゞひました。

この恐しかつた大震火災に、まぬかれることの出來たのは、不幸中の幸で有ると家内一同はたがひによろこび合ひました。けれど本所深川何處にしても、大勢の人のおなくなりになつたといふことにたいしては同情の涙をそゝがずにはゐられません。

少女

本郷區　眞砂尋常小學校　第五學年男　木村　正（十三歳）

僕は七時に床を出た。

今日は正月だが朝食は例の如く食はない。九時頃店に出てみると、戸々に國旗がかゝげてある。いよ〳〵今日から、大正十三年の年が始るのだと思ふと、何だかあらたまつた様な、感じが身にしみて來る。客は一人もゐない。店員が二人きりだ、ほかの話相手がないので、ぼんやり前の理髪屋を見て居た。

理髪屋の店では、一本の國旗が風に吹かれて、ひら〳〵と動いて居る。太陽は側の電信柱と國

旗とを等分に照らしてる。向ひ側の地面は、霜どけがてて、太陽のある所だけ黑くなつて居る。今まで氣づかなかつたのか、不思議と思はれる程眞正面に、一人の少女が全身に、太陽を浴びてじつと立つて居た。

着物は風にはた〳〵動いて居る、頭の左側に着けて居る綠色のリボンも動いて居る、少女は右の方を向つて、隣の菓子屋をながめて居る樣だ、何をして居るかそれはわからない。大福かしら頭を右の方にかしげて、小さい口をほつかりと開けて、ぼんやりとたゞ目をその方に落して、手をだらりと下げて居る。友を見つけて居るのかしら。今度は頭に手を上げて一寸リボンをいぢつて、その手を胸の所まで下げた。今度は手まりか何かを、する樣なまねをして居る。

僕はあの少女を見る度に、九月四日の夕方あの子が、叔父さんに連れられてこゝにやつて來た時の事を思はづには居られない。たゞ一枚のゆかたをたらりとつけて、泥によごれた手拭を、かたく頭に結んでひかれる樣に叔父さんの後に立つて居た。

何でも話を聞くと、此の子の家は本所の被服廠近くであつたさうである。震災の時は、すぐに父母に連れられてあの被服廠へ入つてしまつたので、出るにも出られず大勢の人におされて居たが、其の內あの恐しい卷風にあつて、親子のものは分れ〳〵になつてしまつた。

それから少女は、安田さんの屋敷の池の中へ入つて居たので、やつと命だけは取り止めたのださうだ。

或日、僕が學校から歸りかけると、少女が入口に立つて泣いて居た。僕は不思議に思つて「なぜ泣くの」と、やさしく尋ねると、少女は泣く〳〵「父さんや母さんに會ひたいのだが叔母さんが會して下さらないの」と言つた。

僕はこの少女はまだ知らないのだなとさとつた。

さうすると急にかはいさうになつて一しよに、涙がわいて來て、どう返事してよいかわからなかつた。「叔父さんば親切な人だよよくかはいがつてくれるだらう。」

僕はやつとかう言つて家へ走つて歸つたのであつた。

今までじつとして居た、少女は急に何か思ひ出した樣に、ぽこ〳〵と下駄の音をたてながら家の中に、かけ込んだ。

三丁目の方から二三人の子供が

日は照るゝりの空の下
あやしくゝらきかげはなし

と歌ひながら店の前を通つて行つた。

忘れがたき夜明

本郷區　眞砂尋常小學校
第五學年女　山内幸子

私は十二月三十日に早くねたせいか、二時半頃から目がさめた。ふと見ると兄さんが居ない。何だか家がさわがしい。お母さんに聞かうと思つたがやめた。その中にかうしががりとあいて兄さんの後にはこの頃ちよい〳〵いらつしやる。お産婆さんがいらつしやつた。私はお母さんに「起きてもいゝ」と言つたら、「まだねていらつしやい。」といつもやさしいお母さんがこはい顔をしておつしやつたから私は、「あゝ何か事情が有るのだな」と思つた。ひよいと隣にねてゐる小さい兄さんを見ると、まだ樂しいゆめを見てゐるらしい。にこ〳〵と今にも笑ひさうな顔をしてゐる。私はそのまゝ靜かによこになつたが、なんだか前よりもいつさうさわがしくなつた。がまんしきれず、私はちよつと體を上げて見ると姉さんは苦しさうな樣子をしてゐる。私の胸は早がねをうつがごとくになつた。どうしたんだらう、なんでこんなにおどろいたかわからない。まるできつねにでもつまゝれた樣だ。すや〳〵とねてゐた小さい兄さんは私がへんな顔をして、「あゝあ」といつてゐるので、目をさました。「幸ちやんどうしたの、そんな顔して」と言つた。時計を見ると今まさに三時半にならうとしてゐる。私は思はず「あらもう三時半だわ、目をさましてから一時間もたつたのだ。とつぶやいた。」と一分たつたかたゝないかである。「おぎやー」といふ聲がしたので私はぎよつとした。その時まくら元をお母さんが通つたので「お母さん赤ちやんが生れたの」とたずねた。すると「えゝそうよ男の子」とお母さんがおつしやつたとき私はうれしくて無我夢中であつた。お母さんは去つた。あちらでお産婆さんと何やらひそ〳〵と話されて「ほんとにおしい事をしましたね」とお産婆さんはおつしやつた。

私は千丈の谷から落されたごとくがつかりした。

いろ〳〵あとかたづけもすんで夜もほのぐ〳〵と明けはなれて東の空はしらみかゝつた。

震災日記

本郷區　千駄木尋常小學校
第五學年男　上羽正秋

「お母さん御飯はまだ」二階から僕は聞いた。

其時僕は弟をあすばしてゐた「あゝまだですよ」お母さんが言ふ間もなくおこる大地震、ガラガラドシーンと言ふ物の落ちる音助けてー〻と言ふ人の叫び、まるで地獄のやうな有樣、其の時僕は

無我夢中弟をだいて階段をかけおり夢中で外へ飛出した。と間もなくおこる大火災逃げようと思つても地震の爲に逃げられず、と言ふてゐては燒死するばかり、「あゝしようがない」逃げようと立てばころがり〳〵やう〳〵の思ひで永代橋まで來て我家の方を見かへれば、とうに火は我家を燒きつくしたのか見へるは煙ばかり。

逃げのび〳〵芝公園についたとは言へ、食物一つありやーあしない、目黑の知人の所へいつて晝食をたべた其の美味今なを忘れられない。數十分後家を一軒かりる事になつた。

「ヂヤン〳〵〳〵〳〵」時ならぬかねの音に僕は驚かされた。見れば火事でも何でもない。

〇〇人だ〳〵人々はさわぎはじめた。「何に〇人僕等は驚いた、大地震におびやかされ、大火災に燒出され〇人におはれもはやぜつたいぜつめい天は眞を照すもなんにもありやーあしない。

「お母さん逃げませう。」「どこへ」「芝公園へ」家中手に手を取りあひながら、東宮御所の方へ來た。其の時「突貫々々」貨物自動車にのつた兵除さんが、五反田の方へ進んで行く、「しつかりたのむぞ〳〵」と人々がいつた。

「東宮御所へ避難しなさい」其夜は東宮御所へ避難して翌日燒跡さして出ていつた。

火災

本郷區　千駄木尋常小學校

第五學年女　泉　光　枝

九月一日、あの恐しかつた、かなしかつた、九月一日、ちやうど病氣でねてゐたのだ。

すると、午頃あの大地震、家はつぶれる、土ざうはくづれ、家の中の物、あらゆる物が落ち、こわれ、やうやくつぶれてゐない、座敷へ行き、皆んな素足でにげ本店へ來た。

その時はも早通りの方から、黑煙がもう〳〵と上つてゐた。行つた先の本店の後から、又煙が上つてきた。「そら大變」と言ふので皆總立になつて鎌倉河岸へにげた。

逃げたは良いが、もう四方へ火が廻つて、にげる道もない、すこし廣い所があつたので、そこへにげる用意をした。吳服橋を渡る時には爪も立たぬ人であつた。橋を死物狂で渡つて、やうやく東京驛へ出た。

ほつとして腰を下して居る内に又も、そばの西洋館に火がつきさうになつた。

もう死ぬより外に道がないと思つたが、又も元氣を出して、宮城のそばのお堀へ出た。

そこに居ても仕方がないので、前の生命保險のかこひの中に入つた。その夜はそこで、火の海の中で一夜を明した。朝起きて見るともう空は眞白になつてゐた。

私は夢かとばかりになき伏してしまつた。

その中死んだとばかり思つてゐた、伯父さんや伯母さんがたづねてきた。

そしてサイダーやビスケツトをいたゞいた。

今度は宮城前の芝生へ行くことになつた。

そこで小さなバラツクを作つて、そこに六日ゐた。その内にはずゐ分悲しい日もあつた、死物狂ひで食物を買ひに行つたり、水をいたゞきにいつたりしたが、ちつともどに通らない、そして六日目に、自動車をやとつて、林町の伯父さんの所へにげて來て、それから動坂へ來た。

今でもあの時の事を思ひだすと、ぞつとする、毎日々々あれが惜しかつた、これが惜しかつたのにとか、そんなことばかりいつて當時の事を思ひ出してゐる。

忘れられぬ九月一日

本郷區　元町尋常小學校
第五學年男　古屋　茂（十四歳）

九月一日は實にむざんで到底僕の筆では書き盡す事は出來ない。僕が學校から歸つて明日の仕度をして居ると、ぐら〳〵とやつて來て棚の物が目の前に落ちて來た。「はつ」と思つて布團を被つて居た。少ししづまつたかと思ふ時兄さんが、「表へ出ろ、〳〵」とどなつた。いそいで行くと店の陳列棚はひつくり返つて商品が全部落ちて足のふみ場もない有様であつたが、やつと表へ出たら二階にゐた姉さんが眞青な顔をして出て來た。そこで家中皆表へ出た。今まで夢中で氣が付かずにゐたが、前の砲兵工廠の土塀がくづれてゐたり、どこの家の瓦も落ち、中にはつぶれた家もあつた。

ふと神田の方を見ると二三ケ所から黑煙が上つてゐる。さては火事だと思つてゐると、ぐらぐらと又ゆり返しがやつて來た。怪我をして助けられながら逃げてくる人や、荷車を引いたり、子供を負つたり、子供の手を引きながら逃げてくる人で電車道がだん〳〵人込になつて來た。

川一つへだてゝゐるから大丈夫だと皆の人が言つてゐたが、火は段々近くなつて來て、角の松平伯爵邸の内に飛火した。之れは大變と家へ入つて自分の戸棚を明けたら、上の箱がひつくりかへつてゐて、どれを持つて出たらよいかさつぱりわからない、只鞄を掛け帽子を被つて出た。兄さんは箱車に寢道具を入れてゐるが、かさばつてゐるので一生懸命になつて詰込んでゐた。

家中揃つて小石川の親類へいつた。親類の家も大分傾むいてあぶないので、細川子爵の邸内に避難してゐたから、そこへいつた。夜になると三方が火でまるで火の海のやうで實にものすごかつた。

三日に赤羽の兄さんが來て飲食物を持つてきてくれたので、家中兵糧にありついたので大喜び

で食べた。六日には七八里もある道を歩いて赤羽までいつた。道の兩側には、倒れた家や倒れかゝつた家もあつた。瀬戸物のこはれや瓦などが山の様に積んである。此の邊も餘程强かつたと見へる。田舍の叔父さんが「古來稀だ」と言はれた。僕等は命のあつたのが不幸中の幸である。本所の被服廠では三萬からの人が燒死んだと言はれてゐる話だけでも、實にひさんである。東京中でどれ程金で買へぬ物を燒いたか知れぬ、實に惜しい事で有る。あれ程賑かで壯大な建物があつた日本橋、銀座通りも今ははや灰となつて以前のおもかげが少しもない。

時は大正十二年九月一日午前十一時五十八分。

我々は一生忘れることの出來ぬ日である。

御禮狀

本郷區　元町尋常小學校　第五學年女　內堀歌子（十三歳）

此の前の大地震で、私共の住んでゐる此の東京は大抵こはれた上に火に燒かれて、住む家も、」着る着物もなくなつた人が大勢出來て、本當に可哀さうな有樣になりましたが、方々の人々のお情のこもつた澤山の品物を御送り下さいまして、私共はどんなに喜こんだか知れません。

私共の學校もあの時他の家と共に燒けてしまひました。多數の生徒は敎はる敎科書も雜記帳も筆も墨も皆燒かれて、行先もなく泣いて居ました。此先本當にどうしたら好いかと隨分悲しく思ひましたが、其れでもお隣の學校を借りてお情のある皆樣から早速送つて戴いた敎科書や、雜記帳を前にして一生懸命に勉强してゐます。

先日先生から皆樣からの御親切な御贈物の御話を聞かされた時、どんなに嬉しかつたことでせう。本當に有り難ふございます。厚く御禮申上げます。

大正十二年九月一日

下谷區　根岸尋常小學校　第五學年男　關秀則

たゞいまといひながら、家にはいつて父母にあいさつして、五分間たつかたゝないうち急に家がぎい〳〵となりだして壁は落ち、いまいさに家がたふれんとすると、母さんが秀則はやく外へ出なさいといふお聲がきこえたので、外へ出てみると、あれだけ大きな吉原等はおせんべいのやうになつてしまつて、いきもたへ〴〵の人、重傷をうけて血が瀧のやうにながれてゐる人、頭のはちをわつたらしくはちまきをして出てくる人等ひさんな有樣、婦人や少年の中にはないてふる

へてゐる人もあつた。

僕の内の人々は、手早く荷物もみんなだして、うちがたふれないやうにつかへほうをかけたりしてゐる、するとすぐうらから黑い煙が見へて來た。父さんは僕等をのがして、あとへのこつてふせいだが、だめで荷物をなげ命からぐ〳〵あとをおつて來た。

府下へ出た時ほつと一いきついた。

時々づとん〳〵と、大きなものすごい音がしたおぢさん何んでせうときけば、ガスタンクがばくはつしてゐるのでせうといふ。

目的地へついた、もう夜になつてしまつた。

向ふの空をあほいでみると、天は血をながした如くであつた。

四五日たつてやけあとへ來た何十年とかゝつてやつと出來た、大東京はわづかすこしの日で燒野の原となつてゐた。

道ばたには眞黑な死體がよこたはつてゐる、人々がこの人はたしかによく深しておくれたのでせうといつた。

復興の新年

下谷區　根岸尋常小學校
第五學年女　斯波純子

初日の出は勇しく上り始め國旗はひら〳〵と門にひらめく。あゝもう大震災のあつた私共にとつて永久に忘れる事の出來ない大正十二年とも別れを告げなければならぬ。大正十三年の一月元旦になつたのであつた。去年の大震災で淺草方面銀座方向其の他各方面が一夜にして灰燼と化してしまひ、今は復興をはかつてゐる時である。今年は復興第一年の新年である。こう思つては勇氣がみち〳〵て來る、私は心を淸めて御勅語を奉讀した。おとそのお祝ひをして淸き朝日をあびつゝ學校の拜賀式に向つた。心から君ケ代を歌ひ皆さんとお會ひした時は本當に樂しかつた。

お祝ひのお菓子をいたゞき家に歸つて此の第一日を樂しくかるたや、双六に笑ひながら過したしかしいつもと違ひ遊んでばかり居られぬ。大災害によつて得た、大きな教を心にきざんで、四日からはしつかり勉强し出した。今年もしつかりと心を堅くし勉强をして大東京の復興の爲によばずながら出來る限り力を盡さうと思つてゐる。あゝ我等の强き精神はやがて世界にほこる樣な立派な大帝都をきづき上げる事であらう。

震災から復興へ

下谷區

下谷區　忍岡尋常小學校
第五學年男　石渡正滋（十三歳）

九月一日其の日は我が日本人にとつては永久に忘れられぬであらう。
九月一日午前十一時五十八分、とつじよとしておこつた大地震は市中の家をみじんにくだき、又つゞいておこつた火災は東京の半分以上燒いてしまつた。
荷物をもつて逃げ廻る人今でもそれをはつきりおぼえてゐる。
火の手は三日二晩荒れ狂つた。
其の間本所被服廠をはじめ市内各所で人が死んだ。
悲さん。被服廠跡に三萬三千の生命をおそろしい火のせん風は燒きつくしてしまつた。
又震災火災で死んだ人は實に七萬餘おそるべき天の力。
安らかに眠れ氣のどくな人々よ永久に。
さしも荒れ狂つた火も今はまつたく止つた。
たつた三日間の中に荒凉たる焦土と化した。東洋一の大都會、けれども我等は此の愛する東京を元の東京にする。いや元の東京以上にする事をかたくちかふ。
それが我等の第一のつとめだ。

又この震災に死んだ人をなぐさめる事が出來るのだ。
晴天の下にひゞくかなづちの音、それも一つの復興のひゞきだ。
み空に輝く明けの明星よ。
やがて復興するまでの道しるべせよ。

大地震大火事

下谷區　忍岡尋常小學校
第五學年女　安達とり

おそろしかつた日、それは九月一日、私が弟と學校からかへつてまもなくであつた。ちやうどお晝の御飯を父も母も兄弟みんなそろつていたゞいて居る時であつた。とつぜんミシ〳〵と言ふ音と共にうちがたほれんばかりにゆれだした。「あつ地震」私等は一度に立つて二階のない方にかけだした。臺所の方でガラ〳〵〳〵とびんがおちてこわれる音がする。廊下をかけだして表玄關にきた時、あぶなくころびさうになつた、ひもをみじかくした電氣は天井にぶつかつてかさがこわれておちてくるのであぶなくてとても家にはゐられない。はだしで外へとび出し門を開くのも間にあはないくらいに、往來へかけだした。外へ出るより早くお向ふの家の屋根の瓦はずる〳〵

とすべつて「ドシン」とお庭へみなおちてしまつた。かべや瓦のくずれる時たつすなほこりで目も口もあいてゐられない。その中にも地震はなほ一そうはげしくゆれる。そのたびに私等は父母にかぢりついた。電車通りの方を見れば大學の方からもう〳〵と黒煙が上つてゐる。そのうち方々に火事が起つた。三時ごろはもへる煙とほこりで太陽も見えない、私等はたゞこわくて〳〵夕ごはんをたべる勇氣もなかつた。そして一日の日の夜は絶へずゆれる地震と、どこまでも燃えひろがる火におどろかされて一晩中ねずに夜を明した。二日の日も一日と同じやうであつたが、四時頃にあまり火がそばまで燃えて來たので、私等みんな家を捨てゝ逃げ出した。電車通りはつめもたゝない人で身うごきさへもできない。そこをやつと通つて駒込まで行き始めて家の方をふりかへつて見た、ちようど其の時は七時頃だと思つた。まつかな火は空一面ひろがつて燃えてゐる。私はもうきつと家は燒けたと思つた。そしてやけたらあすからすむ家がない、あまりの心ぼそさに涙が出た。そしてまじゆつが原へ來て夜露にうたれながら一休みして巣鴨の親類の家へ十二時頃ついた。そして私は大丈夫火はこないといはれたので安心してねたが、たえずゆりかへす地震でいくどとびおきたか知れない。三日の朝火事も幾らか下火になつたやうだと云ふので、みんなでうちの方へ行つてみるつもりで駒込まで來たが、まだあぶないと言ふので、私はひつかへして父だけが見に行く事になつた。そしてすがものうちでまつてゐるとお晝頃に父がかへつてゐらつしやつた。家はやけないし又火ももう來ないだらうと言はれた時私はほんとうに〳〵うれしかつた。四日の日、火も消へたと云ふので、家へかへらうかと思つてゐる所へ田舍の叔父さんがやつと見舞に來たといはれて來られたから、一同そろつて家路についた。うちへつくと親類の燒けた人々が澤山來て居られた、それでもみんな何のけがもなかつたので、お互によろこんだ。本當に九月一日からは夢中でくらしてしまつた。私は此の大地震大火事でめちや〳〵になつた。大東京が早くもとのやうになるのを祈つてゐる。

復興の東京市

下谷區　練塀尋常小學校
第五學年男　小島喜太郎

燒跡の町に、バラックの家が立ち並んだ。家具屋・荒物屋・八百屋・疊屋などが、商品を山と積んで朝早くから忙しさうに働いてゐる。電車もこのごろは、大てい復線工事が出來て通つて居る。其の間を自動車や自轉車が疾風のやうに、縫つて行く。突當る程多く通る、人々の顏も皆元氣好く希望に滿ち輝いてゐる。復興の町の有樣は、何んとなく活氣に滿ちてゐて氣持がいゝ。よく晴た朝など、すみきつた空氣をとほして、

「チーヨン」「チーヨン」と、大工さんがうつ槌の音が景氣よくひゞいて來る。だん〳〵町がにぎやかになるのだと思ふとうれしい。今日の有樣を、半歲前の大地震のあつた後に、くらべると、何といふ變りかただらう。

あの焦土ばかりで、ぢつと見てゐると、眼がいたくなるやうな町。何所となく、いやなこげくさい臭いがぷーんと、鼻をついて來る往來。着るものも、食べるものもなく、困りきつてゐた人々。それがこの元氣のよい忙がしい人々になつた。

色々な難儀に、會ふ毎に益々元氣を出す人が、大事業の出來る人であり、さういふ國民が多い程、國は榮えるといふことを先生から、習つたことがあるが、我が東京市民が、このやうに元氣よく働いてゐるのを見ては、實にえらいものだと思ふ。

しかしこのやうに元氣よく、働くやうになつたのは、一つは、あの大地震の後に、方々の人々が色々な品物を送つて、困つてゐる人々をすくつてくれ、はげましてくれたおかげだと思ふ。

僕等が學校へ行きはじめた時には、野天で本もなく、なんにもなしに、勉強するので、ずいぶん困つたが、間もなく方々の學校から、本だの學用品だの、黑板オルガン等をもらひ、何不自由なく勉强が出來るやうになつた。

僕等は今度ほど人々がお互に、同情しあひ、助け合つて行くことの、大切なことゝ感じたことはない。僕等は、この有りがたい恩を一生忘れないつもりだ。そして困つてゐる人を見たら、出來るだけ助け合ひたひと思つてゐる。

冬の夜

下谷區　練塀尋常小學校
第五學年女　若林律子

「あゝ寒いお針をするのがいやになつた」

と言ひながらお母さんは火鉢に手をかざした。次の間にはおばあさんや弟たちが眠つてゐる。

あんかの中には妹が「すや〳〵」と小さないびきをかいていかにも心持よささうである。私もいねむりをしておきてゐたがもうねようと思つて床についたら今度は目がさえてねられない。時計はもう十時をさしてゐる

外はだいぶ靜になつて、風の音が物淋しい。やがて「カチ〳〵」と柏子木の音がした。硝子戸がガタ〳〵する度にまた地震かと胸がどき〳〵波をうつ。次第に寒さが身にしみてくる。おもてはもう氷がはつてゐるとみえて一人二人通る人の足音も「カラ〳〵」と聞える。たまにがら〳〵とひゞくのはたぶんから車をひいて行のでせう。

私は思はず「あーあ」と大きなあくびをしてしまつた。するとお母さんが「律子早くおね」とおつしやつたのですぐ向きをかへてねむつたふりをした。

あゝあの恐しい九月一日

下谷區　下谷尋常小學校
第五學年男　岡野信次郎

急に「ごおつー」と言ふものすごい音がしたと思ふと足本がふら〳〵して來た。誰かが「地震だあ」と叫んだ。へいは崩れる瓦は落ちる、頭の上からは砂が雨の樣に降つて來る。僕はたんすのかげへ身をよせた。ゆれる〳〵まるで小舟に乘つたやうだ。「どーん」とものすごい音がしたかと思ふと、もう向ふの二階は見へなかつた。弱くなつたかと思ふと、又急に強くなるやうやくおさまつたのではだしで外へ飛び出した。前の廣場にはもう澤山な青い顏をした人ばかり集つてゐる。「家に行つていすを持つて來なさい」と、父が言つた。僕はこわ〴〵奥に行つて見ると、本立は倒れ壁は落ち足もふみこめない程であつた。地震は二三分おきにぐら〳〵つと來る。空は煙に包まれて、太陽は眞赤だつた。もう三時半。あれ程の廣場も、もう人でうづまつて居る。時々けん兵やじゆんさが今はどこがやけてゐると知らせる。その度毎に人々の顏はだん〳〵青くなつて來る。「あぶないから谷中に行け」と兄さんの命令で谷中に引上げた。谷中はまつたく靜かであつた。そして父や兄に守られて心配な一夜を明かした。

燒けた學校

下谷區　下谷尋常小學校
第五學年女　安達きよ子（十三歳）

九月三十日大宮から歸つて來た時、四方を見渡すと目をさへぎる物も無い燒野原でありました。それをながめた時自然と九月一日の事が目の前にあらはれて來ました。なつかしい私の學校もあの恐ろしい眞赤な火に持つていかれたかと思ふと恐ろしくなりました。學校へ來て見ると煉瓦許殘つてゐて、それが山の樣に積まれてありました。私達と一番仲よしの教室も机腰掛けも影も形もありません。雨天體操場のコンクリートはでこぼこになつてゐます。周圍の燒け殘つた煉瓦塀はこはさうに立つてゐます。

あゝなつかしい學校はなくなつてしまひました。しかし私達は決してそんな事には負けてはなりません。これから前よりも一層熱心に勉強して長い間休んだのを取りかへしませう。

元日の朝

下谷區　東盛尋常小學校
第五學年女　河原タッエ（十三歳）

七時頃目を醒した。傍を見るとお隣の兄さんが、寢ていらつしやつて、誰も居ないので、どうしたんだろうと思つて、よく考へて見ると、夕べお隣のをぢさんやをばさんと一しよに、淺草へ商賣に行つた事がわかつた。私は其時「あゝ今年のお正月は、父母と一しよに喜ぶ事が出來ないのかしら。」と悲しかつた。そしてそうつと床を出た。着物を着かへ、私はばけつをさげて、井戸へ水を汲みに行つた。そこかしこの家ではいそがしそうに、御飯の支度をして居る。いつもお正月なら朝はおいしいお雜煮も食べられるし、樂しく遊べるのに、今年は一人さびしくお留守居をしなければならないのと思ふと、なほ悲しかつた。これも皆あの大地震や大火事の爲である。ほんとにいぢわるな地震だと、にくらしくなつた。水を汲んで歸つて來ると、兄さんが起きていらつしやつたので、一しよに顏を洗つた。それから御飯をいたゞいて家を出た。學校へ來て始めて晴々しい氣持になつた。門には大きな日の丸の國旗が、朝風にそよ〳〵とゆらめいてゐた。

元日の朝

下谷區　東盛尋常小學校
第五學年　平野靜穗（十二歳）

僕は信州に於いて、元日をすました。

時計がちん〳〵となるので目がさめた。あゝ元日だ、うれしいと思つたが、すぐにつまらなくなつた。こんな山の中の正月はおもしろくない。かるたもしない。紙鳶もあげない、こんな山の中で正月をするのより、あのバラツクの都でした方がまだおもしろいと思つた。前の川へ顏を洗ひに堤を下つた。川の水はさら〳〵と流れてゐた。家へ入つた。しばらくして朝飯の仕度にかゝつたが、こんなつまらない正月をこすのかと思ふと御飯を食べる氣にはならなかつた。

しばらくして村の人々が年始に來る頃、向ふの山の頂が赤々として來た。やがて太陽が松の蔭に顏を出した。太陽が松の木からはなれる頃、山のふもとに見える小川の水は赤々と光つてゐた

震災後の私

下谷區　入谷尋常小學校
第五學年男　米倉正壽

私の父は震災當時から病氣になりました。其の後又餘病が出てなくなりました。私は殘念でたまりません。私は父の死後、叔父の所へひきとられてゐます。私はよその子が父と共に歩いてゐるのを見ると、何だか悲しくなつて、「あゝ父が居れば」と思ひます。私は叔父にひきとられてから學問ができるやうになりました。學校も運よく入谷學校へ入學を許されました。私は總領ですからしつかりしなければなりません。私は今一生懸命勉強してゐます。私は早く大きくなつて叔父の商法を覺えて母に安心させたり、又世話になつた叔父や叔母に恩返しをしたいと思ひます。是から私共兄弟三人力を合せて致します。父は初め乾物屋で赤坂で大黑屋と云ふ店を出してゐました。其の頃はそうとうに暮してゐましたが、其の後しつぱいしてびんぼうになつてしまひました。私ども兄弟は元より大きな店を出したいと思ひます。然し私はまだしあわせです。大道で納豆賣などしてゐる子供は誰もかまつてくれないのでせう。私はよい叔父や叔母がゐるからしあわせです。

今朝學校へ來る途中

下谷區　入谷尋常小學校
第五學年女　渡邊カズイ

毎朝々々、梁瀬さんが私の家へ呼びに來て下さるので、毎日呼んでいたゞいて氣の毒だと思つ

ゐますから、今朝こそはと、六時に起きて八時にしたくをして家を出ました。

地震後道路が大へんに惡くなつて梁瀬さんの家へ行く道もずゐぶんわるう御座ゐました。

途中で荷車へ山の様にいろ〳〵な物をのせた人が通つてゐました。

道がぶか〳〵してゐるので、車が其所へはいつて困つてゐました。

私は後からだせる丈の强力を出しておし上げました。荷車はよう〳〵出ました。

困つてゐた人は、喜こんで私にお禮して、ぐん〳〵引いて行きました。

私はあつとよい心もちになりました。東京復興で早く、善い道路が出來ればよいと思ひました。

急いで梁瀬さんの家に行きました。

震　災

下谷區　西町尋常小學校
第五學年男　佐田正二（十二歳）

今思ひ出してもおそろしいのは大地震につゞいて起つた大火災であつた。あの樂しい夏休みの多摩川の水泳もすんだ。第二學期のはじめの日であつた。あゝおそろしい九月一日よ！

僕はあらんかぎりこの日は永久の記憶として殘るであらう。

この日は墨をまいたやうないやな空模樣であつた。時々ぽつ〳〵と降る雨はなんとなく淋し味を含んでゐた。しかし地震の少し前からりと晴れた時にはあんな悲慘事が起らうとは神ならぬ僕には夢にも知る由もなく、樂しくお母さんとお晝の食事をすませた。間もなく午前十一時五十八分とつぜんぐら〳〵と天落ち地さけんとばかりに物すごい音をたてゝあたりがゆるぎだした。お母さんも僕も思はず戸外に出た。其の内にしづまつたので安心をして、家へはいらうとした時に又大きな地震がおこつた。僕は地震のために死ぬのでないかしらと思うと悲しさが一ぱいであつた。ふと思ついたの事は、兄さんと姉さんはどうしたらうかといふことであつた。其の時に兄さんと姉さんは顏色をかへて歸つて來た。家の者が無事でそろつた時にはほんとうにうれしかつた。それからいくどとなくゆるぎだす地震のあるたびにおどかされた。前の道は「火事だ〳〵」とさけんで通る人がある。其の方を見ると、あつちからもこつちからも、黑い〳〵煙があがつて居る。又おそろしいものが一つ增した。

そのうちに子供をつれて悲しそうな母親が荷物をしよつて逃げて來る人等で、道はこんざつして來た。だん〳〵日は暮れて犬のほへるのも、もの悲しく聞へる。今まで人の事のやうに思つてゐたのが、火はだん〳〵家の方にくるので自分等も逃げ仕度をした。本所のをぢさんも燒けだされてきてゐたので、お母さんや小島町の姉さんと皆で一生懸命に上野へ逃げた。上野は人の黑山でどこへいつたら安全な所があるかしらと、たづね〳〵て寬永寺へ來た。こゝも人が一つぱいで困つたけれど、體はつかれるしどこへいつてもこんなだらうと思つておちついてしまつた。

火はだん〳〵ひろがつて來て家も燒けたと聞いた時には、悲しくて涙がこぼれた。さしもりつぱな東京も二日二晩で火の海となつてしまつた。あゝおそろしい自然の力だ。食物はなし飲む水もない、なんといふことだらう。僕はドイツがベルギイに征め入つた時もこんなであつただらうと思つた。世の人々の深い同情で食物も飲物もだん〳〵いたゞけるやうになつた時には、感謝の涙にむせんだ。四五日の後に小石川の知人の所へこしてまず〳〵おちついた。さうして十月の末に元の所へ家をつくつてこして來た。

昨年の事を考へるとまるで夢のやうである、あゝ恐しかつた震災！　然し震災は僕によい教訓をあたへたのではなからうか？

あゝ私の學校

下谷區　西町尋常小學校
第五學年女　川端美代子

五年と云ふ永い間雨の日も風の日も休みなく通ひつめたなつかしい私の學校は、昨年のあの恐

しい大震火災のためにすつかり灰となつてしまひました。

あの校門の櫻の並木や。玄關に茂つたさんご樹、四季色々の花を咲かしてくれた花だん、新しく出來たばかりの澤山の運動器具、あゝほんとうに數へきれない。私は自分の物を失つたよりも惜しいやうな氣持がします。只燒け殘つたのは校門の柱丈であります。これ丈でもなつかしくてなりません。永い夏休みも終つて九月一日、久しぶりに先生にもお目にかゝり、友達にも逢ひ、色々話に時間のたつのも知れないやうであつた。明日から皆共々勉強しませうと希望に輝いて別れて、校門を出ましたが、あれが再び見られぬ西町學校との見納めとは、神ならぬ身の知る由もありませんでした。あの恐しい震災後は田舍に避難して居りましたが、東京の事が氣になつてたまりませんでした。あゝ學校は、先生は、友達はと考へ出しますと、悲しくなつて何度泣いたか知れません。やつと燒跡も片付きバラックも建ちましたので東京へかへりましたが、其の時は變りはてた東京を震災後初めて見ましたので涙が出ました。然し都は早復興氣分が盛んで、何となく元氣付いて居りましたのは、何よりうれしくありました。十一月から學校へ通ひましたが、百二十人もあつた五年女子が、僅か十六名でありましたが、初めは野外でむしろを敷いて、日に照らされながら勉強して居りましたから、雨の日には休まなければなりませんでした。その内に亞米利加から惠まれました。天幕内で勉強するやうになりました時のうれしかつた事。その内にバラックの學校も出來上り、今は昔に似た學校が出來ました。そして生徒もだん〳〵かへつて、私の組も六十四人の多數になりましたのは誠にうれしくあります。そして有難い事には天皇陛下からは、お惠みの金を戴き、内地はいふ迄もなく諸外國から山のやうな救護品を送られ、私達はなんの不自由もなく今日になりました。寒さにマントあり。學ぶにかばんあり、本あり、文房具あり、ほんとうに皆樣の博愛心には有難涙にくれて居ります。ですから一日も早く復興させ私達もよく勉強して皆樣のご恩に報ひなければならないと思ひました。

組がきまるまで

下谷區　御徒町尋常小學校　第五學年男　相田義正（十二歳）

小石川の親類で世話になつてゐる間、お父さんや兄さんは毎日忙しさうに出て行かれる。そして僕等が燒跡の樣子を聞くと、兄さんなどは大げさに「燒跡では往來に死人が足のふみ場もない程倒れてゐる」などとおつしやる。

どうも本當の事がわからない。實際どんな樣子か早く見たくてたまらない。それに親類ののりちやんが勝手にゐばりちらして面白くない。一日も早く元の所へ歸りたいと思つてゐると廿二日

のことお父さんが燒跡から歸つて來て、「けふバラックが出來上つたから明日は移る」とおつしやつた。その晩はあすを樂しみにして床についたが氣がたつて眠れなかつた。翌朝早く起きてお父さんに連れられて電車に乘つた。始めの中は何でもなかつたが公園前まで來て驚いた。何といふ凄さだらう。只あきれて見てゐると、これがお前の見たい〳〵といつてゐた燒野原だとおとうさんがおつしやつた。なる程向ふの方に二三軒のバラックがある外何も見えない赤黑い燒野原だ。「上野廣小路」といふ聲がしたので下りたが、どつちがうちの方だか一寸見當がつかない。幸向ふに見覺えの松坂屋の入口が少し燒殘つてゐたので、それを右に見ながら來ると交換局の前に出た。オヤ爆破されたといふ話だつたのに、ちやんとしてゐる。不思議に思つて近よつて見ると、殘つてゐるのは周りの煉瓦だけで、中はがらんとしてゐた。一回ではこはしきれなかつたのであらう。交換局の角を曲ると同じ樣なバラックが二軒並んでゐる。お父さんが「向ふにあるのがうちだ」とおつしやるけれど、どつちがうちだかわからない。妹が「あつちがうちなのよ」といふのでよく見るとなる程「相田商店營業所」の看板が出てゐた。

次の晩は暴風雨であつた。雨はしきりなしに降る。風はごう〳〵と吹く。家が幾度となく動くので又地震かと思つてはびく〳〵した。しかしバラックがあつて雨風の防がれる僕らは幸福だと思つた。

それから幾日かたつ中に隣に自轉車屋さんの家も建ち、向側の下駄屋さんも建つたので少しはにぎやかになつた。近所には「すゐとん」「牛めし」「牛うどん」など食物はいくらでも賣つてゐるが、綿などを買ふには燒けない和泉町の方まで行かなければならない。

或る朝學校の燒跡へ行つて見た。こはれた塀がまづ目についた。何か書いてあるので近よつて見ると「十月八日に開校します」と書いてあつた。あゝやつぱり近々開校なのだ、やつと安心した。今は見るかげもないわが學校、あれ程の立派な學校を灰にしてしまつたかと思へば思ふ程惜しくてたまらない。ふと角の方に二間四方位の小屋が燒とたんで出來てゐるのに氣がついた。その中には木川先生など女の先生が四五人でお話をしてゐらつしやつた。木川先生がおよびになつたが僕は何となくはづかしかつたので急いで學校を出た。

まちに待つた十月八日が來た。學校へ來て見ると僕の組は十人位しか集つてゐなかつた。

鹿倉君と秋本君が帳面に出席をつけてゐた。友達に會ふと誰もがすぐ逃げた道順や苦しかつたことを話し合ふ。受持の石井先生が笑ひながら「よくにげたね」とおつしやる。「逃げなければ命がありませんよ」といひながら僕も鹿倉君の帳面に名をつけて貰ふ。笛が鳴つて集つて見るとどの先生も御無事であるのに安心したが、組の者全體の顏を見られないのが氣掛りだ。

校長先生のお話があつて又十五日に集ることにして別れた。十五日には少し雨が降つてゐたが

前よりもずつと人數はふえた。そして來週から毎日來ることになつた。漸く月曜日になつた。早くから學校へ來て友達の來るのを待つてゐた。ピーッと集合の笛が鳴る。元氣よく整列する。「今日から授業が始まります」といふ先生のお聲に心がひきしまる。

近縣からの厚い同情のこもつた慰問品の中から帳面と鉛筆とを分けて頂いた時には飛立つ程嬉しかつた。

敷石の上の砂を拂ひ落し席をこしらへて先生の方へ向いた。夏休前までは立派な机で教へを受けてゐたのだが何といふ變り方であらう。先生は時々「お立なさい。冷るから」とおつしやる。

お稽古は一時間で終つた。

二三日たつと欲しい〳〵と思つてゐた地理書と地理附圖を分けて下さつた、涙が出る程嬉しかつた。理科書修身書國史の本なども追々に分けて頂いた。これ程の厚い同情を無にしてはならぬと思つた。間もなく席がきて大層都合がよくなつた。席の上で齋藤先生が東京市の下町と山の手との地質のお話をして下さつたのを今でもあり〳〵と覺えてゐる。

或日米國から寄贈になつた天幕を張るといふお話を先生にうかゞつた。どんな天幕だらうと思つて翌朝行つて見ると、教員室の燒跡へ一つの天幕が張つてあつた。ずゐぶん大きなもので事務室の方に出入口があつて、そこから先生方が嬉しさうに出入してゐらつしやる。生徒も四方からその天幕にさばつて見たり綱を引張つたりして喜んでゐる。前に出來た事務室も先生方が苦心して作られたのださうだが天幕もやはり先生方が小使さんと力を合して張られたといふことである。天幕は續いて六つ出來た。それが追々九つになり十二になつた。始めの頃は時間毎に男女交代で天幕を使つた。大きな天幕といつてもその中に六十人も七十人も入るのだから隨分苦しい。それでも天幕に入るのは樂しみであつた。天幕ばかり使ふ樣になつてから三時間宛の授業が五時間にのび學科も增した。天幕に不自由がなくなると、第一期のバラック校舍の建築に着手したので北側の天幕は南の運動場へ移された。「大工さんの邪魔にならない樣に」と校長先生から御注意があつた。

その建築が出來上ると五年生は又男女交代で新教場を使ふことになつた。廣くてきれいで机のある教場はまるで別の世界の樣な珍しい氣持がしてむしろもつたいない程である。

第二期の建築が完成して天幕は廢せられた。ふり返つて考へて見ると露天で教はつた頃は、隨分みじめであつた。それを救つてくれたのは實にこの天幕である。今日かうしてバラックに入るにつけてもその恩を忘れてはならぬ。かうして二學期も終らうとする、或日金子、木川、重松、岩下の四先生とお別れすることになつた中にも金子先生は僕らの組が始めて學校に上つた時教はつた先生である。木川先生には昨日まで教へて頂いたのである。なぜお別れしなければならない